
キバラナ

地藤零一

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キバラナ

【Nコード】

N9628P

【作者名】

地藤零一

【あらすじ】

冒険の旅へ出かけるはずだった夏休み最初の日、初島有馬は立ち寄った先の神社でおかしな生き物を見つける。有馬はその生き物“キバリ”を相棒として、新たな冒険の旅を企てるのだった。

第一話ノ1

荷物は多くなくていい。

テントと寝袋はいらない。

水筒はある。飲み水は確保できないこともあるから。

地図。鍋。鉛筆。アルミのコップ。携帯コンロと釣竿。火種とナイフ。食糧はちよつとで済む。お金はあんまりかからないと思う。準備は万端なのだった。

万端なのは準備だけだ。

何も問題ないはずなのに、もう二時間待っているだから。

——なんだよちくしょう。信じていたのに。当てにしていたのに。

あんなやつ放っておけばよかった。一人で行けばよかった。

誰にも話さなければ良かった。

今年の夏も、一人旅になりそうだった。

山の木々が傘を差す道を、有馬は一人で、自転車を引いて歩いている。

真夜中もいいところ。海岸沿いの道で、波音はずっと止むことがない。

リュックひとつの軽装備だが、それはこの道三年の余裕というものである。

あとは気持ちの問題だ。

それが一番問題だった。

乗ればいいのにサドルにも跨ろうともしないのは、気持ちが後ろ向きだからだろう。もしかしたら、ひよっとすると——そんな淡い希望を抱いて、三十歩に一回ぐらい背後を確認しているからだ。そ

して、そのたび落胆に後悔を上乗せしている。

有馬は、約束をすっぱかされたのだ。

何が悪かったのだろうと思う。単なる家出と思われたのか。

それは違う。これは「冒険の旅」なのだから。

外には色んなものがある。違う町がたくさんあって、それぞれ特徴があつて、今までにない新しい感動をくれる。家の都合で結婚を決められたりなんかしないし、勉強して努力すれば職を選ぶ自由があるし、住む人の考え方だって違うはずだ。

有馬は、そういうものを見たり触れたりしたいのだ。

だから、せつかく誘ったのに。

今日、何度目かのため息。

——もういい。あんなやつ絶交だ。名前で呼ぶのもやめてやる。

少年Tにしてやる。

有馬はこの道三年のベテランで、ベテランであるからには旅の孤独さも知っていた。感動を共有できない相手がいないのは淋しいのだ。

町境の橋に差しかかる。山から流れる小さな川が、海に勢いよく落つこちていくところ。町にいる子供にとってここまでが遊んで良い場所で、ここからが行つてはいけな場所だ。

右手を見れば、鳥居の向こうに古い神社の参道がある。

今日はもうここに泊まろう。

どうにも億劫だったのだ。

鳥居をくぐり、石段を昇り、社の脇に陣取つて、有馬はシートに横になった。

見たところ人の手が入っている。森の侵食を押しとどめ、そこだけドーム状の空間になっていた。真上には円に縁取られたせまつくるしい夜空。外界から切り離された箱庭のような場所。

眠りたいのにどんどん目が冴えていく。

旅の門出はいつだって高まる気持ちを抑えられなかった。一步踏み出すごとに胸が躍って、息継ぎするヒマも惜しくて、前へ前へと

勇む気持ちに追いつくのが精一杯だった。

こんなはずじゃなかったのだ。

最悪の出発になったのはもちろん疑いようもなくＴのせいだが、よくよく思い返してみればＴは最初から行く気がなかったのかもしれない。終業式の日には教室で旅の素晴らしさを語ってやったときも、Ｔは単なる付き合いで相槌を打っていたのかもしれない、自分も行ってみたいと言われて舞い上がっていたのは実のところ有馬一人で、本気で言ったわけでもないのに勝手に話を進められＴは迷惑だったのかもしれない。

だったらそう言えつつうの。

よけい腹が立ってきた。

雑草をぶちぶち抜いて苛立ちを誤魔化した。やむにやまれぬ事情があったとは事ここに至って考えない。Ｔにとって冒険の旅は優先順位の下に位置した代替可能な選択肢なのだ。きつと、夕飯が美味そうだったからとか、借りた本をまだ読んでいなかったとか、宿題を早く済ませたかったとか、ケツが痒かったとかそんなものを約束に上書きしてしまったのだ。あいつは、「冒険の旅」という未知を前にしてビビったのだ。

忘れよう。

そもそも、あんなやつはいなかったのだから。

有馬はリュックをごそごそやって一冊の本を取り出した。

こんなとき鎮静剤になりうるのは本なのだ。

用意してきたのは文庫本一冊。ボロボロに擦り切れて黄ばみの浮いた冒険の本。自転車のライトを外してお気に入りのシーンだけばらばら拾い読みする。カバーも無いし、折り目だらけで、ページは今にもこぼれそうだけれど、そこに書いてある文字はいつも変わらず元気をくれるのだ。有馬が定期的に「冒険の旅」へ出るのだから、大抵は本の影響だった。

読んでいくうちに、居ても立ってもいらなくなる。

——ああ、冒険がしたい！

遺跡発掘がしたい。船旅がしたい。海底に沈んだ神殿を探索したい。雲間の空を飛んでみたいし、悪の教団によって強奪された財宝を取り戻したい。

仲間に裏切られたくらい、なんだ。そんなものは新たな冒険を彩るための布石であって、むしろ望むところであり、険しい道はただこれからののだ。こんなことを気にしては冒険者失格なのだ。有馬はバツと起き上がって、せまってくるしい夜空に叫んだ。

「やるぞ

——！！」

嫌な気持ちは出口を見つけ、その叫びとともにかつ飛んでいった。うむ。冒険はこうじゃないといけない。

寢床に丸まり明日のことを考える。まず第一課題として隣町に辿り着くこと。これは二日あればできるし、道路があるのだから土砂崩れや侵食がなければ危ない旅でもない。五年前の地図でも大丈夫だと思う。問題は隣町から先で、山間はほぼ崩れているし道が北にしか開けていないから北に行くしかないのだけれど、あそこには関所があるし、そこを潜り抜けそこなって過去に三回逮捕されたことがあった。四回目から成功したのは海路を選択できたからで――

ばき、と木の割れる音がした。

真夜中で、森の中だった。

はつきり聞こえた。今も聞こえる。小枝を折るような音ではなく、木の皮を剥がすくらいのもので、現在進行形の破壊の音。ばり、ばり、ばり、ばり。

何かいる。近くに。――熊？

ライトが点けっぱなしだったことに気付いて、慌てて消して息を潜めた。今さらだ。

鹿か何かだと思う。だって、熊なんて冬にしか見たことない。腹ごしらえをしそこねた冬眠前のヒグマが、誤って町に下りてきてときどき熊狩り部隊が出動することがあるくらいだから。

つまり、そう、熊はいるのだ。

うつ伏せに這いつくばったままじりじり鳥居まで下がっていった。

大丈夫だ。まだばれてない。見廻りに来ただけなのだろう。つま先が段差を掴み、這ったままの姿勢で石段を下りていく。中ほどまで来ると、身を翻して一気に駆け下りた。食われておしまいなんてごめんだ。自分にはやりたいことがまだまだあるのだ。こんなところでたばつてたまるものか。——と思って、足を止めた。

まだ、熊と決まったわけじゃないだろ。

見てもいないのに逃げるのか。

そもそも自分が望んでいたのは「こういうこと」じゃないのか。死んだって自己責任の危険な、しかし心躍る出来事。

今日あったことを人に話すときどうするよ？ 寝ようとしたら木の皮を剥がす音を聞いたから一目散に逃げてきた。あれは熊だ間違いない。何の脚色もしなければ、たったそれだけのことだ。正体も定かでないものにビビって逃げ出したただけだ。

そんなのは、土壇場でケツをまくった丁と何が違う。

せめて、正体を確かめよう。

鳥居の先の社を見上げた。

荷物も置いてきてしまったのだ。

結局それが引き金になって、有馬はじりじり引き返していった。せめて自転車と携帯コンロと財布と本とシートとライト。ようは全部を持っていかねければ、これからの旅に支障が出る。石段を這い、息を殺し、泥棒のような慎重さで境内を覗き見てみる。

木の割れる音はもう聞こえない。

代わりに、しんと透き通る静寂があった。

社の脇で、何かが動いていた。

有馬が陣取っていた場所。あと少し離れるのが遅かったらと思つてぞつとする。なんだろう。熊じゃなかった。もっと小さい動物だけれど、暗くてよく見えなかった。狸じゃないし兎じゃないし犬でも猫でも鼬でもない。

そのとき有馬は異音を聞いた。

ぎち、ぎい、べきべき、ぎい——

金属のひしゃげるような。

暗闇に目が慣れてくる。その姿が見えてくる。どんな生き物か
と、思っ、て目を凝らしていたけれど、それは有馬の知っているどんな
生き物でもなかった。

さらに言えば、それは生き物ですらなかった。

白い、三頭身の「何か」だった。

第一話ノ2

手があつて、足がある。

どちらも極端に短くて、子供の描いた絵のようだ。

鏡餅みたいな頭にでっかいボルトを埋め込んだみたいな適当なギョロ目が二つ。どう見たって昭和の時代のブリキ人形か何か。無機的な外見。

ただ、その玩具おもちゃみたいな何かは、明らかに意思をもつて動いていた。

短い手を懸命に伸ばし、細い金属フレームを引つ掴んで、バ力でかい口をあんどぐり開けて、むしゃむしゃと、有馬の自転車を食っていたのだ。

——宇宙人だ。

昔の映画で見た。怪我をした宇宙人が、アパートの屋上に住み付いて、住人みなでその世話をするやつ。

映画の中でその宇宙人は電気と金属を食べて生きていた。きっとこいつも同じ。絶対そうだと有馬は思った。

怖いと言えば怖かつたし、興奮していたし、混乱もしていた。あんな小さな身体で自転車なんかを食うさまは異様だった。しかし、ひよつとしたら友好的な宇宙人かもしれず、ここで何もせず逃げ出したら一生後悔するかもしれない。

だいいち、ここで逃げたら、なんて人に話したらいい。

自転車を失くした言い訳が「宇宙人に食べられた」になる。

もう自転車なんかどうでも良かった。家の手伝いをして貯めたお金でやつと手に入れた、今じゃレアな輸入品だったけれど、お金ならまた貯められる。自転車も手に入れられる。そしてこんな体験は二度とできないかもしれない。

そこには「冒険」があつた。有馬の求めていたものがあつた。

宇宙人が自転車を食い終えて、ゲップまで吐くと、新たに獲物を

探し始めた。きゆるきゆる目を回転させて、次に見つけたのは、有馬のリュックサックだった。持ち上げたり転がしたりして中身を出そうとしている。じれったくなつたのか、隙間を無理にこじ開けてすっぽり中に入れてしまう。

チャンスだ。と有馬は思う。

どういうわけか思ってしまった。

友好的に歩み寄るわけでもなく、警戒して逃げるでもなく。

猛ダツシュを決め、宇宙人の入ったままのリュックを引っ掴んで身を翻し、石段を駆け下りていた。

海岸線は無我夢中で走る。堤防の端を登って、後ろを見ながら歩んだ道を今度は全力で戻っていく。その先には、広大な田園地帯を彼方まで伸びる高架橋と、密集した町並みがあつて、川沿いに、海を埋め立ててまで延命した巨大な滑走路が横たわっている。隕石迎撃基地の名残で、今はほとんど使われていない。

山に近い丘陵地帯に、いくつも風車が並んでいた。

ふもとの通りに面した場所には小さな家と、家よりも大きな倉庫が建っている。

表札に「立駒高原風力発電所管理事務所」とあり、その下へおまけのように「初島」の姓がくつついている。

有馬は、風車の管理を請け負う家の子だ。

だから、初島さん家の息子は、夜も凍る丑三つ時に転げ帰って来たことになる。父は寢床で身じろぎしたくらいだが、母の里子は目を覚ました。身を起こして変に思う。有馬は、夜中にこっそり家出したはずであり、机に今度も「旅に出ます。休み中に戻る予定」と書き置きを残していた。季節の境目になると、ふと思い立ったように有馬は冒険と称した家出をするのだ。でも一日未満は最短記録。幽霊でも見たのか忘れ物でもしたのか。年中縛り付けることはできないので、今はほぼ黙認状態だけれど、こんなふうに騒がしく戻っ

てこられてはたまらない。またきつく言い含めようと里子は静かに起き上がる。

そのころ、有馬は極度の興奮状態にあった。

有馬の部屋。冒険小説や歴史書、その他がらくた類に溢れ今にも床の抜けそうな鳥小屋に、頑丈で水にも強いリュックサックの中に、本物の宇宙人を捕獲したことが信じられないでいた。それは今もこそごと動いている。

見間違いないかな。何か別の小動物とかに――

頭を振る。あるわけない。自転車を食う小動物なんてどこにいないんだ。

ファーストコンタクトの台詞はどうしようと考えた。有馬は真剣に真剣に、今までになく真剣に考えた。ようこそ地球へ。こんにちは。友達になろう。びっくりさせてごめん。ワタシハチキュウジンダ。長旅ご苦労。地球人代表初島有馬である。貴殿の来訪を心より歓迎する。違う。もっとこう万人に訴えるような、切実でシンプルな――ええいめんどくさい。有馬はリュックを逆さにして中身をぶち、

「――あっちゃん何時だと思ってるの！」

抱きかかえてひっくり返った。

「……なにしてるの？」

いきなり入ってきた里子は、ものの見事に呆れた。

「そこに座りなさい」

そんな場合じゃないと思う。宇宙人を捕まえてきたのだ。これをみんなに見せて回って自慢しなくてはならないのだ。この際始めに見せる相手が母親でも構わない。宇宙人を捕まえた、なんて言ったら呆れを通り越して正気を疑われるだろうけど、信じられない話だろうけど、現物がここにあるのだから、堂々と鼻を高くできる。

「母さん！ それよりこれ見てよ！」

里子が説教に入ろうとしたところ、リュックを逆さにして遮った。今度こそ、床にぶちまけられた携帯コンロ。コップ。釣竿。鍋。ナ

イフ。携帯食糧と鉛筆。

ぶんぶん振った。それ以上何も出ない。

床に押し付けると、リュックはぺしゃんこになった。

「——いない！　なんで!？」

「これがどうしたの？」

何もできずに、有馬は黙りこくる。

その後、里子のお説教で完膚なきまでに絞られた有馬は、突然恐ろしくなつて布団に入った。自分が見たものは紛れもない現実だったはずだけれど、それが妄想ではないという確かな自信が持てなかったからだ。変人扱いなら慣れていても頭がおかしいとは思われない。確かな証拠があればいいのに。そう思いながら床について、今度こそ寝ようと思い、

自転車。

確かな証拠。

自転車は、食べられたのだ。

目をゆっくり開けて。辺りを見回す。

四畳半の狭い部屋。有馬は木製のロフトベッドにいる。見下ろせば棚を溢れ積み上げられた数々の本。ぶちまけられたキャンプ道具——鍋がなくなっていた。

真つ暗な部屋。誰もいないはず。徐々に闇に慣れていく目は、積み上げられた本の根元でごとごと動く影を捕らえる。

——もしかしたら、夢かもしれない。

今さら有馬は疑った。学校でTに冒険の話をして、わくわく気分で帰ってきて、約束の時間になるまで仮眠でも取っておこうと思つたのが実は全ての始まりで、約束をすっぱかされたのも、自転車を食べられたのも、宇宙人を捕まえて全速力で戻ってきたのも、母親に怒られたのも全部ぜんぶ刺激的な冒険を望んだ自分の、都合の良い夢だったのかもしれない。

ばり、ばり、ばり。

何かをちぎって食べる音が、耳障りなくらいはつきり聞こえる。

——夢だから何だってんだ。

夢だって、現実だって、自分のやることは変わりなかったはずだ。意を決して、有馬はついに電気を点けた。

目が合った。

一方的に「合った」と思った。

何せ、そこにいるのが宇宙人だと思っていたし、まさか鍋に手足が生えて、ヤドカリみたいにカサカサと動いていたとは思わない。大きな口をあんぐり開けて有馬の冒険小説を食いちぎり、何食わぬ顔をしていたとは思わない。

「あ——っ——!!」

『キバリー船長の航海日誌』が食われていた。

部屋に置いていた、文庫本じゃない原本の方。それを鍋と一体化した（擬態化した？）宇宙人がバリバリと、せんべいみたいに食べいていたのだ。有馬の宝物を。

飛びついて即座に本を奪い取った。「あーあーあーあー……」と力なく喚く。なんてこった。もう半分なくなっている。無理言ってみつけてきてもらったのに。そして無理に譲ってもらったのに。秘蔵のブロマイド十枚と交換してもらったのに。

犯人は足元にいた。

有馬の顔を見上げて、げっぷーと息を吐いて「もっと無いの？」みたいな顔をしていた。

どういうわけか、そう感じた。

「おまえ、なにものだ！」

鍋は、不可解そうに首を傾げ、

「ハラ減った」

有馬は大いに錯乱した。頭に血が昇って驚いて感動して、笑いさえ込み上げてきて、わけが分からなくなったあと、一気に脱力した。宇宙人が喋った。すごい。すごい方がいいが待つて欲しい。怒りと興

奮がないまぜになって、とりあえず一発殴らせてくれないかと思う。
動揺しちゃいけない。

「何なんだよおまえ！ 本なんか食べて、人の自転車まで食べて、
なのに腹減った？ 食いすぎだよ宇宙人のくせに。それになんて鍋
なんだよ！」

恨みがましさが先行した。混乱から抜け出せなかったようだ。
鍋と一体化した身体から、ぼん、と頭が生えてきた。

「食っちゃまった」

むちゃくちゃな生命体だ。

「ソレ、くれヨ。もつと欲しイ」

返事も聞かず、有馬の持つている本にかぶりつく。「あつあつあ
つ」と振りほどこうとするが、諦めと倦怠が押し寄せてきて、一氣
に抵抗する氣が失せた。どうせもう読めない。

「マイ……ミヤイ……ミヤイ……うみゃい……うみゃい」

不意に異変が起こった。宇宙人の身体中を、黒い文字が這い出し
たのだ。

びっくりして、それが小説の中で使われている文章だと気付くの
に、しばらくかかった。

様々な場面の文字が肌を這って循環していく。目を凝らして見る
と、白い身体の表面に木目模様が浮かんでいた。

おかしい。変だ。よく考えたら自転車を食べたのに、そのまま持
って来れたのもおかしい。食べたものは一体どこに吸収しているの
だ。質量が変わってる？ ブラックホールだって蒸発するのに、物
理学の明日はどっちだ。

そのおかしさを、もう恐ろしいとは思わなかった。

本を食べ終わった宇宙人は「うめー。やべー」と呟いて、きよろ
きよろ辺りを見回していた。

有馬は手近にあったお気に入りの一冊を差し出す。

「くれんの？」

じつと、その「食事」の様子を観察する。

文字が身体を張っていくたびに、浮かび上がっていく不思議。未知の塊。目の前で起こっている。銀河系内ではありえない物質の交換。

有馬は二度目の同じ質問をした。

「ねえ、きみは、何なの？」

それはめんどくさそうに、片目だけ動かす（顔面がうごいた！）。

「んあ。オレっちはキバリーってんだよ」

「それ、小説の中の台詞……」

はしけ舟のようなボロ船で海を渡り、人に拾われては事件に首を突っ込んで引つかき回して、なぜか最後には解決してしまう、無精者のくせ人情家で自由気ままに生きるキバリー船長。

やっぱりそうだ。

こいつは、知識を吸収しているのだ。

ひとたまりもなく夢中になって、有馬はたくさんの本をその生き物に与えた。

「キバリーって宇宙人なの？」

「宇宙人？　ばっかおめーイマドキそんなの流行んねーよ」

「じゃあ何さ。地底人？」

「とんでもねー。オレっちは神さまだよ」

とにかく話を合わせるために名前は「キバリー」で固定することにする。

「やっぱり地球を侵略しに来たの？」

「侵略う？　人はね、日々何かを侵略して生きてるもんよ」

「見た目ロボットじゃん」

「うっせーうっせーばーか」

話しているうちに分かったことがある。

ものすごい、テキトーな性格なのだ。

これは恐らくキバリー船長の気性を踏襲しているものと思われる。子供っぽいところなんかソックリだった。たぶん鳥の刷り込みなんかと同じで、最初に食べた知識に大きく影響されているのだらう。

こんなことならSF小説を先に食べさせておけばよかった。そうすれば、地球に来た目的なんかもスラスラ話してくれたはずだ。

そう、キバリーは宇宙人なのだから。

地底人や妖怪や天才発明家のロボットや古代文明の遺産や、色々と考えようはあったけれど、この世ならざる法則で生きているものなら、やはり外宇宙人説が濃厚だ。地球を侵略しに来たのである。それが親睦に値するかどうか確かめに来たのだ。かつての人類なら即宇宙のごみとして焼き尽くされていただろうけど、戦争がなくなつて久しく、日々の活力を生活に向けざるを得なくなった今なら、人も捨てたもんじゃない。頑張つて、地球の良いところをアピールすれば宇宙人の保養地にでもしてくれるかもしれない。

そのとき、有馬にできることが決まった。

キバリーに、地球を見せてやるのだ。

自分はその水先案内人になるのだ。

「うー、もー食えない」

マンガみたい腹を膨らましたキバリーは、その場でごろんと横になつた。

「そーやおまえ、名前なんてーの？」

「ぼく？ ぼくは初島有馬」

謎の生き物と話しているのが、今さらになつておかしくなる。

「そ。んじゃオレっちは寝る」

「寝るの？ 待てよ。まだ聞きたいことが……ておーい」

反応なし。聞く耳持たず。実に一方的にキバリーは眠ってしまった。

現実感が戻ってくる。本に囲まれた部屋、足元にはキバリーがいて、ロボットみたいな外見ですうすう寝息を立てている。触つてみると柔らかい。人肌に近い温度。

ここで自分も眠つてしまえば、すべてが消えてしまう気がした。朝起きて、これが夢だったとき、立ち直れるだろうか。

そんなふうに考えながらウトウトしてしまう。考えても仕方な

いいことは考えない方がいいのだ。さほど心配もせず、有馬は落ちる
ように眠った。

第一話ノ3

立駒は奇跡的に隕石被害を受けなかった町で、海面侵食に追われながらも、年中潮風に晒されながらも、トタンに錆を浮かせても根強く残っている。

その錆つばい町の商店街、堤防へ出る道の曲がり角には、この町で唯一の本屋があった。

入り口を開けたすぐ横の会計台に居座って、今日来たばかりの新聞を斜め読みしているのは、立駒のマドンナを自称する及川芹名嬢である。

セリナは高校がなくなつてからは店番を暇つぶしにして「この店を継ぐ」と言い張り読書三昧の日々を送っていた。人を煽るのが何より得意で、気性は活発。近所の子供ともよく遊んでいる。そんな彼女が物静かに読書していると、妙な色気があつて、町の男連中に大人気だった。しかし、カウンター裏の伝票箱は未整理のまま溢れんばかりの賑わいであることを、平積みの本に埃がたまっていることを、多くは知らない。本の流通なんて首都でしか見なくなつた今もオーナーである亨ジイが飛び回ってくれるおかげで新しいものが手に入るのだけれど、セリナは一人をいいことに商品を手垢まみれにしている。

今日も仕事そつちのけで本を読み、「ああ……」と感嘆の溜め息を漏らしたりしていた。

「冒険つていいわね……」

重ねて言うが店には一人しかない。

「でも子供ができれば、家で子育てしなくちゃいけないわよね。男の人って放っておくとどこまで行っちゃうから、横で喜びを分かち合いたいと思つても、置いていつてしまうのね！ ああなんてこと！ 繋ぎ止めておくことがこんなにも辛い！」

目をうるつとさせて、一人でくるくる踊る。他人が見たら哀れみ

を向けられかねない光景だ。

そのとき入り口の鐘が鳴って、セリナは一瞬で居住まいを正した。
「いらつしゃいま……あれ？」

「こんちわー。ちよつと探したい本があつてさ」

颯爽と店に入ってきたのは有馬だった。この店の常連で、よく店を手伝つてくれて、薦めた本を片端から買つてしまふ可愛い弟分だったけれど、昨日町を出たはずではなかったか？

有馬とは旅に出るとき、必ず一言いう決まりを作っていた。

「どうしたの？ まだ準備するものあつたの？」

「いやー、そうじゃなくてね」

「何かあつたの？ 有馬がまだ出てないなんて」

「出るよ。出るけど、ちよつと必要なことができたんだ」

「必要なことつて？」

「自転車の、雑誌とかない？」

「なんで？」

「ちよつとね……」

あやしい。

有馬に冒険小説を読ませて、冒険の旅を焚きつけたは、主にセリナだ。だから齒の奥に物の挟まったような言い方は許せないのだ。監督する義務があるのだ。

有馬は申し訳なさそうに頭をかいて、言った。

「ちよつとね、自転車が壊れちゃったんだよね」

「え、壊れたの！？ 何かあつたの！？」

「昨日……ガケから落つことしちゃつて……」

嘘だ。店の前には有馬の乗ってきた自転車が停まっついていて、ぱつと見どこも壊れていなかった。「あるじゃない」と指摘すると有馬はぶんぶん手を振って誤魔化す。

「あれは壊れてるんだって！ フレームもガタガタでギアのワイヤも切れてるし、ホイールも歪んでるからまっすぐ走れないんだよ。ここに来るまで苦労したんだって」

「有馬は怪我してないの？」

「大丈夫。頑丈だから」

やっぱりおかしい。苦勞して買った自転車を壊してしまったのそうだし、自分で直したい気持ちも分かるけど、全然まったくそのことで、落ち込んでいる様子がないのだ。妙に焦っているというか、浮ついた気持ちを背に隠している気配すらする。

「だからそういう雑誌ない？ 専門書とかでもいいけど」

「あるわよ。けどお、何か隠してるでしょ？」

「なんでもないけど……」

湿っぽい目で「ふーん」と呟き、一滴また一滴と有馬の額に汗が吹き出る。

セリナはふっと肩を落とした。

「はぁ……私もずっとお姉さんではられないのね」

「何言ってるんだよ……」

「よし！ 弟分の門出を祝ってお姉さんまけちゃうから！」

二三冊見繕ってやって有馬を見送る。蝉の大会唱。外はうだるくらいの暑さで、ほんの数メートル先の風景が歪んで見えた。セリナは前後左右を見渡し、ヒマそうに角を曲がってきた通行人丁を見つけると、瞬く間に店へ引きずり込んですぐ有馬の後を追った。

あの顔は、何か面白いことを企んでいる顔だ。

隠し事なんて許さないのである。

セリナは鋭い。

あれは、相手を泳がせようと演技している顔だった。

有馬はときたま後ろを見ながら自転車を引いて歩いていた。高架橋下の道を西へ西へと進んでいく。駅を裏から通り過ぎると、田んぼを真つ二つにして伸びる細い通りに出ていった。正面の果ては山そのふもとにぽつんと、有馬の通う学校がある。

「おいおい。まだ着かねーの？」

無視。背後を再び確認。見渡す限り人の姿はない。

セリナはついてきてないようだ。

「しんどいよお。もう元に戻っていい？」

「だめだつて！　しゃべるな！」

「ちえー」

夏休み中、学校は開放されている。校庭と図書室は自由に使っている。いいのでヒマな誰かはいるかもしれないけれど、人目を気にするのならここの方が断然良かった。

敷地に入っていく。見渡せば草野球ができる程度の広さ。体育倉庫にも電源棟にも鉄棒にも焼却炉にも、端から端まで人影は見当たらない。念のため、窓から職員室を覗いた。よし。いない。そのまま裏手に回る。フェンスと校舎に挟まれた薄暗い砂利道。その先にあるのは山で、角からちよつと首を出せば表の様子は丸見えだった。「もう戻っていいぞ」

自転車がぶるつと震え、毛糸の玉が解けるようにしゆるしゆる形を変えていく。いくつもの紐が団子状になって確かな輪郭を帯びてくると、形になったのはキバリーだった。

「ああ、肩こった。やっぱ二本足が一番だな」

キバリーは、自分の食べたものに变身できるらしい。

擬態能力。昨日もこうやって鍋に成りすましていたのだ。細部が曖昧で失敗することが多いけれど、それでも十分すごいことだった。きつと現地の支配生物に成り代わって地球を乗っ取るための能力に違いないと有馬は思う。

「で、オレっちをこんなところに連れてきて何する気だい？　エロいこと？」

「ふふふふ……それはね、これだ！」

大げさに広げて見せたのは、さっき買ってきた自転車のカタログだった。

昨日の夜、MTBを食べられて、有馬は非常に困っている。自転車が無いと旅に出れない。外の世界を見せてあげられない。地球征

服をするつもりならもつと外の世界を知るべきなのだ。

「これを食べればどこでも行ける！」

「はあ〜？　なんで」

「キバリーの变身つて精度が足りないと思うんだよね。だから、これを食べれば自転車の色んなことが分かって变身しやすいと思うんだよね」

「自転車欲しいだけじゃね？」

「違うよ！　地球征服のために必要なことなんだ！」

強弁に主張する。キバリーは渋々といった感じでカタログを口にしてくれた。

そのとき、キバリーの鼻にハエが飛んできた。

「ふえつく——」

慎重に遠くから後をつけてきたセリナは、有馬の目的地は学校だろうと見当をつけていた。

塀に身を隠しながら敷地内を覗いてみる。

有馬の姿は無かった。中に入ったか校舎裏に回ったのだろう。ずいぶん周りを警戒しているようだったから、セリナの疑念はますます深まる。学校の裏で野良猫を飼っているくらいならまだ許せる。でも、そんな感じじゃなかったし、新しい自転車の品定めなら家ですることができるはず。なのに、一目を避けてここまで来たのは、誰か他の人物にあの雑誌を見せたかったからではないだろうか？　逢っているところを、他人に見られたら困る、誰かと。

——考えすぎだと思う。許せないのは話してくれなかったことそのもので、何を隠しようと思つても咎めるつもりなんてないのだ。有馬はそんな子じゃない。うん。でも気になるから確かめ、

校舎裏で爆発が起こった。

前触れも何もなかったので、身体のコが抜けるくらい仰天した。

「——何ごと!？」

校舎裏に回ってセリナが見たのは辺り一面に広がったガラクタの山だった。サドル、ペダル、グリップ、自転車の部品類。校舎の窓が粉々になって割れていた。バラバラに千切れた無数の本。無数の鍋。無数の自転車のタイヤ。脈絡のない無数のあれこれ。

「なにこれ……？」

驚きすぎて寸でのところで向こうの角を曲がった影に気付かなかった。

セリナが目を丸くしているうちに、有馬は学校を出て山沿いを走って逃げていた。

緩やかに斜面が波打つ高原地帯にさしかかり、有馬の家が見えてくる。そのまま部屋には戻らず有馬は、隣の倉庫に飛び込んでいった。

埃っぽい倉庫の中で息を荒げて鍵を閉めた。抱えていたキバリーが「こいつ大丈夫か？」という顔で見上げる。正気じゃない目がある。

「——キバリー」

「なんぞ？」

さっきの爆発は、ものすごくしゃみだった。

くしゃみをした拍子に、今まで食べたものが出てきたのだ。

ただ吐いたなら良かった。なのに、中には同じ表紙の本や、同じ形の鍋がいくつも混じっていた。つまり、何が起こったかと言うと、「食べたものを、増やせる？」

「んあ。頑張ればな」

事の重大さがやっと呑み込めてくる。

この際、どうやってそんなことができるかなんて気にしない。キバリーという特殊な生物にそういった機能があると受け入れるしかない。説明されたってきつと分らない。有馬はずんずん奥へと進み、物置になっている場所から思い切りシートを取っ払った。盛大

に埃が舞い、押し隠せない感情が笑みになってこぼれた。

「これ……なんだと思う？」

「あーん？ 日本郵便局とか書いてるな」

バイク。モーターサイクル。化石燃料で動く発動機付き自転車。

「キバリー……昔は石油つてばんばん採れてたらしいけど今だともうほとんど無いんだ。戦争が終わったときから無い無いって言われてたけどさ、隕石のせいで国に申請しなきゃ普通の人は使えない。

うちって風車で電気作って町に回してるんだよ。ソーラーシステムとか、レンズの日とかに貯めて、ほとんど電動」

「へえー」

「いまどきバイクなんて誰も使えないんだよ」

それでも、今ここにある。在りし日のスーパーカブは赤い輝きを放っていた。

「整備して、燃料さえあればまだ使えると思うんだ」

「へー、そいつは面白そうだなにゃー」

「これに乗って世界を回ろう」

勢いに任せて、大風呂敷を広げるのだった。

「こんな何もないところよりもっと色んなものがある場所に行ってみようよ！ そしたら絶対おもしろいよ！ バイクのこと勉強して使えるようにするからさ、キバリーもついてきて一緒に旅をしようよ！」

自転車だったらせいぜい日本中を回るくらいだ。バイクなら世界を回れる。自分で整備して、キバリーに燃料を作ってもらって、たくさん冒険できる。隕石のせいで世界中が水浸しになった今でも日本はアジアの隅に浮かぶ小さな島国でしかない。

「うーん？」

キバリーは首を傾げた。

「世界を回れるんだよ！ 今は国がばらばらでみんな内側に引きこもってどんどんちっちゃんくなってるんだから、地球征服でもされないと人類はひとつになれないんだ！ せっかくだからぼくたちでし

てやろっじゃないか！」

作業台に足をかけ、無闇にガッツポーズを取り「目標、世界一周！」とスローガンを掲げた。

「地球侵略ねえ……オレっち別に侵略しに来たわけじゃねえんだけど」

「ええええおっええええええッ！」

死ぬほど驚く有馬。キバリーの方が気後れしていた。

「しようよ侵略！」

実を言わなくても有馬のやつは侵略とか征服とか冒険とか浪漫とか、そういう言葉に弱いのである。やっと野望を叶えられると思っていたのだ。

「じゃあキバリー何しに来たんだよ！」

「なんかこー、わーっ！　ってしに」

「わかんないよ！　もつとグタイテキに！」

「そうだな……」

きらりと目が光り、不真面目なキバリーが、刹那真剣な雰囲気帯びる。

「たくさん『タノシイこと』をする、だな」

「テキトーだあ！」

「ケッ！　一生にヒマつぶし以外のことがあるってのかよウストラボケ！　おめーのやりたいことだってけっきょく道楽だろーが！」

「なっ！　ちが！　ちが……くないけど」

「ならその道楽に命をかける！　これがオレっちのやりたいことさ！」

有馬は天啓を受けた気がした。キバリーの小さな体が神々しい輝きを放って見えた。

テキトーなやつだなあと舐めていたけれど、そういえば「キバリー船長」はやるときややるアツイやつなのだ。

なら、上手くのせれば、説得できる。

「キバリー……道楽を極めるにもこの町は、狭いよ」

「んー？ かもなー」

「たくさん楽しいことをするには、外の世界を知らなきゃだめさ」

「そうなん？」

「そう！ 絶対そう！ こんな町にいたら一生飼い殺されてやりた
いこともできないよ！ 男なら世界を目指さな！」

「別に男でもないけどなー」

メスだろうとオスだろうと関係ない。狭い世界で小さくまとまっ
て完結しているコミニティに繁栄なんか夢のまた夢。もしかた隕石
危機みたいなイレギュラーが起きたとき生き延びることができるの
か。異常気象や台風や洪水なんかが起こったら、作物が育たなくな
ったら、どうにもならない自然の驚異は過去に幾多も経験したが、
それを回避できたのは物流という文明の恩恵に預かっていたからだ。
交易をしに外へ出なければ人類なんて滅亡するのだ——と何も知ら
ないキバリーに熱弁をふるう。まるで、今にも人が滅びかかってる
みたいな言い草だが、国も自治体も銀行もちゃんとその手の努力は
していて、有馬が心配する必要はあまりないのだけけど、とにかく
自分の目で見ないことには何も始まらないの一邊倒で、冒険の旅は
楽しくて崇高でカッコイイ果たすべき目標で、これを成さぬは人に
あらずと明朗快活な語り口。

そんな勢いに、キバリーも当てられたのか、

「世界、おもしろーかもな」

「——！？ でしょ？ でしょ！？ よっし！ そうと決まれば計
画だ！ 地球侵略計画始動！ 第一目標はこの町を出ることだ！」

やることが決まり、有馬の目は今までになく輝き、キバリーのボ
ルトみたいな目は困惑気味にくるくる回った。

第一話ノ4

かくして、その日から有馬の地球侵略日記が始まった。

計画の第一段階として移動手段を確保するにあたり、有馬は自転車屋を襲撃した。婆さんに先に逝かれて、跡継ぎもなく店のパイプ椅子根を張り千年樹を気取っている小此木じい様は、その昔、隕石迎撃機の整備主任だったらしい。そこでなんとかバイクの直し方を教われないか頼みに行ったら、紐閉じのぼろっちい整備マニュアルを投げてよこされた。

「暗くても……手探りでいったもんよ……」

じい様は、わざわざ背中を向けて語った。

こうしてカブの整備マニュアルを手に入れた有馬は、さっそくエンジンをバラしにかかった。一回バラして掃除してもう一回組み直せば、致命的な故障でもない限りエンジンというものは動くらしい。

そしてさっそく壁にぶち当たる。

整備するにも、油が無いのだ。

ただ単に掃除するなら、風車整備の応用でなんとかあったが、キヤブレーターの調整には灯油とガソリンがいるし、エンジンの潤滑油は不可欠。さらに規格品の消耗部品は今じゃ取り寄せがきかない。点火プラグもライトもバッテリーも無いのである。

そこで工作班の出番だった。

元々付属の部品から、変身能力と増産能力を使って、完品を再現するわけだ。

しかし、キバリー工作長はいわずもがなのボンクラである。ライトを一個作るのに百個の失敗作を吐き、バッテリーを飲んで酔っ払い、点火プラグを鼻に詰め「ロケット発射!」とか言って飛ばして遊んだ。「光る機構」を我が物にすると自分の目を光らせたり所構わず放電したり、足にタイヤを付けて自走したりもしたが、工作精

度は相変わらずテキトーの一言で、山のような出来損ないから当たりを探り当てることが一番の重労働だった。

そして、こと油の問題は、さらに有馬を悩ませた。

大抵どの町にだってガソリン屋くらいはあるが、今は一部の物流にしか本当に使われてない。それが欲しかったら、どうしても金がいる。ちよつとでいい。ほんの3リッターくらいで、あとは増やせるのだから。

親に無心するほど、有馬は落ちぶれちゃいなかった。

端から端まで1km超の湾曲した砂浜に、海の家が一軒ある。

この町が一年でもっとも賑わう季節が夏で、海の家はTの家だ。

資金調達のバイト先として勝手知ったる有馬は、親父さんに「よろしく頼む！」と快く受け入れられた。ボートや浮き輪のレンタルに、材料の買い付け接客水周りの整備、果てはライフセイバーまで、八面六臂の働きで大いに活躍している。

それを不気味がったのが、何を隠そうTである。

普段からは考えられないような馬車馬ぶりは、自分に対する当てつけではないか。あの日、約束の場所に行けなかったことには何の言及もなく、うそ寒いものを感じていた。

「なあ……この前さ……」

勇気を振り絞って、表でトウモロコシを焼いている有馬に、申し開きを試みてみると、

「この前って!？」

「ああ、うん、だからな」

「労働って楽しいな! T!」

「ティー? え?」

「醤油なくなりそうだから持ってきてよT!」

「いや、だからTって」

「Tの家は羨ましいよ! こんなにたくさん仕事ができてる! うち

なんかどつかぶつ壊れないとまともな仕事にならないからね！」

忙しすぎて相手にされない。この時期だけはエアロトレインのダイヤが二倍三倍にも膨れ、他所の町の人間がどつと押し寄せてくるのである。海岸沿いで駅があつて飲食店があつて宿泊施設まであるこの町は、今日び稀な保養地なのだ。Ｔが涙目になつていようと、稼ぎどきを逃すほど有馬はヒマじゃないのだつた。

しょげかえつたＴが、とぼとぼと店に戻っていくとき、堤防と店の隙間にあるガスボンベの陰から、しきりに手招きをするセリナがいた。

どうやら有馬を見張つていたらしい。アホ面で引つ張り込まれたＴは、かどわかしに遭つた乙女のように怯えた。

「ねえ！ 最近の有馬おかしいよね！」

「おかしい、と申されますと……？」

「いきなり、ここでバイトしてることとか！ ホントだつたら今ごろ旅に出てつてるのに！ あんなサワヤカに労働の喜びを噛み締めてるのとか！」

「やー……ボクもオカシイって思つてたんですよ」

「おかしい！ おかしすぎるわ！」

セリナの取り乱しつぷりと言つたら、人生の予定が狂つてしまつたかのような有様だ。

「あの……それよりセリ姉、家の店番は」

「ねえ何か有馬の周りで変わったことなかった！？ ショックなところか、頭打つたとか、知らない女の子と一緒にいたとか！」

「いやあーまさか有馬に限つて……」

目の泳ぐＴ。立駒へ人的資源の流入が相次ぐ昨今、余所者なんて珍しくない。けど確か有馬には決まつた相手がいるはずで、色々文句は言つけれど、まんざらでもなかったはずだ。きつと与り知らぬところで男としての責任感が芽生えたとかナンかだと思う。

「あ、そういえば。あいつ、自転車失くしたらいいす。ウチでバイトしてるのつて新しい自転車買ったためじゃないっすかねー」

「なくした……？」

セリナは何が気になるのか振り返ってうーんと唸る。呪文のように呟く自転車、鍋、自転車、鍋の文言。隙を見てそろそろと逃げ出す。

そんな調子で一週間が過ぎた。

給料袋を受け取ると、まっすぐ家には帰らず有馬はご満悦の表情でガソリン屋へ向かった。

海に流れるぶつとい川にかかった鉄橋の手前に、そのうらぶれたガソリン屋はある。表には紙にマジック書きで「油あります」との看板がセロハンテープの加護を受け今日も風に揺られていた。ひとつ間違うと車の退避所か、野菜の無人販売所か、精米所か何かに見えてしまう。事務所ではその店主が、グラビア雑誌を顔に載せいびきをかいていた。

「おい、憲ジイ、憲ジイ！ お・き・ろ！」

「——なんじゃい！ 敵襲か！？」

カウンターをばんばん叩いた。

「仕事だよ仕事。起きなよ」

「……寝とらんよ」

「寝てたじゃん！」

「起きとつたよ。有馬が来たときからな……ふあ」

憲ジイはまだ眠そうな顔でカウンターをのそのそ出ていく。

「しかしなんでお前みたいなのが燃油なんか欲しがるかの。火炎ピンでも作るのか？」

「作るか！ 今バイク直してるんだよ」

「バイク？ ああ、ジローのか。あいつ郵便やってたからな」

給油機の前でタンクの蓋を回しながら言う。実を言うと有馬は、倉庫にあるカブの出自を知らない。ジローというのは祖父のことだろっけれど。

「なんだジローの真似事か？ ガソリンエンジンなんて珍しいからな。電気自転車には無い加速がいい。昔を思い出す」

「うちのおじいちゃんって郵便局員だったの？」

「知らなかったのか？」

「だって生まれるずっと前に死んだって」

「そうだったな。お前さんは知らんだろうが、ジローはかつていい郵便局員だったんだよ。ヤローの息子とは折り合い悪かったみたいだな」

跳ね上がるメーター。注がれるガソリンの匂い。

「んで、バイク直して何すんだよ」

「行けるところまで、行こうかと」

「そいつはいい。だが道楽に使うにや過ぎたシロモノだぞこりゃ」

「ご心配なく。ケーカクは立てているので」

「そうかい」

有馬は興味津々の様子で憲ジイの横についた。

「それよりかつこいい郵便局員って？ うちのおじいちゃんってどんなだったの？」

祖父の話なんて滅多に聞かない。家族の昔の話とか、珍しかった。「ああ、ジローのやつは鉄砲玉だな。戦後の建て直しもままならないうつてときに配達屋にかこつけてあちこち走り回ってたんだよ。治安も最悪だったのにな」

「でも、道路めちゃくちゃだったんじゃないの？」

「道路ができてきたのなんてずっと後だ。ガタガタになったのは二次襲来以降だよ。バイクが使えるえってんであいつ飛行機引つ張り出してきて」

「ヒコーキ！？」

「赤く塗ってマーク入れて東のレッドバロンだとか騒いでたっけなあ」

夕空を見上げる憲ジイ。有馬はひたすら聞き捨てならない。

「うちのおじいちゃんってパイロットだったの！？」

「おーそうさ。郵便配達員でありパイロットであり射撃の名手だった。何十年もやっという一度も金巻き上がらなかったのは、あいつくらいのもんさ」

盗賊に遭わなかったとか、そういう意味だ。

有馬はぐいと身を乗り出した。

「それでそれでっ!？」

「興味あるのか？　じゃ、あいつがワケありの花嫁を配達した話でも」

バイクのことも忘れて、たくさんの武勇譚を聞いた。老人連中が昔話に花を咲かせているのは、よく見るけれど、どうしてこんな面白いことを聞き逃していたのか、有馬は不思議でならなかった。

家に帰ってから夜遅くまでマニュアルを穴が空くまで睨み、有馬はエンジンと格闘していた。憲ジイに話を聞かされ、俄然やる気が出てきたのである。祖父も生まれ付いての冒険家であり、自分はその資質を引き継いでいるのだから、何としても、一刻も早く、旅支度を整えなければならない。その一心で有馬はバイク整備に明け暮れた。

「しかしまー、よく飽きねーでやるわな」

服に付けたバッジが、また呆れた感じに言った。

キバリーには、目立たないようバッジに変身してもらっているのだ。家の中で留守番なんて嫌だ嫌だとうるさいので、仕方なくこの措置だった。

「飽きないさ。楽しいよこれ」

手と顔を油まみれにして、有馬も弾んだ声で答える。

「意味わかんねーってボヤいてたろ、さいしょ」

「うん。でもちよつとずつ分かってきた。ほら、エンジンのここがコイルになってて、キックすれば点火するようになってるんだよ。ここに水が入ったり錆びてたりすると、通電しにくくなってから

ないんだ」

「ほへーと無関心そうなキバリー。こういう細かいことはあまり興味が湧かないのだろう。有馬もつい最近までそうだった。」

「何でも自分でやってみたいと分らないよね」

「お、調子コイたか？」

「うるさい！ 実際そうだろ。最初は何も分からなかったけど、知ってくうちに面白くなるんだよ。自分が今まで知らなかった場所がどんどん埋まっていくのって、なんか面白いじゃん」

「うーむ、それはイチリあるな」

「バジがぱたぱた開いていって、キバリーが床にころんと落ちた。バラバラにして店を広げたエンジンの部品ひとつひとつを、品定めでもするように矯めつ眇める。」

「ボウケンってのもそういうもんかもな」

その眩きからは、人間的な思慮がうかがえた。

分かってきてるじゃないかと思う。見知らぬ場所に行って、見知らぬ風景を見て、心の地図を広げていくと、自分が内側から大きくなっていくような情感を得ることがあるのだ。

だから有馬は冒険が好きで、旅を止められないのだった。

「でもよー、全部自分のにしたら、どうなるんだ？」

「全部って？」

「ボウケンするところ、全部」

「フフフ……それは、征服したってことさ！」

自信たつぷりに言ってる。

「旅が終わって、見るものがなくなったら、別のことに興味がいくと思うんだ。『旅』を制覇しても、知らないことはたくさん出てくる。このバイクみたいに、まだまだ知る楽しみは増えていく。世界は広いんだぜ」

「スパナを立てて、いっちょまえにうそぶくと、キバリーはぴょんと跳ねて一回転した。」

「そついうのをひつくるめて世界征服か！ すげーな！」

気が合ったのが嬉しくて、うへへへーとだらしく笑う。

そのとき、いきなり倉庫の扉が開いた。

一息に血の気が失せた。ノックもなしにシャッター脇の通用口に立っていたのは、里子だ。おにぎりの載った皿を手に、何食わぬ顔で中を見回していた。有馬はエロ本を見ているところを目撃されたみたいに憐れなほど慌てふためく。

「んあなあ、何用ですか？」

「ん。夜食持ってきたから」

「ソウですか。有難う。ソコ置いといて」

「ねえ。あっちゃん誰かと話してなかった？」

「誰もいないよ。ほら。ラジオだよラジオ」

破れかぶれで、置物のように固まっていたキバリーを掲げ、背中のスイッチを押すふりをした。意を汲んでくれたのか「……ガガ……ガガ……チンハココニ、コクタイヲホジシエテ……ピー……チュ……」
「リョーナルナンジンミンノ、セキセーニ……」とよくわからん音を出す。

「変なラジオね」

「おにぎり！ おにぎりうまい！ お母さんの作ったおにぎりは最高だ！」

「あらそう？ ありがと」

早く出てってくれと心の底から祈る。慌てれば慌てるだけ怪しまれるのだから、無理に追い返しはしない。けれど、息子がバイク遊びに呆けて真夜中まで起きているのに、気を遣って食事まで持ってきてくれるなんて、何か他の目論みないか有馬は勘繰ってしまった。

キバリーさえボ口を出さなければ、大丈夫だとは、思う、けど。

「ねえ、ちよつと聞きたかったんだけど」

身構えた。

「明日、珠樹くんところでアルバイトあるの？」

「え？ うん。明後日まで行って、終わりだけ」

「そう。お父さんの仕事、手伝ってもらおうと思ったんだけど」
「やだよ」

即答した。里子も慣れたもので、最近は眉もひそめない。

「そ、なら私が手伝うから。あっちゃんも遊んではかりないでちゃんと宿題しないさいよ」

「……遊びじゃない」

その呟きは聞こえていたのかどうか。里子は一度振り返って、そのまま出ていった。

扉が閉まる。冷えた沈黙が落ちる。キバリーが子供のような目で見上げてくる。

「なに？ おめー父ちゃんとナカワリーの？」

「悪いよ。バカ息子って呼ばれる。でも、別にそんなのいい」

「いいって？」

「やりたいことがあるから、どうでもいい」

整備に戻る。部品を拾ってブラシで磨いて油の付いた布で拭く。

約束したのだ。海開きから十日間は客が集中するから、そのあいだだけ有馬は手伝う。目標額には達したし、燃料も手に入れたけれど、最終的にはキバリー任せだから、余裕はあった方がいい。家の手伝いなんか、してるヒマない。

「それよりさ、今度は東に行こうと思うんだ」

「なんかあんの？」

「うん。都がある。東に行くとずっと町がないから今まで行けなかったんだけど、バイクの足ならすぐ着けるよ。線路沿いの道まっすぐだからね」

「都会はこえーぞお」

キバリーは幽霊みたいに手をおどろおどろしく丸めた。なんだよそれと苦笑の有馬。

離れに響く金属音。絶え間ない笑い声。
夜が更けていく。

第一話ノ5

海の家での仕事も、もうすぐ終わる。

遊び疲れた子供が親の背で眠っていた。夕日はすでに沈みかかって、昼間に作った砂城が潮汐にさらわれていく。亡者のような長い影がまたひとつ消えていく。今日はもう店仕舞いで、流し台で水の流れる音と皿の鳴る音が、波に乗って交互に聞こえた。

有馬は、デッキブラシで床を洗いながら、そわそわしている。

早く帰りたい。

昨日、キバリーの吐いた燃料で、エンジンが動いたのだ。

トントントン拍子に進んだ。タイヤを付けてチェーンを絞めて油を差してライトを点けた。試乗してみると動かず、ギアを入れるのを忘れていて、慌てて入れたらびっくりするくらいの速度で走って、前輪が持ち上がった。死ぬほどビビった。

それから、ものすごくわくわくしてきた。

昨日の夜のうちに身支度をして、出て行こうかと思ったけれど、約束事は守らなくちゃいけない。十日間きっちり働いて貰えるものを貰って十全の準備をしてから出発する。バイクでの移動は速くて寒いから、風除けの上着がいる。目も痛くなるからゴーグルが欲しい。途中のことを考えると食糧は多めに用意したい。自転車のときより積めるから、前は持つて行けなかったあれこれをどう積むか――など、仕事でもそんなことばかり考えていて、早く沈め早く沈めと太陽に念を送っていた。

今日の夜に決行するのだ。

バケツの水を撒いて、ラストスパートをかける。出発のために体力を残しておこうなんて考えは無い。この掃除を終えたら終わり。買い出しに行つて、夜になったら出発するのだ。もう誰も止められないのだ。

「おい有馬くん。珠樹のやつ知らないか？」

厨房から、親父さんが顔を出した。珠樹とはＴの戒名である。

「さつき、ゴミ拾いに行くって外に出てきましたよ？」

「あー、悪いけど呼んできてくんねえ？ 掃除もう終わりでいいから」

お安い御用と引き受けて、有馬はすぐ砂浜に出た。

見渡す。昼間の喧騒を思わせる無数の足跡。空は一面茜色に染まっている。右の防波堤から左の端まで、遊泳区画すべてに目を走らせても、帰り支度を整える観光客がいるだけ。Ｔの姿は見当たらなかった。

——フケた？

推測は二秒も経たず確信に推移した。ぶっちゃけ探すのがめんどくさかったからだ。どうせ仕事サボってどこか遊びに行ったのだ。

親父さんにはそう報告しよう。Ｔのことなんて知ったこっちゃない。

海の家に戻ると、堤防の上に男女二人組を見つけた。

Ｔだった。ガードレールに腰掛け、誰かと談笑している。

相手など見なくても分かった。いつも何かと先輩風を吹かせて嫌味を言ってくる、二個上のヤーコである。本名は楠木弥子。「まさに」と形容できるほど有馬の大嫌いなタイプで、ついでにＴの許婚だった。

海の家に戻って、親父さんに見たままのことを報告した。

けれど「じゃあ仕方ねえか」という感じの対応をされ、有馬はついしかめっ面になる。他はどうか知らないが、相手を勝手に決められるのはこの町の悪しき習慣だと思う。

まあいいや。関係ない。

給料袋を貰って、さっさと暇を告げた。

西日がまぶしくて、堤防の下を歩いていると、ふと誰かの気配を感じ、有馬は振り返った。

ほんの数メートル後ろを、ヤーコがつけてきていた。うげ。と口

に出して仰け反る。

「やっと気付いた。ホント勘悪いわねアンタ」

「用があるのなら声かけろよ」

「アンタがどれくらい周り見てないか、確かめてやりたかったのよ」
「ヤーコは有馬のすぐ後ろで立ち止まった。その表情を一言でいうと「憤懣やるかたない」といった感じで、いつも怒りの矛先を探しているフシがあるのだ。黙っていれば深窓のご令嬢みたいな美人なのに、それさえも鼻にかけているところがあって、もうとにかく有馬は全方位的にこいつのことが大嫌いなのである。」

「そろそろまた出てくんだってね」

今日の火種はそこらしかった。

Tのアホめ。口を滑らす相手を選べ。

「なんだよ……文句あるのかよ」

「無いわよ。ゼーんぜん。アンタ一人で行って野垂れ死んでくれるならね」

何の遠慮も仮借もない、侮蔑的な笑みだった。

「ただうちの珠樹をたぶらかして一緒に連れて行くななんてだめ。何考えてるの？ 珠樹にもし何かあってもアンタじゃ助けられないんだから」

「なに決め付けて」

待て。ヘンだ。

なんでそこまで知ってる。

「……この前珠樹が来なかったのって」

「そうよ。アタシが止めたもの。あんなロクデナシに付き合って行ったら怪我するだけじゃ済まないって。自分のことしか見てないんだから、絶対ひどい目に遭うって言ってやったの。珠樹はいい子だから、素直に聞いてくれたわよ」

瞬間、閃光のような怒りが弾けた。

「——よけいなことするなよ！」

「余計なこと？ アタシのセリフよッ！ アンタが変な気起こさな

きや言わずに済んだのよ！ ばかなの？ …… ああそうねバカだったわね。ごめんなさい。馬鹿が伝染るからもう珠樹に近付かないでくれる？」

「ヤーコが口出しすることじゃないだろッ！」

心底馬鹿にしたふうに、やれやれと頭を振られる。

「ホント幼稚ね。アンタみたいなガキに外の何がわかるの？ 誰もいないところで冒険ゴツゴツして、オレかっこいいーって浸ってるだけじゃない」

否定の言葉も出てこないくらい頭でブチブチ切れる音がした。自分のしていることは断じてゴツゴツ遊びなんかじゃない。空腹になつても常に食糧があるわけじゃなし、病気になつても怪我をしても助けてくれる人はいない。土の上で寝て雨の寒さに震えて、水の残りを心配して、命の保証なんか無い、本物の冒険なのだ。なのに——

ヤーコの言いたいことは、鉄板に書いたみたいなた台詞だ。
——安全な場所があるのに、わざわざどうして危険な場所へ行くのか。

何も分かってないのだ。

「言いたいことはそれだけだから。くれぐれもまた変な気起こして、珠樹に関わらないでよね。別にアンタが一人で行くなら大賛成なんだから」

それだけ言うと、ワンピースの裾を翻して引き返していく。

惚れ惚れするほど嫌な捨て台詞で、有馬はぶるぶる震えていた。

「……キバリー。空き缶」「ほいきた」

胸のバッチからぼろっと空き缶が落ちてくる。仕事収めに観光客が持ち込んだゴミを片付けるのは、この十日間でもっとも神経の減る作業だった。しかし、今このときは、有馬もあの心無い観光客の一員となつてやるのだ。ぶおん、と大げさな踏み切りから放たれた黄色い空き缶。低空を裂く凶暴な軌道。

「あいた——っ！！」

小気味良い音が鳴って、ヤーコが鬼の形相で振り返ったとき、堤

防沿いの小道にはもう他の誰の姿もなくなっていた。

真夜中まで待った。

窓をこっそり抜ける。荷物を積んで倉庫裏にあらじめ停めてあったカブを出し、音もなく出発する。

町の果ては、基地とガソリン屋の鼻先にある鉄橋だ。

昔は軍事関係の車両がよく行き交っていた。基地が放棄されてからはほぼ無用の長物となっているが、ロクに整備もしないで何年もここに居座っている。

有馬は、橋の手前で立ち止まった。

装備を確認する。

「アリマ。忘れ物は？」 「なし」

「燃料は？」 「満タン」

「気分は？」 「落ち着いてる」

キバリーは、後部キャリアボックスに四肢を伸ばしてくくり付いている。タコの擬態みたいで、ほとんど荷物の一部になっていた。

「ついに行くぞーって感じ、ある？」

それが、あんまりないのだ。

とうに覚悟は済ませていたのか、あまりにも上手くいくので、地に足がついていないのか。

どちらにせよ、ペダルを蹴ってスロットルを開けたが最後、果てることのない冒険に飛び出していくことだろう。

「心配事とかねーだろな」

「ないよ……あるとしたら、これからのことだ」

「何も言っただけでよかったのか？ タマキってヤツに」

「もう気にしてないし」

「じゃなくてさー、あいつ顔にごめんって書いてあったからよ」

思う。キバリーはすごく人間くさい。

最近はまだ異世界から来た不思議な生物というより、俗に染まっ

た意地悪妖怪みたいに見えていた。最初からそうだったけれど、キバリーに神秘性とか宇宙的恐怖とかを期待するのは筋違いなのだ。大口叩いておいて、基本やる気がない。

「いいよ。珠樹は悪くないから。ヤーコのやつはむかつくけど」

「おやまあ大陸的なご気性」

くすくす笑う。変なやつだ。

心に妙な余裕があつた。前の旅はこうじゃなかったのだ。気持ちに身体を追いつかせるのが精一杯で、まだ見ることもない景色を思つて、駆り立てられるようにただ先へ先へ進んでいた。今みたいにしみじみとした笑い方はできなかった。

なんかいいなと思う。仲間いると気が楽になる。

「それじゃ、行きますか」

「ますか」

有馬はシートに乗ってキックペダルに蹴りをくれた。

スロットルを捻ると、軽やかな爆音をもってエンジンは応えてくれた。

「——さあ立ちはだかる障害はこれまで幾多の旅人を飲み込んできた、難攻不落の川だ！」

「おー、そのセリフ」

「ここを越えれば、温かいスープもパンも雨露を凌げる寝床も、自分で見つけなくちゃいけない！」

キバリー船長の航海日誌にある、後に良き相棒となる少年イマを鼓舞した台詞だ。

「君にその覚悟はあるのか！ 苦難を乗り越える気迫があるのか！」

キバリーはノリノリで応えた。

「——ありません！ なぜなら、固い決意や覚悟は真の苦難に直面したときにこそ行うものだからです！ こんな橋ひとつは苦難のうちに入りません！」

「よく言つた。なればこそ、気楽に行こう！」

クラッチを蹴る。ギアをニュートラルからローへ。

重たい加速。二速に蹴ってどんどん景色が流れていく。太い川。長い橋をライトで照らして、闇を切り裂き、肩で風を切っていく。さらに加速。あつというまに鉄橋の出口まで差しかかった。

ここを飛び出したが最後まで後戻りはできない。温かいスーブも寢床も自分で探さなくてはならず、死んだら自己責任の旅路が果てることなく続いてる。

恐くはなかった。一度たりとも、恐いと思ったことはなかった。旅の門出はいつだって希望に溢れていたからだ。やりたいことがたくさんあったし、行きたい場所がいくつもあった。今まで見つけられなかったものも、二人でいれば探しやすいはずだ。これからは、もう一人旅じゃないのだ。

そう思った瞬間、有馬は鉄橋を越えていた。

平坦に伸びる道。地平線のその先まで障害物は無い。

初めて自分の意思で橋を越え、初めて夏でも風が寒いことを知る。そのときの感動といったら内側から胸が破裂しそうなくらいだったらしい。興奮して暗闇を走っていることも忘れ、キバリーにその感動を伝えようとして、後ろを向いた。

だから、そこにあるべきものが見当たらないのが、しばらく理解できなかった。

思い切りブレーキを踏む。後輪がロックして横滑りして、道路に跡を残しながら十数メートル進んで、止まった。有馬は、もう一度振り返って確かめる。

キヤリアボックスと一体化していたはずの、キバリーがいなかった。

「キバリー？」

振り落とされたのだろうか。

転回して後ろに明かりを向けた。暗闇の中に有馬はあの気の抜けた三頭身を探す。エンジンがぶつぶぶ、と不平を漏らすように唸り、息を呑む。

人がいた。

季節は夏で、真夜中だった。

生温い風が肌にじっとり張り付いてくる。

有馬ははじめ、それを幽霊だと思った。

真っ白な二本の足は完全に死人のそれで、音もなく、虚ろな表情でそこに立っていた。息をするのも忘れて、目をそらすこともできなかった。後からちゃんと思えば、怪しい箇所がいくつもある。辺りは暗闇。その人物は橋の入口に立っていた。有馬が止まっている場所からは何十メートルも離れている。表情なんて見えっこない。バイクのヘッドライトが及ぶ範囲でそれが「人」に見えたのは、月明かりの加減か、蚊柱でも立っていたに違いなく、最初に人と決め付けてしまったからそう見えたに決まっているのだ。

実際、そこに人はいなかった。

何分も立ち止まっていて、やっと確かめようと思って、トロトロ引き返していくうち判った。幽霊の正体見たりなんとやらで、そこへぼつんと立っていたのは真っ白なキバリーだった。

「キバリー、何して――」

言いかけて、呑み込む。

身体中に変な紋様が浮かび上がっている。それが本を食べたときのように、目まぐるしく動いていた。キバリーが何かを理解しようとしたら、外側からの刺激を受けると決まって起こるこの現象。そのときばかりは有馬も、何と声をかけたらいいか分からなくなる。物凄く集中しているところへ水を差すのは悪いというか、一瞬息が詰まるというか、キバリーが異生物であることを思い知らされるといふか。

模様の移動が収まると、キバリーはぼけらつとした顔で有馬を見上げた。後ろに倒れ込んで、逆立ちして、一回転して元に戻る。

「どうしたアリマ？」

それはこっちの台詞だ。

「……ほら、乗ってよ。行くよ」

謝る気も起きなくなつた。ここに立っているということはつまり、走り出した直後に落つこちたということだから、そんなのは乱暴に運転した自分じゃなくてキバリーがまぬけなだけで、とにかく悪いのはキバリーだ。と思うことにした。

後部キヤリアにとびつき「ごーごー！」と調子よくあおつて、腰に手を伸ばしてくる。有馬は、仕切りなおして下っ腹に気合を込める。

出発。

橋から出てすぐ、また急ブレーキで止まつた。

ちゃんと、今度こそキバリーはしがみ付いていたはずだ。

なのに、出口を越えたところで、後ろから思い切り引つ張られたかと思うと、腹に感じていた感触がちぎられるように無くなった。

また橋の入口に、キバリーが立っているのが見えた。

わけが分からない。

どうして入口の方に戻っているのだ。橋の途中まで付いてきたのは確かなのに。ずっと背中になっていたのに。どうやったら、あんな一瞬で何十メートルも離れた場所に戻れるっていうのだ。

腑に落ちないというより狐につまれました、という顔で有馬はまた引き返していく。戻った先でキバリーは、短い腕を組んで、背を後ろに曲げて、うーん、と自分でも納得いかないふうに唸っていた。

「どうしたんだよ……？」

「うんにゃー、なんかムリ」

「ムリって……なんで？」

「わっかんねーけど、出るなつて」

「出るな？ 誰が？ 何が？」

「この町が」

その先何を言われても、有馬は納得できなかっただろう。

たとえ論理的解釈や、科学的根拠があったとしても、そこに転がっているものは理不尽な障害に違いなかったのだから。

キバリーが何者で、どこから来たかも有馬は知らない。もしかすると本当に宇宙人かもしれない。地底人であり、古代文明が残した超兵器かもしれない。妖精、妖怪、魑魅魍魎。異次元からの使者。神様。ともかく何の理由があつて、何故ここにいるのか、その正体をキバリーの口は一切語らない。

分かるのは人間じゃないってことだけ。

でも、そんなのは、関係無かった。

どうしようもない怒りがわく。それはときどき、有馬がこの町で過ごしている時間、周囲から注がれる針のような視線、それと似ていた。

理解しがたいと、蔑むような、哀れむような。

川底に積もる澱のように生臭い閉塞感。

どうしてみんな、平気でいられるのだろう。

どうしてみんな、漕ぎ出そうとしないのだろう。

どうして自分の好きなやつばかり、この町は縛り付けるのだろう

第二話ノ1

台風が来た。

風速五十メートル級のどえらい台風だ。

風車屋の息子である有馬は、これに駆り出される羽目になった。

風車は風が大好物だが食い過ぎれば食あたりになる。耐久値、過回転数を上回る外力を与えられるとブレードが木っ端微塵になるし、ピッチ変換と過回転防止機構ではどうにもならない事がある。弾け飛んだ風車の破片が腕に刺さったことがあるし、父親は顔に傷まである。命がけの職業なのだ。

衛星による気象予報ができないこの時代、空模様の観測は灯台の役割である。

立駒では海岸沿いにある基地レーダーがその主幹部を担っていた。一般家庭に電気を回しているのは主に風車で、これを動かせない期間は家の蓄電器が文明の寿命となる。絶対に外せない主要施設への電力供給も山中に残っているダムの水力発電と太陽光発電地帯で複合的に行われているけれど、それだって神の采配だ。いまだき「国」との繋がりがなくて、どこも鉄道施設くらいなのだから。

立駒では重要施設の保全が「やれるやつがやる」に落ち着いている。

今回の情報は、台風が来る三十分前のことだった。

死に体で帰還した。部屋を見て、さっそくげんなりする。

キバリーの手によって部屋は城砦化されていた。

部屋にある本という本を積み上げ、柱を立て壁を作り、時には棚を複製し所々には金属部品まで持ち出して、それはそれは見事な建築をする。芸術家が見たら驚いてうっかり時の人になりそうだ。

……なんでこんなもん作った。

最近のキバリーは「巢」を作ることには没頭していた。

今までわりと、というかまったくその行動に法則性めいたものは感じなかったが、こういうインドア趣味に関して有馬は閉塞感を覚えるタイプである。他所でやってほしい。

「うひ、うひひひひ」

とか、中から聞こえるし。

「うひひひ、嵐だ、嵐だ」

「嵐の何が楽しいんだよ」

「チョー楽しいじゃん！ 日常を脅かす災害！ 滝のような雨！

稲光！ 一步踏み出せば死の危険！ これを楽しめないでどうするよ！？」

言葉遣いもずいぶん流暢になったもんだ。

「嵐なんて嫌いだ。人が死ぬから」

着替えを持って風呂に向かった。

まったく嵐を楽しむヤツの気が知れない。

子供はわりとそういうのが好きはずだけれど、自分は違った。憎んでさえいる。

湯船につかり、やっと一息。

「――」

冒険とか機械とか好きなくせに、嵐が嫌いなのは変だって？

そいうなら、身内の一人でも亡くしてみればいい。

「うひゃひゃ、あひゃ、うひゃひゃ」

部屋に戻るとキバリーのボルテージがまた上がっていた。

「うるさい」

「うひ、あひひひ、くすくすくす」

「少し静かにしてくれよ。外に聞かれるじゃんか」

折りしも来客中なのだ。風車の作業で助けを呼んだから居間に来ている町会の人たちにも聞かれたら、父も母も差し合わせて「息子は心の病で」とか言いかねない。

「キバリー、なにしてるの？」

有馬は城砦の門を開けて（手の込んだことに観音開き）言った。
遠くから、反響した声で「いま忙しーのー」と聞こえてきた。

「なんだ？ どうなってるんだこれ」

門の中は真つ暗闇で向こう側が見通せない。ためしに手を伸ばしてみよう。

虚空を掴む。ぐいぐい身を乗り出して向こう側を探すうちに、

「おわっ、たたたた、っと——あれ？」

中に入っていた。

両脇には、磨かれた石のような壁。硬質の床。

後ろを向くと本で出来た城門がある。そこは通路のようだった。

「はは……間取りがおかしい」

間取りどころか空間おかしいぞこれ。

ともかく、こうなったら前進する。

照明の無い通路は何故かぼんやりとした明るさを保っている。やがて突き当たりの扉に当たり、広い場所に出た。

くすんだ木や土の色はそのままに、四方を書架に囲われた隠れ家のような広間。

奥に木の机があつて、両開きの窓があり、ごうごうと荒れ狂う雨がガラス戸を叩いている。そこにキバリーがいた。

「あはは、ひひ、うふふ」

机に本を広げて読んでいるようだ。

「何読んでるの？」

「フラッシュ・ゴードン」

「スペオペじゃん」

せめてこんなときくらいそれっぽいのを読んでいて欲しい。アーサー王伝説とかシェイクスピアとか。

「こんな本、うちにあつたっけ？」

「うんにゃー」

「ない？ 無いのになんで」

「それより――」

本にぴよこんと立ち上がった。

「見てよ見てよここ。オレっちの即席のバビロン図書館」

「即席？」

「牛の糞に紙屑入れて、お湯で溶かして三分待つ。したらできる」

「どういう……」

「オレっちのひみちきち」

秘密基地。

部屋の中にどっかり築いている時点で秘密もへったくれもないけれど、この広大な異空間は、なるほど秘密基地と呼ぶにふさわしかった。

「ちつとねー、オレっちつてば自分のこと知らなすぎっから読書でもして軽く我思つてたてたわけよー。限らない自己探求の旅みたいナー。それでちよつち思い出した。オレが何でここにいんのか」

「え、本当！？」

キバリーの正体が、ついに明らかになるのか。

有馬は心を正座させた。

「この町を、うわー！　つてする」

「……………え？」

「だからうわー！　つてすんの」

「進化してない…………」

有馬はしなびた春菊みたいな気分でキバリーを見下ろした。

「いいよもうそれ……具体性がまったくない。うわーつて何？　侵略しようよ！」

「この町！　すげー盛り上げる！」

盛り上げる、ときた。

有馬だつて、常々そうなりたいとは思っているのだ。

「で、なんで盛り上げなくちゃいけないの？」

「この町とケーヤクしたのだ」

「町と契約？　町会となんか約束したの？　あーそりゃ盛り上がる

わすごいすごい。夏祭りぐらい盛り上がるといいね」

ヤサグレ顔の有馬に構わず身振り手振りで続けるキバリー。

「ここにいるみんなを楽しませてくれって町に頼まれたから、オレ
っちが出てきたのさ。それがこの町とオレっちとのケーヤクさ」

町、とか、契約とか、何の話だ。

まるでこの町が生き物みたいな言い草じゃないか。

「……………」

今まで、キバリーは主張という主張をしなかった。

異邦人には目的があるものだ。観光なり、侵略なり。それが無い
キバリーに有馬は軽い失望を覚えていた。キバリーは便利なマス
コットでしかなかった。

でも違うのか？ 目的があるのか？

「それ、本当？」

「町の外に出られねーのも、ケーヤクフリコーになるからだ。侵略
するにもまず近場からってことだぜ」

「え……まじ？」

ちゃんと、意思がある。目的がある。

初めて会話できた気がする。

「じゃ、じゃ、じゃーさっ、みんなを盛り上げれば、町の外に出れ
るってこと？」

「おう」

「そしたら一緒に旅できる？」

「もちろんね」

「じゃあやろうよ！」

——みんなをあつと驚かせるすごいこととしてやろう！

信じた。町を出るための達成条件「盛り上げる」は意味があるの
だ。深く考えなくていい。無茶苦茶な存在に理屈を求める方が間違
っている。

「どうするの？ どうやって盛り上げればいい？」

「しらんよ」

「知ってるよ！ なんでもいいの？ 盛り上げられるなら、なんでも？」

「ウーム……いいんじゃない？」

「ちゃんと詳しく！」

「オレっちもよくわかんねっだよ。難しくかんがえるとアタマ使うじゃん？ ンなことしなくても、太陽はあたたかいし、コトリはさえずり、ミズは豊かで、ヒトビトの心は輝いてるワケじゃん？

だからテキトーに、キバらないでいこーぜ」

「やる気あんのか！」

その後の議論をまとめると、「テキトーに盛り上げる」に落ち着いた。

手段は問わない。楽しければそれでよし。

有馬は遊びのプロだ。だが一人遊び専門だった。みんなで楽しくとなると途端に頭が痛くなる。でもきつと、みんなも楽しさを望んでいるはず。退屈しているはずなのだ。有馬は勝手にそう決め付けた。

「けつきよく何をやるかだ」

台所に行つて麦茶をいれた。町会の人たちが居間で親父と話している。酒が入っているようで笑い声が聞こえてくる。

居間から出てきた里子と目が合った。

「あつちゃん、台風通り過ぎるみたい。すぐ雨も上がるって」

「え、でも一晩中暴風域に入るって」

「それが進路逸れたみたいなの」

窓を見る。風が弱まっているのが分かった。

「じゃあ、町会の人たち帰るんだ」

「それが場所変えて宴会することになったのよ」

「……こういう日にバカ騒ぎするのって、どうかと思う」

「ちがうのよ。今日亨さんが帰ってくるって」

「——トールジイが!？」

目の色が変わった。

トールジイはこの町の顔役だ。仕事で全国を飛び回っていて、会える機会は少ない。

冷蔵庫からビールを取って、つまみを皿に散らしながら、

「夕方、珠樹君の家に集まるみたい。わたしも手伝いに行くから、あっちゃんも一緒に来る?」

「絶対行く!」

里子はくすくす笑って居間に戻って行った。

——トールジイが帰ってくる。

水浸しのアスファルトを光が覆っている。急に空が晴れてきた。

倉庫からカブを引っ張り出し、水しぶきを上げながら有馬は堤防沿いを走っていた。

海の家にはもう人が集まっていて、酒やら何やら宴会用具がいい大人たちの手で運び込まれている。

横付けされている自動車を見つけ、次に軒先で大笑いするジジイを発見。有馬は大きく息を吸い、

「トールジイ!」

堤防の上から叫ぶ。応じてあちらも手を振った。

「おー! なんじゃそりゃー有馬! どーしたー!」

「……これ、自分で直したんだ!」

「よく動かせたな! 免許あるのか?」

「めんきよ? なにそれ?」

「ふははは! 道交法なんて守ってるヤツいなくなったからなあ!」

なんだかよく分からないが、ほめてくれた気がしたので、有馬も誇らしげに笑った。

トールジイは”移動司書”だ。

見た目は遊び人が講じて南国に住み着いてしまった爺さんそのも

のだが、れっきとした公務員である。文明崩壊の波に吞まれ見捨てられてしまった全国各地の本を回収し、国立図書館に保管することを生業とする蒐集屋のことだ。

つまりは、国を味方につけたトレジャーハンター。

めちゃくちゃかつこいい。有馬の憧れナンバーワンだった。

「おかえり！ お土産あるよね？」

「おう、たくさんあるぞ。今日は大盤振る舞いだ」

奥のほうで野次が飛ぶ、彼の話に期待して集まってきた大人たちだ。

トールジイがことさら人気なのはテレビ電波が立駒まで届かないせいもあるけれど、第一に娯楽を提供してくれるからだろう。

外の話が半分。もう半分は、回収された本が目当てだ。

国から依頼のあったものから個人に頼まれ捜してきたもの、勝手に拾ってきたものまで、国立図書館の御免状をひっさげて堂々とかき集めてくる。

夏のあいだは故郷で本を貸し出すことがトールジイの仕事である。さっそく有馬も宴会の準備に加わろうとした。すると、肩を掴まれ、トールジイは親指を立て「土産。土産」とニヤニヤしてくる。車の方を指差していた。

そのとき車のドアが開いた。

「久しぶりです」

降りてきたのは小さな女の子だ。

薄汚れたシャツに半ズボン。その上からロツククライミング用のハーネスを巻いている。足にでかい絆創膏を貼っている。シニヨンに束ねていた髪を解いてまっすぐな髪をあらわにした。

なんでこいつが、と思った。

なんでも何も彼女はトールジイの孫なのだから、夏休みを利用して隣町から遊びに来てもおかしくないはずである。

ただ、次に飛び出してきた言葉は、

「今回の探索、こいつにも手伝わせただ」

恐れていた事態そのものを鈍器にして叩かれたような感触。
彼女の名前は千愛。通称チャイ。
有馬の許婚だ。

宴会は夕方から開始された。

トールジイを中心に、町中から集まってきたオヤジたちが人事不省の盛り上がりを見せる。男同士で花が咲く話と言えば下品な話と相場が決まっており、あの町は美人ぞろいだとか、あの町はブスばかりだったとか、時々意味の分からない単語が飛び交っては笑い声が炸裂する。有志として来てくれた婦人会の方々は呆れ顔で料理を運び、珠樹もヤーコもお付きとして気まずげに席を並べていた。有馬といえば、外側の席でなんとなく輪に加われないでいる。「浮かない顔をしています」

スイカを持ったチャイがとなりに座った。

座敷の端っこ。風鈴が鳴っている。ひさしにすだれが立てかけてあり、有馬はその隙間から海の向こうを見ていた。

「みんな悪ノリしています。有馬は加わらないのですか？」

「別に」

「別にですか」

抑揚の無い声。意味を反芻しているような間。

「それはわたしが原因ですか？」

わかるなら黙ってればいいのに。

トールジイがしている話是有馬にとってすぐにでも食いつきたい話ばかりだ。

ただ、その話の中には、いつもとなりに立つ誰かがいた事を想像させる。支えとなってくれる頼もしい相棒の影。

苦い思いに駆られるのが嫌なのだ。

「どうしてよりもよってお前なんだ、という顔です」

「……学校どうしたんだよ。本の探索って一週間や十日ぐらいじゃ

できないだろ」

話が本当なら夏休みになる前からこいつはトールジイの手伝いをしていた事になる。

「父も母も了解済みです」

「どうして」

「わたしにその資格があつたからです」

口調は変わらず、ただ淡泊だ。チャイはいつもそうだった。口数は少ないし、表情に乏しいし、言われたことを「はい」と答えて従つてばかりいる。

従順？ 違う。こいつは身を守るためにそうしているのだ。

そんなのがトールジイの相棒になつてしまったのだ。

「勉強しました。歴史を学び、お爺様の力添えができるよう訓練しました。お爺様は偉大です。文明再興の波に溺れようとしている文学の復興を目指しています。わたしもその助けになればと思います」

本当ならこうやって、自己主張すること自体珍しいのだ。

「それに比べて有馬はコドモです」

「……………」

「まだ家出癖が治つてないようですね。目的もなく外の世界を出歩こうだなんて、命をドブに投げ捨てるようなものです。馬鹿げてます」

こいつは、トールジイの探索に有馬が付いて行きたがつてたことを知っている。

知つた上で、自分の意思で、先を越したのだと宣言している。

これが屈辱でなくて何のだ。

「それは逃避です。誰にも認めてもらえないからと言って駄々をこねているのと一緒にです。認められたいならしかるべき訓練を受け、知識を積み重ねるべきです。自分を律することもできない人にお爺様の助けなどは到底無理でしょう。だいたい有馬は」

ちなみにそのとき有馬は黙々とスイカを食べていた。

スイカを食べば種が出る。

ヤーコの例もある通り、有馬はこうした小言に対して大人相手でもかなり直球で慥然とした態度を取る。

そのとき飛ばしたスイカの種は「ビシィ！」と周りに聞こえるくらい、絶大な威力をもってチャイのデコにくつついた。

「――」

チャイの前に出て、両手の人差し指、中指、小指を使った、ダメ押しのすごいベロベロバー！

「この……アホ――！！！」

逃げた。感情をむき出しにしてチャイは追ってくる。真面目なやつほど怒らせるのが面白く、真つ赤な顔で追ってくるチャイはことさら有馬の笑いを誘った。

「待つのです！ 有馬にはもつと言ってやりたいことが山ほど！」

「あーあー聞こえないーい」

「そうやって逃げて何の解決になるのですか！」

「カイケツって何？ 食えるの？」

小言なんて聞き飽きている。

そのとき酔っぱらいどもの世話を任された貧乏くじの一枚、セリナには、夕暮れの浜辺を駆ける少年少女がどう映ったろう。二人の怒声に近い叫びは「あはは。こつちこつち！」「まってよもお！」という感じに脳内変換された違いなく、さぞ仲睦まじく見えただろう。何せ、セリナの親戚である千愛は祖父、亨が決めた有馬の許婚であり、なんだかんだ言いながら有馬のことを嫌っているふうに見えないからだ。

麵つゆを運ぶ盆にヒビが入るのも、目の色が殊更黒いのもお察し頂きたい。

「せつちゃん。こぼれてる」

里子に言われ、慌てふためいた。

「どうしたの？ 何か見た？」

「お母さま！ なんでもないですなんでも」

「チャイちゃんね。ふふふ」

おかしくて仕方がないというだけでは足りない諸々を含んだ笑みに、セリナは観念したふうに浜辺の方を見やって言った。

「有馬って、最近変じゃありません？」

「うーん。そうね、色々やってるみたい」

「それは前からですけど、最近はとくに浮わついてるっていうか、危なっかしい感じです。ものすごく楽しそうで手がつけられないと思ったら、ひどくどんよりしてることもあって……」

「たぶん、寝不足なのよ」

見当違いの憶測に一瞬ついていけなかった。

「ほら、睡眠時間が足りない躁鬱が激しくなるって言うでしょ？ ここのところ夜中にずっとラジオ聴いてるみたいなの。はやりの番組でもあるのかしら？ 盛り上がったちゃってラジオに話しかけるみたい」

番組に合いの手を入れたりボケに突っ込んだりはセリナも経験がある。

「食欲あるから大丈夫よ。時間がもたないから、夕飯のおかわり部屋に持っていくくらいだもの。行儀悪いって言うてるのに。バイクの次は何を見つけてきたのかしらね」

違和感。

有馬はもともと、何かに没頭したら手がつけられなくなるタチだけれど、人に隠れてコソコソと変なことを企んだりはしないと思う。それでいて活き活きしている。

あつてはならない事態である。

それをまともに考えたら、人に言えないやましいことで楽しんでいることになるのだから。夜中にいやらしい番組でもやっているのだろうか？ そりゃ有馬だって中学生だしやらしい本のひとつやふたつ目をつむつてもいいけれど、昼間から頭が桃色になるくらいだ

とさすがに姉として注意しないわけにはいかないわけで……。

はっ、と気付いた。

夕飯を部屋に持っていく。

夜中に聞こえる話し声。

恐ろしい想像が、セリナの中を駆け抜けた。

まさかまさかまさかまさか。でも、

そう考えるとすべて辻褃が合ってしまう。

人目を忍んで校舎裏に物を持っていったこと。粉々に割れたガラス（あのあと結構な騒ぎになった）。そこにあった数々の日用品。その拳句、たくさん物が載せられる足の長い移動手段を確保したと。

「どうしたのせつちゃん？」

心配そうに覗き込まれて、見るも無残に動揺した。

「なん……………なんでもないですわ！ おほほほほ！」

それから酔っぱらいの攻撃をお盆でいなしながらセリナは考えていた。

確かめなければ。

立駒は開いた町だ。

だから、何年かに一人くらい、流れ者が居ついてしまう事もある。ヤコみたいに、都会の住人が逃げ込んでくるのとは事情が違う。それらは往々にして災いの種になるのだから。

しつこかった。

前は本ばかり読んで運動なんかで駄目な女子だったのに。訓練とやらは伊達ではなかったらしい。友達いないひきこもりの読書家チャイは、全国を股にかけ秘宝を探す冒険家にクラスチェンジしていた。

いつも持ち歩いている爆竹や蜘蛛のおもちゃでは効果を得られず、虎の子の煙玉と落とし穴（夏休み前に珠樹と作ってそのまま忘れて

いた)のコンボでやつと動きを封じるに至り、海の家に帰還できた。恐ろしい敵だった。

海の家では過ぎ去った台風の代わりを果たすべく、男どもが禍々しい人災を振りまいている最中だった。子供らには退避勧告が出され、婦人会の方々がテールプルを引っくり返しタマ避けを築いては邪悪なる生命体と化したおのおのがたの旦那どもに怒りの鉄槌を喰らわせている。火災訓練と同じ要領でバケツがほいほい回されていく。「あっちゃん。今日はもう帰りなさいね」

ヒヨっ子はすっこんでいると聞こえた。有馬にほいと夕飯を持たせ、

「お父さんの分もあるから、ひとりで食べちゃだめね」

ふう、とため息。

トールジイの話は、あとで聞くことにしよう。

キバリーへのお土産がトウモロコシや寿司になってしまったのは残念だけれど、まだ一ヶ月はいるはずだから別に急がないでもいいのだ。

「おーおーおー、待った待った」

婦人会による猛攻の始まった戦場から、トールジイがするりと抜けてきた。海の家を出て、車のところまで連れて行かれる。辺りはもうすっかり暗い。

「なに？　なんかあるの？」

「おー。頼まれてたろ、本」

「頼んだ憶え無いけど」

「いいから」

「……？」

三年前くらいに欲しいと言ったことのある本はあったけれど、いちいち憶えてないだろうし、変に思っていると「おーこれこれ」と車から大きな茶封筒に入った本（ほん）を渡された。

「いつか読みたいって言ってただろ。土産だと思って取っとけ」

二カつと皺の寄った口で笑う。

有馬はさっそく中を開けた。

「白いポストに入ってた。大量に発見してな。こういうの俺、文化だと思うのよ。チャイの寝ている隙に修繕用の保存箱に入れるの苦勞したぜホント」

アレ本だった。

まったくこの人は、まったく、人類の父じゃなかるうか。

「……かたじけない」

「おう。ほら。だから、アレ」

「コレですね」

有馬はふところから去年撮ったブロマイド写真（里子の水着）を二三枚差し出して、トールジイと熱い握手を交わした。

男の友情だった。

そのやりとりを、すだれの陰でセリナは見ていた。

第二話ノ2

それは家に帰って数分後の事だった。

まずそのとき、部屋にキバリーはいた。

どっ散らかった鳥小屋みたいな部屋で、相も変わらず本を積み木にして作った城を、今度は近代都市にして遊んでいた。「なにそれ」と有馬は訊いて、キバリーは「トーキョー」と答え、知らない町だったのでそれからは放っておいた。

そして途中から、材料が足りなくなっただのか飽きたのか、キバリーはすでにあるモノを複製しようとはせず、押入れの中から本を取り出してきた。

有馬のアルバムだった。

他人に勝手にアルバムを見られたら普通、怒るか恥ずかしがるかする。当然それは「普通の人」に対する反応でキバリーに気を遣うべきか否かは微妙なところだが、キバリーの場合アルバムを食べてしまいそうだったので、有馬は止めた。見るくらいならいい。そう言い含めたのだ。

トイレに行って、戻ってきた頃にはもう、キバリーはいなくなっていた。

作りかけの町も消えていた。

有馬のアルバムも、無かった。

ぴんぽーんと呼び鈴が鳴る。

——なんだよ誰だよこんなときに大変なのに。

苛々しながら出ると軒先に笑顔をたたえたセリナがいた。

「セリ姉？ どうしたんだよ」

「うふふ。それは自分のカラダに聞こうね？」

ぞくつとする。優しい動作で、人のめくれた襟や乱れた髪を整え

てくれる。その手が真冬の海のように冷たく感じるのは何故なのか。
「あの、どういう」

「夕飯。帰りにお母さまに貰ったのだけだと、少なくなると思って」
「足りてるよ。足りてる。珠樹のところで食べたし」

「じゃあ夏休みの宿題見てあげよっか？」

「いやあ、勉強は一人の方がはかどるから……」

「今日はね、有馬とたくさんお話したいな」

ぐぐ、と迫ってきて気圧される。今家に入られるのはまずい。いや、まずくないのだけれど、ついさっきまでずっと家探して見つからないのに、セリナが入ってきた途端「どうもー」とかいきなり出てきかねないような埒もない不安に駆られる。とにかく今は混乱していた。話どころじゃないのだ。有馬は思い切り踏ん張って、そこから一步も通すまいとした。

「どうして入れてくれないの？」

「どうして無理矢理入ろうとするのっ!？」

「ムリヤリなんて、そんなヒドイ!」

よよよとくずおれるセリナ。いつのまにかハンカチを握っていた。
「このごろ、私たちってゆっくり話せてないと思うの。私は店番、有馬は遠くばかり見て。私、有馬の助けになりたいのに、何も話してくれないから淋しくて……」

「あっへー、そうなの」

「だから話しましょう! とにかく、なんでもいいからっ! 今後の夏休みの予定とか将来の展望とか、いろいろを!」

がっちり肩を掴まれて怒涛のごとく押し寄せてくる。何が何でも入りたいらしいが、ここは何が何でも譲れない。しかし何が何でもなのか有馬自身もよくわからず頭がぐるぐる回り力比べの均衡は徐々に破られていき、

「二人とも、何をやっているのですか……」

セリナの背後の闇から、亡霊が現れた。

頭に昆布をのせたチャイだった。

「——チャイ！　なんでいるんだ！」

「身に覚えが無いとは言わせませんが」

砂にまみれた体からは怨念のオーラが立ち昇っており、今まさに復讐を果たさんとする気概がありありと見て取れた。

「千愛ちゃん！　手伝って！」

「なんだかわかりませんが了解です」

チャイが加わったことで、押されがちだった均衡は完全に崩され、勢いあまって三人とも玄関に雪崩れ込んだ。

ここまでなら、まだ対処のしようもあったろう。

有馬は玄関の段差で思い切り頭を打っていたけれど、意識はあつたし、セリナの追及もその後ありうるであろう家宅搜索も誤魔化しとしまえただろう。キバリーだっているならいるで茶釜の狸みたいに隠れる事ができるのだから。見つかったらまずい事ぐらい判るのだから。いくらなんでもそのくらいまっとうな宇宙人なら常識の範囲内なのだから。

「私は台所に行くから、千愛ちゃんは有馬の部屋に」

「了解で、す……？」

チャイの目が一点を見たまま固まる。

その先には、台所まで通じる一本の廊下があつて、左が居間で、右が有馬の部屋で、それより他は何も無いはずだった。

「おい。アリマー」

セリナの視線も固定された。

揺れる意識が、中心にひとつの像を結ぶ。

それは全身に刺青のような紋様を浮かばせていた。

その輪郭は、人のかたちをしていた。

逆さまに引っくり返った視界でも、それがぬいぐるみでもロボットでもラジオでもないことが分かった。

そして喋る。

「服くれ」

キバリーが人間になっていた。

台所には武器がたくさんあっていけない。

テーブルを挟んで、二対二の面談は行われていた。面談という字面がしつくり来ないなら、聴取、尋問、圧迫面接、裁判。好きなものを選んでもらいたい。

「で、あなたは誰なのですか」

チャイは無表情だった。

いつも以上に無表情だった。

キバリーは、憎たらしいほどニコニコしている。

「アリマのともだちデース。住所知らない。出身この母なる海。名前はキバリーでっす！」

有馬の服を着て、ちよつと活発な女の子みたいになったキバリーはころころしたいつもの調子で自己紹介を済ませるのだった。

「ただの友達が、どうして裸でいたんですか」
そこに突っ込むかやっぱり。

「やー、野生児なので」

「そんな言い訳が通ると思ってるんですか？」

キバリーはへらへら笑うばかりで「んなこと言われてもなー」と、手を頭の後ろに回す。

「いつからここにいますか」

「んー、かれこれ二週間くらい？」

「どういったご経緯で」

「にゃあ！ 根掘り葉掘りきくなよ、この野暮天さん！」

チャイの目はキバリーを見ておらず、まるで黒曜石をはめ込んだように厳肅だ。このままでは殺されてしまうと思った有馬はやぶれかぶれに話を繋げ、

「あのっ、キバリーはあんま世間のことに詳しくなくて」
「どうしてですか？」

きゅるっ と標的変更の目。

「そう、海で、岬に流れ着いてたのを見つけて。聞いたらずっと南の土地から来たって、船が途中で沈没で、かわいそうだから」

実をいうと宇宙人でロボットで地球を侵略しに来て大変で面白そうだから見逃してください、なんて言えるわけあるか。

「ねえ、セリ姉はわかってくれるよね！」

助けを求める。セリナはずっと黙っていた。

放心したみたいに俯いている。かと思えば、キバリーをじっと見て、目が合うとずばつと逸らし、爪を噛んで何かぶつぶつ呟いたりしている。挙動不審。

「アリマ。その話を信じるとして、どうして他のひとに相談しなかったのですか？」

「だって、見つかったらマズイし」

「どうして。遭難者であるなら、しかるべき場所に届け出をすべきです。その南の土地とやらの連絡をとって、迎えに来てもらうのが筋でしょう」

「それはそうだけど」

「それとも彼女に、何か人前に出せないような、やましい事情でもあるのですか？」

下から上までをジロジロ。シャツの上からでもうつすら見えるイレズミ。

「キバリーさん」

ずずいつと身を乗り出してきて、

「この町にいつまで滞在する気ですか？」

「チャイ！ おまえ！」

「うんにやー、すぐ出てくよ？」

それに驚いたのは有馬の方だった。何を言う間もなく、首根っこに手を回されて、

「こいつと約束したんだ。外に連れてってくれるって」
「いやそりゃ約束したけど——」

チャイの顔がみるみる紅潮していく。なにかこう、良からぬ誤解

をしているような、それでいて言い訳できないような。なにの状況逃がたい。

「それは、そんなのは、アリマは……」

「あの……キバリーさん、でいいのよね？」

セリナが始めて口を開いた。

「キバリーさんって……有馬の親戚なんですか？」

——なんだその質問。

キバリーを見る。人間になったキバリー。物に変身できるから人間にも変身できる、とあっさり納得できた方がいいが、どうして人に変身したのか、どうして人前に出てきたのか、どうして今なのか、言いたいことが山ほどあった。

それに、どうして見覚えのある顔をしてるんだ。

「……じゃないですよ。やっぱり」

「なんのこつちやいな」

「偶然に思えなくて。歳だつて同じくらいだし、そんなはずあるわけないのに……」

あるわけない、あるわけないと繰り返す。キバリーを見たときからずっとこの調子だ。

セリナはきつと、知っているのだ。

ごとん、と何かの落ちる音がした。

台所の入り口。

落ちた買い物袋からジャガイモが転がってくる。

里子が立っていた。

終わった——

もう言い逃れできない。

「ひばり………なの？」

父が帰ってくるなり家族会議に発展した。

第二話ノ3

キバリーを見て事情を聞いても、父が取り乱すことはなかった。

「しつこいようだが確認する。君はひばりじゃないんだな？」

「他人のソラ似というやつですな」

「わかった。妻が取り乱してすまなかった。今日のところは泊まっていきなさい」

そのあと、有馬だけ呼び出されて、父と二人っきりで話すことになった。

「どうして隠していたのか、わからなくもないが、こういうことはまず家族に相談しろ。母さん困ってただろうが」

「……ごめん」

「まあいい。それより、ひばりの事は憶えているな」
そう前置きされる。

ひばり、という姉がいた。

よく憶えていないから、ここから先は聞いた話だ。

姉は有馬に負けず劣らずの無鉄砲で、虫取り網と釣竿をいつも抱えて、自転車があれば一人でどこまでも行ってしまう神出鬼没の、外で遊ぶのが大好きな女の子だったらしい。

とくに、川で遊ぶのが好きだった。

休みに家で見かけないときは、いつも川辺に立っていたし、昼飯時になっても帰らないと思ったら、釣り好きの爺さんと一緒にヤマメやザリガニを焼いて食べているような野生児だった。

そして、ある日、帰らなかった。

川辺には、「ひばり」と彫られた釣竿が転がっていて、桟をはさんだままの、お気に入りの本が残されていた。
溺れて、流されてしまったのだと言われた。

川をさらって山を狩っても、海辺をいくら搜索しても姉の姿は見つからない。溺れたまま海に流されたのだとしたら、もう捜しようがない。半年後に浜へひばりの使っていた麦わら帽が打ち上げられてから、やっと葬式が行われたようだ。

ぼんやりとした印象で、たくさん集まった黒い服の人たちと、線香の香りを憶えている。

有馬はそのとき二歳だった。

連絡先の無い場所から来た。という言い逃れが通った。

実際、日本国内にも手紙でしかやりとりできない集落は存在するし、隕石危機のゴタゴタで情報インフラの整備はごく限定的なものに留まっただけで未だ回復の兆しを見せない。

だからキバリーは夏のあいだ遊びに来た遠い親戚、ということになった。

「夏ッ！ 海ッ！ 太陽お——っ！！」

青空に向かって、人差し指のピストルで撃ち抜こうとするキバリー。

アスファルトの照り返しがひどい、昼間のことだった。

晴れて自由になってから、キバリーのはしゃぎようといったらもうねずみ花火のようだった。あっちこっちウロチョロしてどこで弾けるかわからず、迂闊に手が出せない。

「うおーいアリマ！ 何あれ何あれっ！？」

「犬だよ」

「うーワンワン！ ばうわう！」

「うっさ」

「おおー！ これが世に聞く大名行列……！」

「ただの蟻だよ」

「はい障害物どーん！ どうだ通れまい。悪しき因習よ滅べ！」
外を出歩けるのがよっぽど嬉しいのだろう。

セリナに聞きたいことがあったので、昨日の詫びもかね本屋に向かう途中だった。チャイモトルジイもそこにいるはずだ。出版社に渡りをつけて本を仕入れさせるのもトルジイの仕事だから普段滅多に家にはいないが、毎年夏のあいだは休暇で、浜に打ち上げられたクラゲみたいにぐんによりとくつろいでいる。

「ねえ、キバリー」

「おうなんだ！」

「もしかして、ずっと外に出たかったの？」

「あつたりめーだバカこのバカ！　こんな天気の良い日に手足のばして歩けないなんて、お天道さまに申し訳ねえっ！　夏が呼んでるんだってば！」

やたら暑苦しかった。

いつもノリで適当に言うけれど、有馬はキバリーが、何か企んでいるように思えてならない。

あの巢も、人間になったとたん人前に姿を現したのも、実は全部理由があつてやった事ではないか。

たとえばあの巢は変身の精度を上げるために必要なエネルギー貯蔵装置が何かで、成功したから用済みになったとか。それが宇宙にある母船から人間の生態データをダウンロードするための通信装置だったとか。姉に姿を似せたのも、原住民により親しまれやすい外見を選んだ結果で、テキトーに見えて実は不気味な本性を隠し持っているのかも知れない。一連の行動には微かな計画性を窺わせる。

油断ならない。外に出てはしゃぎ回って、人と話せるようになる事が目的じゃないはず。

「ねえキバリー……これからどうするの？」

「んー？　町の外に連れてつてくれるんじゃないの？」

「そうじゃなくて、それからもつと先だよ。キバリーは帰るところもないのに、周りの大人が黙ってないだろ」

「にやはは。そういうことに気にすんなよ。オレっちは人間じゃないんだぜ。そういう心配事は、人間のやることさ」

「するよ。犬猫じゃないんだから」

行き当たりばったりな侵略。それじゃ良くないと有馬は思う。悔しいのは、未だにキバリーが真実を語ってくれない事だ。

協力者なのに。

やっぱり、信用されてないのだろうか。

漠然と有馬は、キバリーとずっと一緒にいられるものだと思っていた。このままだと、どこからともなく黒服の大人たちがやってきて、キバリーのことを攫って行ってしまうように思える。

それは冗談でも妄想でも何でもなくて、宇宙人でも異邦人でも野良犬にだって同じ事が起こるのだから。

「心配すんなよう、そんなくらいで」

お気楽な笑顔。

「ずっと先のことより肝心なのは今だろいま！」

「そうかな……」

「そうだよっ、気にスンナ！」

「そうかもね」

「そうそう」

そこまで気楽に言われると、そうなのかなと思えてきた。

自分の他にキバリーの事を知られて、焦っていたのかもしれない。思うようにならない事が不安だったのだ。

「そうだよな。今すべきはもつと違うことだ。キバリーを町の外に出すにはどうするかってことだよ」

「おうよっ！ わかってきたじゃねーか」

そうこうしているあいだに本屋に着く。「O i k a w a - B o o k s」の今風な看板。

「たのも——っ！」

キバリーが扉に体当たりした。すぐ横のカウンターに、硬直しているセリナがいる。

「おはよう！ 昨日は騒がしてゴメンネ！」

「セリ姉おはよう」

「あ、うん。おはようね」

「改めて自己紹介するぜ！ オレっちは有馬家の親戚、その名もキバリー！」

「初島だから」

「親戚……なの？ でも昨日は」

「昨日言ったの嘘だから！ 親戚も親戚、遠縁のくせー仲よ！ 母方の従兄弟のはとこの友達の義兄弟の契りの」

「そうそうトールジイどこにいる？」

墓穴製造機のキバリーを遮って強引に話題を変えた。

「裏手の車庫にいる。千愛ちゃんも一緒に」

「わかった。ありがとう」

出て行こうとすると、「ちょっと待って」と呼び止められた。

「これから、その、どうするの？」

「これから考える予定」

裏手に回ると、トールジイとチャイは回収してきた本をせっせと日干しにしている最中だった。

家の玄関から道路にはみ出すまでダンボールを敷いて、その上に本を載つけている。水を含んでぐにゃぐにゃになったり半分焼け焦げていたりする本でも、文化的価値があるなら保存するのが移動司書の仕事だ。

「よおどうした有馬あ。手伝いに来てくれたんか？」

チャイは気まずそうな目で有馬を見やってから、ふいつと作業に戻る。事情を知ってか知らずかいつもどおりのトールジイ。

「あー、うん。大変そうなら付き合うよ」

有馬も手伝いに加わった。

手伝いながら、なんと話したら良いか考える。

「トールジイはいつぐらいまでいるの？」

「今年は祭りまでいられるな」

「祭りって、神社の？」

「商店街の方だな」

流星祭りだ。

隕石危機の終結宣言を記念して、この日を祝う町は多い。
はっとなった。そうだ。祭りだ。

「祭りって、何か珍しい演目とかあったっけ？」

「神輿が回るな。カラオケ大会もある。演舞と、あと花火。ここらへんは恒例だが、あとは町会に問い合わせてみないとわからんな」

恒例じゃダメだ。もっと人の気を惹かないと。

わーっとなる事。盛り上がる事。

「いつも通りじゃつまんないよね」

「なんだ、いやに意気込んでるな」

本の束を下ろした。指をばきばきしながら、

「何かないの？ ものすごい盛り上がるやつ」

「トールジイは顎をかいて「うーむ」と唸った。

「人の集まる祭りってのはみんな伝統あるものだ。多く知られてるから、外からも集まってくる。流星祭りは歴史が浅いし全世界どこでもやってる事だろ」

「そこを、なんとか変えてみたいんだ」

本気の雰囲気伝わったのか、トールジイが気色ばむ。

「いきなりなんだ？ 仕切りたいのか？」

「そういうことじゃないけどほら、溢れる若い力を町のために使えたらって。最近思うんです、大切なのは胸の熱さだって……」

「オイ千愛、有馬のやつ頭でも打ったのか！」

チャイは目を合わそうともせず、粛々と移動作業を進めた。

「……なんだ。お前ら何かあったのか？」

「難しい年頃なんだよ」

「そうだな。俺も苦労してる」

そのとき、表にキバリーが飛び出してきた。

「うおーいアリマー。どこだーかくれんぼか？ お、見つけたぞー
ヤロメ、オレっちから逃げられるとでも！」

「こら、暑っ、暑苦しい！ 重い！」

いつものぬいぐるみサイズのつもりでよじ登ってくる。うつとしい。トールジイが目を丸くしているのに気付いた。

「ああ。このうるさいのはキバリー。遠い親戚なんだ」

「オッス。おれキバリー。トオイシンセキ属ヒト亜目。趣味はアリの巣に水流したりアリジゴクの巣に蟻落つことしたり蟻の物流ルートを寸断すること」

「どんだけ蟻嫌いなんだ。」

トールジイは驚いて硬まっていた。

姉のことを知っているのだろう。

「ふむ。なるほど。そうかそうか」

説明すると、万事心得ておるとばかりに頷いてくれて逆に気持ち悪かった。

「ひとつ言っておくことがあるぞ、有馬……………」

超小声で、

「女は怖い」

「その人たち。サボるならあっち行ってください」

チャイがあいだを通っていった。それにキバリーが目をつけ、人の肩から降りていく。

「ねえねえ何してんの？ 仕事？ 手伝うか？」

「あっち行つててください。邪魔です」

「本よけんだろ？ 簡単カンタンちょーかんたん。オレっちの手にかければ赤子の手をひねるがごとく、ひと切れのケーキを食べるがごとく朝飯前の夜飯前の三時のおやつの前菜だ！」

「すつごく目障りです！」

お守りはチャイに任せよう。

有馬は言われたとおりトールジイを道の端まで引っ張って退避した。

「おい、祭りって、本気なのか」

「今年は特別なんだよ！」

呆れているのか、禿頭を手で撫で付けるトールジイ。

「……面白い祭りつてのは総じて独自性が強いぞ」

「伝統舞踊とか伝統工作とか、でっかい神輿とか？」

「ああ。けど立駒にそんなのは無い。でっち上げるにしても相当骨だぞ」

そこで有馬は思いつくものがあつた。

「あるじゃん。この町にしかないやつ」

「なんだ？」

「隕石迎撃基地」

海岸の道をずっとずっと西に向かう。

そのうち陸地に傾いていき、キバリーが通れなかった橋の前まで出るから、川沿いに下っていくと、柵に囲われ、防風林を刈り取られて見通しの良くなった広い土地が見えてくる。

そこがかつて、人類の存亡をかけて戦った基地だ。

現在稼動しているのは、灯台としての役目を担う管制塔だけだつた。他の設備は軒並み黒黄のテープが貼られ、航空機の離着陸は無く、滑走路は草が生え放題。建物の中は無料公開された終戦記念館になっている。

「……土地は広いな。土地だきや広い。けど昔使ってたジェット機の展示だけじゃ地味すぎて泣けてくるぞ。稼動機ひとつも無いからな」

有馬は反論した。

「この町の濃いところってたらソコしかないじゃん。広ければ派手なことができるし、演出的にも最高だよ。人類を守った戦士たちの聖地って感じで盛り上げればさ、けっこう演目立つ気がするんだよね」

「待て待て……確認するがマジなのか？」

有馬は瞳で答えた。

第二話ノ4

立駒基地の保守管理主任は宗像俊郎といって、その昔軍人だったとは思えないほど線の細い兄ちゃんである。

「言い訳になるけど、この設備も老朽化が激しくてね。二年で交換する部品を十年も使ってちゃカルガモが爆撃機に見えることだってあるくらいだ」

無精ひげを生やし、アロハシャツという格好で、アイスコーヒーを置きながら申し訳なさそうに言った。

場所は基地管制塔。三百六十度ガラス張りの部屋。

よく冷えたアイスコーヒーをご馳走になったキバリーは「くう」と息を吐き、有馬はきよとした顔。

「え？ 何の話？」

「昨日の事だよ。有馬の父さんにこっぴどく怒られた」

いきなりなんだと思ったら、昨日の嵐をもっと事前に予測できなかった事を言っているようだ。

「しょうがないよ。ボロいんだから。それより今日は何してた？」

「いつも通り。設備の保守点検と空模様の見張り。あとは軍事ネットワークのハッキングとかね」

こうゆう趣味を公言してはばからないのは如何なものか。

「ネットワークなんて生きてるの？」

「一部は。ここが放棄されてから機能は封印されてるんだけど、ハードウェアをちょこつといじれば覗けるものはいくつかある。物理的ネットワークを一新できるほど、この国も回復しちやいない」

ククク、と気持ち悪い笑み。彼を左遷した軍は正しい判断をしたと思う。

「椅子ばっか綺麗にする仕事で肩こらないの？」

「はは！ ひどいね。こう見えて天職だと思ってるのに」

窓際からエプロンを見下ろした。たくさんボタンのついたコンソ

ールをキラキラした目で見つめるキバリーを「やめる」と引つ張りつつ、有馬は、

「今年の流星祭り、ここでできないかな？」

「……は？」

「もしもだよ。もしもの話。ここでお祭りやるとしたら何か問題あるかな？」

「問題というか何というか、突拍子も無いね」少し考えるようにうつむき「今まで何も問題なかった事を、あえて変える意味があるのかい？」

「ある！」

問題あるとかな何とか、そういう事じゃない。

「お祭りを派手にするんだ。露店や神輿だけじゃない、何度見ても飽きないようなエンターテイメントにする！　だってそのほうが楽しいから！」

「……それは、」

面食らったようにして、俊郎は何かを言いかけ、

「――夢のような話だね」

「でしょ？　でしょ？」

「実現すればとても面白いよ」

「実現させるためにどうすればいいか考えてるんだよ」

おかしそくに俊郎は笑って、そうだなあと切り出した。

「まず問題があるなら電力だ。大規模な祭りなら相応の電気を使う。電源車がある。燃油が桁外れに高いから発動機は規制されてるし、バッテリーじゃ持たないだろう？」

「この基地で使ってる電力は？」

「今はリーダーと照明くらいだ。特定受電施設といってもフルに使える容量はこの町に無いよ」

「発電機は？」

「それは大量にある。けど全部ガソリン式」
なら問題はクリアできる。

こつちにはジョーカーがあるのだから。

「電力が十分なら？」

「……お役所の許可。でも、場所が場所だし、わりとすんなり通るんじゃないか？ わからないけど」

なら、勝ったも同然じゃないか。

人の良い俊郎だから子供の言う事に付き合ってくれているのだから、それを差し引いても、彼の口調は弾んでいるように聞こえた。

「じゃあさ、もしさ、その問題が全部解決したら、トシさんは協力してくれる？」

考えるような間は、無かった。

「そんな面白いことに、僕を外す気ならさみしいな」

子供の戯言に付き合ってくれる大人が有馬は好きだった。

「約束だから！ 絶対だからね！」

「ああ。男と男のの約束さ」

親指を立てて、ウインクまでして応えてくれた。見た目優男っぽいのに、こういう動作が気障だったらしくならないのは実に人徳の為すところだ。

「ところで、連れの子はどうしたんだい？」

「あ！ キバリー！？」

また勝手にいなくなってる！

「ごめん！ すぐ探してくるからっ」

「珍しいものが多いから見学したくなっただろう。好きに回ってきていいよ」

「うんごめん！ それじゃ！」

有馬が階下に消えていく。

一人になった管制室で俊郎はコーヒーをすすった。

「享さんの話、御伽話じゃなかったかな」

一般開放されている区画でも基地の中は広大で、有馬はあちこち探し回った。

立入禁止のテープが張られている場所まで行ったら、さすがに引き返すしかなかった。広すぎて、とても全部は探しきれない。庭に出て、射撃場を覗いて、迎撃機の展示されている格納庫でやっと見つかる。

「おおー！ アリマーこっちこっち！」

「勝手に離れるなよ！」

「なあなあそれより見るよこれー」

手をいっぱいに広げて迎撃機を見ていた。

後期型の大きなやつだ。超大馬力の複合エンジンで、ロケットのようにすっ飛んでいく。機動性と揚力を着陸時にしか必要としない小さな主翼と大きな可変式尾翼と、細長い胴体が特徴的なコメットファイター。

「すっげーよな。こんなので隕石ぼっこぼっこ墮としてたんだぜ」

「キバリーも、これに墮とされたのかもね」

「オレっちなら跳ね返すけどな！」

張り合ってる。

確か、これは宇宙空間まで出られる機体だ。ハイローミックス全盛の時代に生まれた鬼子で、爆装しても離陸時に10G級の加速がかかる。これを扱えるパイロットは基地に一人いれば良いと言われるくらい操縦者の負担が大きく、「殺人機」や「打ち上げ花火」なんて呼ばれた。成層圏を越え、トリガーを引いてそのまま戻ってこなかったパイロットがごまんといたのだ。

「アリマー、こいつもう飛べないの？」

「ああ、うん。エンジン外されちゃってるし」

「なしてー」

「隕石襲来期の最後の方は国の生産力もカラカラだったから。稼働できる基地になるべく多く機材集めて、使えるところ継ぎはぎして修

理してたんだって。その犠牲になっただよ。エンジンだけはすごい貴重だったみたいだから」

「はーニコイチってやつか」

うむむと唸り、探偵のように顎に手を当て、

「じゃあコイツ飛ばしてお祭り騒ぎにすんのは、ムリかあ」

恐ろしいことを言う。

有馬は驚いた。ちゃんと考えててくれたんだ。

無性に嬉しくなってその線も考えてみることにした。

「できるんじゃないかな。これは無理だけど、ほかのはロートルフアイター多いし、エンジンあるやつだって残ってると思うから」

「燃料は？ ふつーのと違うんじゃないの？」

「ジェット燃料って灯油のガソリン割りみたいなもんだって聞いたけど」

エンジンが元気ならスーパーカブも松の油で動くって言うし、ようは爆発燃焼すればいい。

「なんかそれ恐えーなあ。ちゃんと調べてから考えようぜ」

有馬はぐつと息を飲んで赤面した。なんだよ、キバリーらしくない。こんなときだけしつかりするなんて。

「それに、パイロットどうすんの？」

忘れてた。

今、飛行機に乗れる人間なんてほとんどいないのだ。内燃機関と燃油の使用が厳しく制限されてからは、航空機の需要なんてほとんど無くなり、あらゆる民間航空便は空飛ぶ化石となってしまうた。立駒になら探せば元パイロットの一人や二人くらいいるかも知れないけれど、一体それにどうやって協力してもらおうと言うのだ。

それを頼むということは、キバリーの正体を明かすということだ。

そのあととも基地を見学しながら、思いついた端から二人で案を出し合った。ああなるからダメだ。それだとタイクツだ。いいかもし

れないけど、現実的じゃない。難しい障害ばかり。気の向くまま、風の向くまま。

外に出て、滑走路の外周を歩いているとき、キバリーはこんなことを言った。

「ばーか、そんなことしたら嫌われるぜ」

他愛ない会話のひとつ。有馬のばかな提案に。

自分は馬鹿らしいくらい非常識な生き物なのに、鋭いところを突いてくるのだ。外見が人間になって表情がついたからそう見えるだけかもしれないが、まるで最初からそうだったようにキバリーは人間のような振る舞いに馴染んでいる。

「キバリーはどんなことが好きなんだよ？」

小石を拾って脇に投げた。キバリーは滑走路に生えた雑草を引っこ抜こうとしながら、

「やっぱ、あれ、バトルがなくなっちゃな！」

すっぱ抜けて引っくり返った。

「――男同士の戦いとか、駆け引きとか、一騎打ちとかいいよな。目と目で話してる感じとか！」

「それは漫画だよ」

「マンガじゃねー！ 他のどんなことも忘れて戦いだけに集中する…… あちーよ。燃えるよ。これで燃えなきゃヒトじゃねー！」

「戦いねえ……」

真剣に考えてみた。高度な駆け引きを要求する催し物といったら相場はスポーツだが、何もわざわざ流星祭りでやらなきゃいけないことでもない。

滑走路の末端標識が見える。今にもつぶれて消えそうな19Rの数字。その先にある割れた誘導灯。吸い込まれそうなほど開けた視界一面に映る群青の海。

「なあアリマー、あの小屋は？」

キバリーが指を差したのは、外周側の切り株地帯だ。

その場所に寄りそうように倉庫がひとつ建っていた。赤錆が浮き

まくってるはトタンがひび割れているは、そのくせ何度も修繕された跡がある年輪の分かりやすい小屋。

「電源室かな……にしてはボロすぎるけど」

「行ってみよーぜー」

薪用の倉庫かな。と思いながらついていった。近付いて見ると、意外に頑丈な作りをした建物であるのが分かる。

正面扉は両開きの大きなもので、有馬の家の倉庫より広い。奥行きがけっこうある。そのくせ作業場みたいな空気があるのは埃と土の匂いのせいだ。お馴染みの封印テープで扉にでっかいバツテンを貼られていた。

なぜかにやにやしなから、キバリーは倉庫を見上げ、

「こついうとここに侵入するのって、燃えるよな」

ええーだめだよ。とか言う有馬もやっぱりニヤけている。

基地のいたるところにこついった立入禁止の建物はあった。肝心なのは入っちゃ駄目な場所に入るその行為であり、冒険心である。キバリーは分かってるな、と有馬はしきりに感心していた。

建物の周りを回って、入れる場所がないか探した。

そしてがつちり、ひとつも無かった。鼠一匹通れない。正面扉にはかんぬきが填められていて、それも鎖で止められている。側面にあった通用口も三つのナンバー錠で閉じられていた。

「ナンコーフラクだな」

「無理だね」

「こついう建物ってガラスとか割って入れるんだけどな」

何か妙にわかってるような言い方は気にしないことにする。有馬も足のつくような侵入法は取りたくない。

「よし。かくなるうえは、力づくでこじ開けるか」

「えー！」

おもむろにナンバー錠を掴むと、紋が手の上に走った。

ぶちつと、錠前が飴細工みたいにひしゃげて、あっさり引っこ抜かれる。

「力づくじゃん！」

「そう言ったが」

残り二つの錠前もぶちぶちもぎ取られてしまう。ああ、もうばれる絶対ばれる。

「あいたあいた。入ろーぜい」

「引つ張るな！ あーまったくもう！」

つんとくる木屑の匂い。入ってすぐ正面の壁際には、びっしりと薪が積まれていた。奥に土木機械が並んでいる。思ったとおりただの倉庫だ。

「期待して損したね」「つかしいなー」

頭をかくキバリー。何がおかしいのだろう。

「ほら、斧とかノコギリとかあるし、ただの倉庫だよ。ここ」

「ただの倉庫にしちやー変だろ。扉でかいし」

「使われなくなったから物置になったとか」

「いや怪しい。オレっちのセンサーがビンビン反応するんよ。ここにお宝があるって」

言われてみると、確におかしいところもある。

ただの倉庫にしては嚴重すぎる。関係者以外入ってはいけない理由が見当たらない。こんな戸締りがしっかりしていると薪をいちいち運び出すのだって一苦労すると思った。

キバリーは四つん這いになって、床をくんくん嗅ぎ始めた。いきなり「見えた！」と目を見開いて、薪の束を引つ張る。

下の方から。

やることが突飛すぎてついでなかった。

大量に積まれていたものを下から引っこ抜いたらどうなる。もちろん崩落が起こる。ワイヤーでまとめられていた薪束のひとつひとつが、均衡を失い崩れ落れ始めた。その下にはキバリーがいて、有馬は指一本動かせず、声も上げられず立ち尽くしていて、

「……………キバリー？」

我に返る。

目の前に降り積もった薪山を見て、ぞっとする。

「キバリー！　ちょ、死んだ！？」

やー生きてますよーとくぐもった声。

「おどかすなよ！　死ぬほどビビったじゃん！」

慌てるなおちつけ。オレっち様がこんなことで死ぬわけない。きつと何かの間違いだ。ああそれにしても暗い。ねむい。

「キバリー！？　おい！」

薪山に手をかけた瞬間、ずぼっと首が飛び出してきた。驚きすぎて引っくり返った。

「キヤハハハハハ！　はらいてー！」

「……………先帰ってるから」

「ごめんごめんそんな怒るなよう。あれ？　抜けねこれ」

「それじゃ」

「まって、まってくださいアリマ。ほら、キバリーちゃんぴーんち。助けほしいな」

「トシさん呼んこよ。この人が全部やりましたって」

「アリマさーん？　これ踏ん張れないんだって……………まじでうわっ、やばっ、うわわわわわっ！」

アリジコクに引きずり込まれた蟻のように、キバリーの首が沈んでいく。破壊の音をとまって薪山が内に崩れ始め、倉庫から出かかっていた有馬もぎよっとして引き返した。

薪山にカルデラみたいな穴ができていた。身を乗り出して覗いてみる。

「おいキバリー？　今度は死んだ？」

「死んでたまるかつーの！」

下に空間がある。

床が抜けたのだ。

有馬は急いで薪をよけにかかった。「おい助けてくれー。暗くてなんも見えねえよー」とぼやきが聞こえたが無視。近くにあったスコップを使ってざくざく薪を散らしていく。

一面をよけると、やはり床に穴が空いていた。薪の積まれていた箇所だけが脆い板張りだったようだ。けど、なんで下に空間なんか

「キバリー、そっち足場大丈夫？」

「わかんねーけど、石で出来てるっぽい」

「暗視モードとかないの？」

「マンガの見すぎだ」

キバリーに言われたくなかった……。

ともかく下に降りてみよう。腰に常備していたペンライトを外し（冒険者たるもの明かりは必需品）下を照らしてみた。散らばった薪と床とにしゃがみ込んでいるキバリー。深さは4メートルくらい。壁際に梯子が添え付けられていた。とすると、出入口に蓋がされ、その上に薪が載せられていて、キバリーが崩したせいで蓋が割れて落っこちたのだ。

無闇にわくわくしてくる。残骸をよけ、有馬はするする下に降りていく。

「キバリー、大丈夫？」

「……あちこちぶつけて身体中いた……い……痛くないっ！」

肩をいからせ立ち上がった。

周りを見してみる。思ったより広い空間。若干建物より幅があるように、奥の方を照らしてみても光が届かない。ペンライトを回して明るさを広角にした。途端に、巨大な白い物体が浮かび上がった。

「なんだこれ！」

地下空間の幅いっぱいを使って、灰色のシートを被せられた何かの構造物がある。

それもひとつじゃない。奥のほうにも薄らぼんやりと同じものが二つ。どれも横幅のある、ずんぐりした影。

キバリーは、勝ち誇ったように胸を張った。

「ほら、お宝あったじゃん」

床に接地しているのは車輪のようだ。前に二つ、後ろに一つ。三

点で接地。有馬はこの形に見覚えがあった。

ライトを口に咥え、シートを引っぺがしにかかる。

前部に四枚プロペラ。両側にまっすぐ突き出た主翼。
レシプロ戦闘機だった。

第二話ノ5

「――雷電」

ぽかんと有馬は呟く。隕石危機以前、世界中が血みどろになって資源の奪い合いをしていた時期、本土防衛戦に地道を上げていた対爆撃機用戦闘機が、なんで。

キバリーは二機目、三機目のシートをはがしていく。全部種類が違った。二機目はもっと細い胴体をした四枚プロペラの機体。三機目は首なしで胴体だけ。

「すっげー！ ヒコーキじゃん！ 何ここ秘密の格納庫？」

お宝お宝と騒いでいる。

たぶん、ここは戦闘機用の地下防空壕か何かだったのだ。大戦期の機体は終戦がうやむやになってから、その多くが死蔵されたと聞く。何十年も経っているから動くものはごくわずかで、エンジンだけが取り外されて輸送機に転用されたり、外国に輸出されたり。資源不足に陥ってから朽ちるのを待っただけの化石みたいな機体。

そういうものの一つなのだ。これは。

「こいつら直せば動くかな？ そしたらすげーおもしろくねえ？」

キバリーも、同じことを考えていた。

うまくいくのだろうか？

想像は回転する。その先はどんな道でも一枚の壁にぶち当たる。

この基地に来る前から、トルジイに協力を願い出たときから、ずっと靴の裏にこびり付いたガムみたい付きまどってきた誤魔化しよのない事。

キバリーは、無邪気な顔で喜んでいる。

「出よう。怪しまれるし」

「おおっ、りょーかい。あたっ、あいたたた」

「どうした？ 怪我してるの？」

「大したことねーよ。これにバウンドして落っこちたから」

足をひよこひよこしている。

怪我なんかしないと思っていた。

「あんなに怪力なのに、ぱつと治せないの？」

「怪力じゃないですフツです。さっきのは鍵のほうを脆くしたんだかんね」

「じゃ、ほら」

手を引いて、背中を貸した。

——キバリーはモノじゃない。

むっちゃ重たかった。

歩くだけならまだしも、懸垂運動が入ると人を背負ったままでは物凄い重労働になることが判明した。あんまりカッコつけるのは止めようと後悔する有馬である。

「いやー……なんとも気恥ずかしいですね」

「はずかしい!？」

「弟分の世話になるのは気が引けるんδει」

「こつちが格下だったのかよ!」

有馬は八工を払うようにしてキバリーから遠ざかった。

「とにかく退散! 鍵もとに戻してよ! こんなところ見つかったら大目玉どころじゃ済まない——」

どん、出口で何かにぶつかる。

そおつと見上げると、鬼のような顔のジジイがいた。

「くお——らあああ——! !」

「ぎゃあ!」

それがツールジイで、人の悪い笑み全開で腕組みしているのを知ると、噴火するような怒りが沸いた。どいつもこいつもガキばかりだ!

「ふん。おかしいとは思ってたがな。有馬、どうしてここがわかった」

「わかった……？」

トールジイは役場に出かけたはずだ。

こっちこそ聞きたい。ここで何してるんだ？

じゃらじゃらと胡桃のようにシリンダー錠を弄んでいた。

「原付、整備して走れるようにしたらいいな。ありや不可能なはずだ。一体何年前のモノだと思つとる。疲労や腐食は目をつむるとして他の消耗部品はどうした。ジローさんが後生大事に取っていたとも思えんな」

「……どうして？」

どうしてそう思う。その根拠は――

「なんでそんな事がわかるって顔してるな」

悪党そのままの笑み。

「なにせありやあ、俺も直そうとしたことがあるからな」

そして、とても愉快そうに笑う。

有馬が恐れていたことは、キバリーの正体を他人に知られることだ。

しかし、町を出るために、キバリーも自分の力を惜しみなく使おうとしている。何も無いところから何かを生み出す、夢のような力をだ。

町を盛り上げるために何が必要か。

お金。電気。周囲の理解。大まかに分けてこの三つ。

とりわけ三つ目が重要になる。

子供にできることなんて、たかが知れているのだから。

キバリーの正体を知って、信用できる大人の存在が、絶対必要不可欠なのだ。

第三話ノ1

「だからさ演目とか決める前にまずパイロットがいないと」「俺がなんとかする。それより優先するのは客の受入れ体制で」「町会と共同歩調を取る事が肝要だと思います。その根拠として年々厳しくなる自治会の――」「はらへったはらへったメシマダー?」「あつについてこの部屋扇風機強にしていいいよね?」「書いてくぞ。紙、紙、なんだカレンダー七月じゃねえか。裏使うぞ」ビリビリビリ――における管理費の問題と照らし合わせれば難色を示される事が予想できますから、何らかの交換条件を提示すれば」「めしめしめしめし」「ぜつたい人足りない」「少なく見積もって規模は五千人だとして、確保する人員は、えー」「ボランティアを募るにしても限界がありますよ。町をあげて体制を作らないとどうにも」「はらへりほろ」

有馬。トールジイ。俊郎。キバリー。時計回りにちやぶ台を囲み喧々囂々やかましく。部屋の気温が四度は上昇している。

「――つまり、問題は山積みつてことだ!」

トールジイが麦茶を一気飲みして総括。

「役所の許可だが、規模を明確にしない以上簡単には下りん。昨日一連の手続きを確認してきたんだが、審査に一週間はかかる。面倒なのは盆休み中にこの祭りはやらなきゃならんことだ」

俊郎が拳手。

「しかし、手順を踏まなければ、不義理をはたらくことになります」

「裏工作と事後承諾は必須だな」

メガネが曇る。口元には笑みらしきもの。

有馬が拳手。

「どこまでこつちの情報を出せるかも問題だけど」

トールジイは深く頷く。今のところ、キバリーの秘密を知っているのは二人だけ。

トールジイには全部話した。

俊郎にはトールジイの個人的なコネで大量の電気の確保が可能だとしか伝えてない。それだけで協力してくれた。

「知ってるか？ 嘘や混沌は時としてその姿のまま定着し、確固たる地位を築くことがある。ハツタリ利かせるくらい何でもない。お前らそのくらいの気概で」

「——ハイどいてどいて」

セリナがざる蕎麦を持ってやってきた。水受け用の鍋を敷いてどかつとちゃぶ台を占領。

「トシさんまで秘密会議に加わっちゃって……」

「いやはや昔の血が騒いでね」

昔の血というのはヤクザ相手にやんちゃして木材粉碎機にかけられかけたとか、旅行かばんに入れられて海外に輸出されたとかそういう方面の血だ。

セリナが傍で正座して、そわそわと見守っていた。

「あーつまり、アレだ、重要なのは、例のナニだ」

「アレですね。分かってます」

「ふいもんな」

「そーそー食べ物だよな」

「食いもんは馬鹿にできん。祭りの花は露店だからな。あれだ、腹にたまるものがいい」

「調達はどうしましょう？ 天然モノは地元でないと」

「なになに？ お祭りの話なの？」

視線がセリナに集まる。

「どいつもこいつも物言いたげだった。」

「あー……セリナや。ちつとお爺ちゃんのためにタバコ買ってきてくれんかの？」

「え？ え？ でもいま」

「ほれ、お釣りでジューズでも買いなさい」

急にもうろくしだした祖父に外へ外へと押しやられ、ぴしゃっと襖を閉められた。

セリナはしばらく放心した。

「タバコなんて売ってないわよっ！ あーもうなに話してるか気になるうっう」

「——流星祭りに関するこのようです」

うわつと仰け反る。襖のもう片側に、コップをつけてへばりついていたチャイ。

「解せません。有馬はもちろん、お爺様も運営委員には加わっていません。俊郎さんも、失礼ですがこの町の行事に口を出せる立場ではないはず」

朝から居間に三人連れて、謎の相談事を進める祖父を同じ家にいるチャイが気にしないはずが無かった。おおむねセリナも同じである。

「そうなのよ、なーんかみんなで秘密の計画立ててるの」

「悪事の、匂いがします」

はて。セリナは首をかしげた。チャイが祖父や有馬のやることに興味を持つのはいつもの事だが、なんだか今はそれが悔しそうに見える。

「混ぜてほしいの？」

「……意味がわかりません」

「ヒキョーよねっ、男の子たちだけで楽しいこと企んでるのって。

お爺様もいい年して子供っぽいから、何だか友達みたいなんだもの。私は混ぜてほしい！」

「女子もいるみたいです」

「それよそれ！」

ぐぐいーと顔を近づける。

「キバリーさんって言ってたけど、やっぱり彼女ってアヤシイと思

うのよ！」

「そ、そうですね」

「前に話してたけど、ひばりさんにすごく似てたから。私、小さかったからよく憶えてないけどこんな偶然ってあると思う？」

「あるのではないだろうか？」

「そう！ あるってことが問題よ！」

シュバッと腕を返して、天に宣誓するように上を指し、

「そういう特別な存在がすぐ近くにいて、有馬が平気でいられてると思う！？」

「あ、あの、意味が」

「千愛ちゃんは平気なの？」

チャイはまともに目を合わせられず、視線を床に這わせた。

「あの……そういうことは関係ないかと。わたしは彼らが問題ある行動をしていないかどうかは気がかりなだけであって、素性の知れぬ人物が有馬と一緒にいるのは、別に、このさい大きな問題ではなく、まして、わたしが仲間に加わりたいなどは妄言にも等しい勘ぐりで」

「あー！ だからダメなの！ いーい？ 男の子ってのは元氣に見えて実は淋しがり屋なの。自分のしていることを理解されたいっていつも思ってる。見なさいよ、あの仲間同士でつるんだときの楽しそうな顔！ そこに見知らぬ女の子がいるのよ！？ 危険きわまらないと言っているわ！」

もうセリナとチャイの顔のあいだには小指分の距離もなかった。

「色々頑張ってるのはわかるけど、いちいち回りくどいんだからいいカゲン何かしないと私だってさすがに」

「あの！ あの、声が、しーっ、しー！」

涙目で真っ赤になってあたふたする。セリナは身を離し、こめかみに指を当てふしゅるるゝと排熱。

「……千愛ちゃんもつと有馬のそばにいていいのよ」

そのときばかりは、理解ある姉の顔をした。

チャイの考えている事は、ほとんど手に取るように解るのだ。

「許婚なんだし。有馬が気にするから遠慮してるのかもしれないけど、今こんなふうになったのは千愛ちゃんのせいだと思う。子供なんだから、カタイこと抜きに遊んでくればいいのよ」

「……子供でいいのでしょうか、有馬は」

セリナは答えず、嘆息して台所に戻った。

「ごはん食べましょ。今日の麺は自信あるんだから」

有馬の進めていた計画。それは流星祭りの乗っ取りである。

一からすべてを計画するには時間も人手も足りないのだから、すでにある枠をそのまま乗っ取ればいい。町会連中を上手く抱き込めれば面倒事は丸投げできるし、肝心かなめのプログラムに集中できるという寸法だ。

そこらへんの工作は任せろ。——トルジイは力強く言った。

有馬の役目は、地下にあつた飛行機を使い物にするための現場仕事となった。

「よくもまあこんなもん掘り返す気になったのう」

ガソリン屋の憲ジイは、駐機場に干された三機の機体を見て、呆れるように言った。

この人なら絶対に協力してくれるとトルジイの強力な推薦があつたのだ。ひん曲がつた腰でよぼよぼ歩いて今にも天に召されそうな顔でしれつとグラビア誌を買いに来たところを、キバリーとかが攫ってきた。

「ふん。これを見ると、昔を思い出すわい」

「憲ジイ、この飛行機のこと知ってるの？」

「ひとつは儂のだ」

目玉が落ちるかと思った。

「儂とジローはな、昔戦闘機乗りだったんじゃよ」

「郵便局員じゃなかったの!？」

「もつと昔の話だ。それはそれは、大昔の話だ。儂がこれに乗れたのはほんの数ヶ月じゃった。また飛べるようにしたいんか？」

「う、うん！ うんうん！ できる！？」

「部品が無きゃどうにもならん」

「部品なら大丈夫！ トールジイが任せろって」

「ほうか。ならもちつと人手がいるな」

自転車屋のシーラカンスこと小此木悟は、燃え尽きる前の最後の煌きを、この作業に見い出したようだ。

「ばかやろおおお後ろ通つときや声かけんかああああ」

「ぎゃー！ ごめんなさいごめんなさい！」

立駒基地の使われていないハンガーを今は三機の飛行機が占領している。有馬は排気管を磨いたりリベットを外したり、キバリーは人の周りをウロチョロして爺様方に怒られまくっていた。

「わ！ なにこれすごい！」

昼になるとセリナが弁当を作ってきてくれた。

「こっちのヒコーキかわいい！ なんて名前？」

「雷電だよ。右の方は紫電改」

「ずんぐりしててオモチャみたい！」

雷電の胴体は寸詰まりの方錐形で、機首に稲妻模様の塗装が施されている。

「あの、頭付いてないのは？」

「それが分かんないんだよね。尾翼の形は隼っぽいけど胴体長くないし、翼端にピトー管がついてる。塗装剥げてて計器も無いからなんかの試作機かって」

「あれはフォッケウルフだよ」

おにぎり片手に俊郎が現れた。

「フォッケ？ なんで日本にドイツのがあるの？」

「昔ドイツと組んで戦争してたころ買ったものなんだよ。陸軍でテ

ストしてたんだ」

「じゃあ、憲ジイってテストパイロットだったの？」

「さて、そこらへんは複雑な経緯があったそうだけど、僕からはな
んともね」

謎だった。

そもそもこの戦闘機が立駒基地の地下格納庫に隠されていたのか
も謎だし、爺様連中はそのところ話してくれない。

セリナは「ふーん」と頷くだけだった。

「この飛行機なおして、お祭りで何かするの？」

「あーそれはねー」

「おしえてよー！ 私も仲間に入れてよー。ほら、そしたら毎日お
昼作ってきてあげられるわ！」

有馬はひとつ感じるものがあつた。

そうだ。仲間だ。

目標に向かって、みんなで力を合わせて進んでいく。物事が雪だ
るま式に膨れ上がって勢いを増していく。今そんな実感があつた。
それはとても気持ち良い事だと思えた。

「うん。いいよ。セリ姉なら歓迎」

「ほんと！ やったやったあ！」

有馬も嬉しくなつて笑う。

そのとき、キバリーは首無しフォックケの中で戦争ごっこをしてい
た。操縦桿にしがみ付いて架空の空を飛んでいる。ぶぶぶーん。む。
敵機発見、四時下方。格納庫の隅っこを壁伝いに近づいてくる。そ
のまま気付かないふりをして、敵機を腹に潜らせた。油断したとこ
ろを返り討ちにしてやる——コクピットを出て、無音で背後に着地。
着陸脚の影で有馬とセリナが一緒にいるところを覗いているようだ。

——見敵必殺。

「ふー」

「ひいあああああつ」

叫び声を聞いた有馬は、フォツケの胴体下にいるキバリーと、チャイを見つけた。

「い、いきなりなにするんですか!」

「おこんなよ。挨拶じゃん」

「挨拶で耳に息を吹きかけないでください!」

「じゃあ舐めるのならえんかいのう」

「ひっ!」

本の修繕作業中に背後から脇をついたり、膝をカクつとやりとり、肩を叩いて振り向かせて人差し指でぶにゅとしたり、こないだからチャイはすっかりキバリーに気に入られているのだ。

「はなっ離してください! あなたに、用なんか無いのです!」

「じゃあ何しにきたん?」

言葉に詰まるチャイ。すぐるように見た先には、有馬がいた。

「ははーん」

「……なんですか」

「はっはーん!」

「あなたっ、失礼ッ」

「混ぜてほしかったのとちゃうんか?」

「ち、ちがっ」

有馬はじつと眺めている。キバリーは馴れ馴れしく、憲ジイと小此木爺はエンジンいじりに夢中で、俊郎はとつくに退散しており、セリナだけが訳知り顔で関係ない方向に目を流している。

「ちがいます——っ!」

叫びながら、チャイは全力で離脱していった。
いったい何しに來たんだろう。

有馬は首をかしげるしかない。

第三話ノ2

流星祭りの計画における最重要課題がパイロットの確保であることは明らかで、そのためにトールジイは各方面への働きかけを行っていたらしい。

が、そこでトラブルが発生した。

「国外線が使わせてもらえん」

現在、通信インフラの未整備は地方の抱える小さくない問題のひとつである。

内地なら無線で何とかなる。電話も役場に行けば使える。ただそれが海外となると、面倒すぎる手続きがあるし、用意が済むまで何日もかかるうえ莫大な費用を請求される。私用ではまず使えない。隕石危機以降はどこもこんな状態で、中継アンテナは維持できないし電話線は引けないし、唯一まともなインフラを整えている首都さえも、民間人が使うとなるとローカルネットワークが限界という有様だった。天気にも左右される無線はいざというとき役に立たないのだ。

「パラボラを借りようと思う」

基地の管制塔からトールジイは山の手を指差した。

山を越え、太陽光発電地帯も越えて、高架橋に沿って北へ北へと上つていくと、侵食に襲われて水没した都市部がある。かつて立駒で街を行ったら、そこにある駅周辺の繁華街を指していた、この地方の中枢だった街。

そこにあつたテレビ局の通信設備を拝借しようというわけだ。

ただの無線なら長波だろうが短波だろうが、外国の、それも意図した相手と交信するには偶然に頼るところが大きい。だが衛星があれば話は違う。隕石危機のドサクサでほっとかれている民間衛星なら付け入るスキがある、という話。

「それって犯罪じゃないの？」

有馬が訊いてみると、トールジイは二カつと笑い、

「昔は銅線抜いてよく稼いでたもんよ」

堂々と語った。（犯罪）

俊郎が手を上げた。

「レシプロ機パイロットなら国内にもいるのでは？ 海外の知人に頼まなくても基礎訓練は皆受けているはずです」

「ヒマな空軍パイロットの調達ぐらい簡単だが、あまりこういうことはデカイ組織に頼みたくない。公になれば面倒が増える。あと一基エンジンも欲しいしな」

部隊が編成される。

まず通信機器取り扱いのプロフェッショナルである俊郎を筆頭にして、先導役のトールジイ。電気技師として有馬。

「そして全知全能たるオレっちの登場で！」

ジョーカーということ。

俊郎の特殊能力『職権乱用』の発動によって軍用ジープの使用許可が下りた。

現地の被害状況は定かでなく、長丁場が予定されるものの、時間はあまりかけられない。

最低限のキャンプ装備が必要になった。

翌日、朝一番。

「ヒヤッホー！ そこだ蹴散らせー！」

大興奮するキバリーの横で、ぶすつとした顔の有馬がシートにうずもれている。

横に流れる緑の風景。サスペンションがギシギシ唸り、乗馬の訓練かと思うほどケツがよく跳ねる。乗り心地は最悪の一語に尽きた。道が悪いのであって車が悪いわけではなく、いつの間にか乗り込んでいたチャイが悪いわけだって、もちろんない。

トールジイにはこう説明された。

「あれは地図を読むプロだ」

今日び地図なんか五年前のものが手に入れば良い方で、侵食によって出来た崖や分断された道が、ろくな調査もなされないまま風化していくのである。家出のプロである有馬は、身をもってそれを知っていた。

知っていても、納得できないから、むすつとしているのだった。

助手席は、有馬のポジションだったのだ。

「右です。道から外れて、林の中を迂回してください」

「おし解った」「突っ込めー!」

いつそうひどくなる車の揺れ。

隣りにいる俊郎は狙撃銃のスコープの調整をしていた。

「トシさん。酔わないの?」

「ん? ああ。昔はよく吐いたよ」

「昔って?」

「そうだね、呉から脱出したときが一番ひどかったな。四方八歩敵だらけでさ。味方がクーデター起こして口封じに殺されそうになるわ、敵は攻めてくるわ空爆はひどいわ弾なくなるわ。これがなかったら死んでたよ」

有馬は歴史というものを知らない。かつて国が縮んで領土が分裂しまくってしつちやかめつちかになっていた、という話は聞く。そのときもう立駒は陸の孤島だった。およそ凄惨な戦いとは無縁でいられたのだ。

「ここがそうだとは思わないけど、人がいるかもしれないから。人つてのは怖いから。用心用心」

「川に出るので渡ってください」

「おい来た!」「いえー!」

水しぶき。鈍い衝撃。意識の影を蝕むようにざりざり襲い来る疼痛。込み上げてくる吐き気。

「……トールジイ、街まであとどのくらい?」

「心配するな! 16kmだ、真っ直ぐ行ければな!」

くらつときた。

チャイが横目で後部座席を覗いてくる。

至極平気そうな顔だったので、負けん気を起こして背を伸ばした。こんなもの酔ったうちに入らない。風邪っぴきのまま大雨に見舞われたときなんかもつと死ぬ思いだったのだ。舐めるな。

五分と保たなかった。

中継ポイントの電波塔につくなり有馬は林の向こうへ消えた。風光明媚な大溪谷に流れる一隻の船や、風車の国に横たわる花畑を想像してみると良い。

トールジイと俊明はさつそく変電設備の点検に入った。町のライオンとテレビ局を繋げるためだ。

「動くのですか？」と、チャイ。

「動く。老朽化して使えなくなってるウチの基地と違って、使われる機会が無かったただけだから。台風で木が突っ込んだとか、落雷でショートしたとかなければね」

チャイは心許なく頷く。電気的事はよく分からなかった。

俊郎は計器を眺め、トールジイは変電所の中でがっこんがっこんレバーを上げ下げしたりやっていた。チャイは手持ちぶさたになる。周りの景色に目を移す。

キバリーは車を止めた瞬間「うきっ！」と鳴いて森に突っ込んでいったきり帰ってこない。ふるさを思い出して野生に帰ったのだろう。水筒を持って、茂みに消えた有馬を追うことにした。見栄を張って酔い止めを飲まないあいつが悪いのだ。かっこつけても誰もほめない。非論理的で、ばか――

「……だめ」

小言ばかり出てくる。

仕方ないのだ。

有馬は車の移動なんか初めてだっただろうし、道の悪さは天下一

品で、自分だつて始めのうちは酔いに悩まされたのだから。こんなときは思いやりの精神で接してあげなければならない。そう自分に言い聞かせて、深呼吸して、

「――有馬。大丈夫ですか？」

茂みの向こう。木に額をつけて有馬はしゃがみ込んでいた。

吐いてない。顔色だけは青い。

「吐いたほうが良いです。我慢して治るものでもありません」

「チャイはさ」

背中を向けたまま、有馬は言った。

「どうして来たの？」

余裕の無い声だった。

けれどそれが、あらかじめ用意されていた言葉であることは、わかった。

唇を濡らして間を持たせる。理論武装はしてあった。

「お爺様に頼まれたからです」

「それだけで？」

「……不可解ですか」

「どうしていつもいきなりなんだよ」

「それは、有馬が」

「なんだよ」

「……………」

まっすぐな目に、見透かされている気がした。

ふいと有馬の方から視線が逸れる。

「笑いたかったら笑えばいいだろ」

「ちが」

「もういいよ。平気だから」

有馬は、根本的に誤解している。誤解したままいつも人の脇をすり抜けて行ってしまう。

それは、たぶん、自分も言葉足らずだから。

もっと話したいのに。ちゃんと知ってもらいたいのに。

林の奥から枝葉を身に付け、カモフラージュしていたキバリーがぬつと出てきた。

「ひゃう！」

「どつたん？」

「あ、あなたは空気を読んでください！」

引き返した。早足になる。恥ずかしくてイラついて、こけそうになった。

有馬は子供だ。

ばかあほまぬけ。

昼を過ぎたころ、繁華街跡に入った。

ガードレールのすぐ下に打ち付ける波しぶき。視界の果てまで広がる海。そこから煙突みたいにビルがいくつも生えていた。

逃げ水の浮かぶ道の先、真つ黒コゲになるまで焼けた麦藁帽の爺さんが、釣り竿片手にぶんぶんと手を振ってやって来る。

「うおおおおーい！ 待ったぞおおー！」

拓海だ。

拓海はトルジイの兄で、漁師である。そして漁師であるからには自前の船を持っていた。目的地のテレビ局が水没しているから、そこまで運んでもらう予定だった。

ケチな漁船に機材を運んで、すぐ出航となる。

「昔はなあ、この南に港があつてよ、そこから一帯工業地帯で釣れどもヒトデぐらいだったもんよ。沖に出なきゃ大物なんて釣れねえ。こんな綺麗な海がだぜ？ 潜ってみるよ今じゃーすっかり竜宮城だ」

緩く舵を取りながら、大声で話している。

「建物があるとなあ、面白れえことに潮の流れが迷路になるんだな。満ち干きでちとコースが変わるが、覚えちまえばエンジンなしでもここら一帯一巡できるんさ。どういう具合でかそうなっちまった。だから道に迷っても元の場所に帰ってくるんだな」

リゾート施設にあるプールなんかを有馬は想像した。昔はそんなのがあつたらしい。

「だからオレは考えた！　ここを観光地にしてひと儲けできねえかってな！　都に住んでるやつらは海なんか一生見ねーで育つみてえじゃねえか。純粹培養つてこえーな。人も動物なんだからお日様の下で自然の恵みをかつ食う幸せてやつを知ってほしいもんだぜ。そのためにやオレみたいな船乗りがいるのさ。そうだろ有馬！」

「そうですねー」

そうだろグハハとやかましい。トールジイは泰然と海に釣糸を垂らしており、チャイは地図と面突き合わせ、俊明はライフルを構え形而上の敵を次々とあの世に送っている。キバリーがサンなんとかに心を置いてきたとかいう意味の歌を絶望的に外れた調子で歌っている。

有馬はそのとき物思いにふけていた。

立駒では「外に出て何になる」と言われるのに、こういう爺さんたちもいる。彼らは外に出て何になるのかちゃんと自分の考えを持つていて、それが周りからも認められている。

何が違うのだろう。

自分と、この人たちの違いは。

分らない。

けどはつきりと違いを感じた。

外に出て冒険するのが、かつこいい男の生き様みたいに思ってた。

なのに、そう思えない人もたくさんいるのだ。

そんなのはつまらない。

けれど――

景色を眺め続ける。

旅の途中で何度か見たはずの、どこにでもある廃墟の町並み。

有馬にはそれが、静謐さをたたえる神社や、靈妙な山の洞窟と同じように映った。

ヤーコや、ほかの大人たちが、冒険ゴツコと言って眉をひそめる、有馬にとって遊び場は、彼らの故郷だったのかもしれない事に、ふと気付いた。

第三話ノ3

目的地に着くまでやたら長く感じた。

他の建物よりいつそう高くそびえたテレビ局のビル。ぶどうの房を逆さにしたようなアンテナ群が天に向かって連なっている。

ゆったりと進み、外壁に船を横付けした。

「いやふー！ 一番槍もらったりー！」

「あ！ こら！」

鉄砲玉があいつ。

キバリーの飛び込んでいった窓に梯子を渡していく。拓海は待機するようで、焼酎片手に「いつてこーい」と手を振っていた。

乗り込んだ。

パーティションがドミノのように折り重なったフロア。机も椅子も壊れたパソコンも一緒くたに流されて隅の方に固まっている。そこらじゅう生臭い。潮の影響であちこち壮絶に傷んでいる。

フロアの真ん中で、キバリーはぽかんとしていた。

トルジイはそれを見ると他三人に向き直って、

「細かい予定がどうなるかはこれから手探りだ。とにかく上を目指す。足場に注意して進むぞ」

蛍光灯のランプを点けて、辺りを照らした。

「ほらキバリー何してんだよ行くぞ」

「おー」

廊下に出ると、壁に青錆びだらけになった地図プレートを見つけた。俊郎がデジカメに撮ってデータをとり込みチャイに何かを相談している。

壁に落書きがあった。

『この街の有様も』

やがて忘れ去られるだろう。
私たちはここにいた』

「これ……」

「人が住んでみたいだな」

トールジイは悼むように眉を歪めて、それ以上何も言わず先に行ってしまう。

荒廃の跡は、上に行くほど見て取れるようになった。

廊下に並んだコンロや食器。扉に人の名前が赤いペンキで書き殴られている。天井の板が剥がれて簾のように垂れ下がっていた。人為的に壊されたいくつもの壁。明らかに人の侵入を阻むため積み上げられたバリケード。堆積した埃と、動くものの何も無いしんとした静けさ。

あちこちに後付けの生活空間があった。

いつ海に呑み込まれるか分からない場所で暮らしていた人々の、固執の跡だ。

立駒の中心街は居住困難とみなされて、何十年も前に放棄された。移住は計画的だったはずだ。

分らない。

どうしてこんな危険な場所に、追い出されるまで住み続けたんだ

「有馬」

チャイの一言で、行き止まりにすることに気付いた。

「小休止です。水を飲みましょう」

「うん。ああ」

水筒を受け取って、ほんのひと口含んで飲み下した。熱が口から抜け出るような息。

「水分補給はこまめにしましょう。今日は荷物が多いですから」

「言われなくても分かってるよ」

「有馬一人では危険です」

「ねえ、それよりキバリーは？」

「？ さっきそこに、」
「いない。」

まさか、また、あいつ。

「ちよつと捜してくる」

「あ、アリマ！ 勝手に離れてはダメです！」
チャイも付いてきた。

「おいキバリー！」

もと来た道に戻って捜したけれど、近くにはいなかった。まさかまだ入ってない部屋とか探しに行ったんじゃないだろうな。何考えてるんだ。このビルがどれだけ広いと思ってるんだ。

いつも、勝手にいなくなる。
嫌な予感がする。

キバリーが突飛な行動に出るときは、大抵歓迎すべきでない事が起きたのだ。

「有馬、落ち着いてください」

「なんだよ！ 邪魔するなよ！」

「しないで。冷静になって、一緒に捜しましょう」
後ろから手を引かれた。

「……なんだよ、お前キバリーのこと嫌いじゃなかったのかよ」

「嫌いです、あんなひと。でもそのせいで有馬が危険なことをするは、もつと嫌です」

真顔で何言ってるんだ。

まあいい。とにかくキバリーを捜さなきゃ。

ひとつひとつの部屋をしらみつぶしに捜していった。部屋と言ってもやたら広いし死角だらけで、崩れていて通れないところもある。見失った時間を考えれば、そう遠くには行っていないはずだけれど。

ほどなくしてキバリーは見つかった。

そこは収録スタジオだった広い空間だ。

一段高い演壇のような場所に、ぺたんと座り込んでいた。

「キバリー。一人で行くなつて何度も……」
少し違和感。

スタジオ内は他の部屋と違って綺麗に片付けられていた。人の手が入っている、というわけではなく、建物の奥まった場所にあり、風雨に晒される事が無いからだろう。ただそこは年月の経過だけが生み出す地層のような静寂にうずもれていた。

佇む姿に気は無い。視線は宙を彷徨っている。

キバリーの目の前に、ふたつの白骨が並んでいた。

手を繋ぎ合った、男女の遺体。

そこで時間は止まっていた。

止まった時間へ迷い込んだかのように、キバリーは動かなかった。床に文字が彫られている。

『悠久はここにある。』

私たちはこれでいい。

たぶん、この二人のどちらかが遺した言葉だろう。

困窮の歴史はそこかしこにある。けれど人類そのものが滅亡したわけじゃない。住処を変えれば緑はあつて、自然の恩恵には与れた。その選択をしなかった人が、少なからずいたのだ。

——住みにくければ出ていけばいい。

そう考えるのが、当たり前だと思っていた。

「キバリー、どうして、」

躊躇いがある。

それでも有馬は訊いた。

「どうして、そんなに、悲しそうにしているの？」

そう見えたし、そうとしか思えなかったから。

「この町に——」

ぽつり、と。

「永遠なんてない。だから私は」

——私？

その先はよく聞こえなかった。

それとも、言葉にならなかったのか。

思えば、これが核心だったのかも知れない。

ともあれそれ以上キバリーは何も言わなかったし、何を思っ
てここにいたのか聞き出す事も出来なかった。数秒後にはにかーと笑
って「何ぼーっとしてんだよ、バカなのー？」いつもの調子に戻っ
ていた。

本音を言えば、触れる事が怖かったのかもしれない。キバリーは
宇宙人で理解不能で、だからこそ一緒にいられて無茶をやれた。本
当の目的なんて知りたくなかった。不思議で面白いヤツがそばにい
てくれれば、それだけでよかったのかも知れない。

結局有馬は、そのとき生まれた感情に正体を見出すことは出来な
かった。

廊下から物凄い音がして、それどころじゃなかったからだ。

「——っわっ、うわ、なんだ!？」

ビルが揺れるほどの衝撃。チャイが我に帰った様子でトランシー
バーを取った。

「お祖父様、ご無事ですか？ 何がありました？」

「——千愛か、無事だ。ちとまずいことになった」

不穏な声。

『崩落があつた。分断されたぞ』

日の光が差し込む場所。そこが階段の入口で、踊り場付近のガラ
ス張りの空間から、丸ごとそー一帯が崩れ落ちているのが分かった。
ごっそり無かった。上に行くための階段が。ガラスも枠組みだけ
になってしまつて、外の景色が良く見えてしまっている。

「千愛ちゃん！ ここだよここ！」

吹き抜けになつた上の階から、手を振っている俊郎が見えた。

「この階段から昇ってきたんだ！ 戻れなくなっちゃったよ！」

「どうするんだよ、これ……」

「戻りましょう。危険です」

有馬は何もできずに放心していた。

『千愛、俺だ。別の場所から合流はできそうか？』

「わかりません。この規模の建物なら、階段がひとつだけというのは考えにくいですが」

『とにかく合流場所を探す。見つけたら連絡してくれ』

「了解です」

そうしてしばらく、上の階への探索が行われ、

「ここじゃねーの？」

キバリーの呆れ声が響くのだった。

三人がいるのは、瓦礫に埋まった通路の前だった。崩れた階段から、建物のちょうど反対側に回ったかたちになる。

「迂回、できるかな」

「できないと思います。ちょうど階段になっている箇所が崩落しているようです。回っても無駄骨です」

どうにかできないか考えていると、ツールジイから連絡が入った。『落ち着いて聞け。さっきの崩落だがな、何か仕掛けがあったみたいだ』

「仕掛け、ですか」

『侵入を阻むための仕掛けだ。経年劣化とは違う崩落の跡がそこらじゅうにある。さっきのも、俺たちが来たせいで作動したようだ。巻き込まれなかったのは運が良かった』

なんだそれ。

ますます冒険じみてきた。

それなのに嫌な予感しかしないのは、別にビビったからではなくて、現実が物語のように「楽しくて面白い」選択をしないからだ。大人と一緒に入れば尚更に。

チャイがトランシーバーを差し出してくる。

「有馬に、お祖父様から」

「……………」

おそろおそろ受け取った。

「……………はい」

『有馬か。聞いてのとおりだ。このまま続けるのは危険が大きすぎる』

「うん」

『お前さんは千愛と一緒に、船まで戻れ』

交通事故レベルの衝撃だった。

普通なら、そう言う。危険な仕事にわざわざ子供を付き合わせた
り頼ったりしない。

「そっちは、どうするんだよ」

『俺と俊郎とでなんとかなる。目的は衛星の制御端末と立駒基地を
オンラインにすることだ。それほど手のかかる作業じゃない』

「嘘だね」

なんとなく分かってしまった。

トールジイは道楽者で冒険野郎で見る人が見れば怠け者に映るかも
知れない。それでも信用されているのは高い技術と知識を持って
いて、約束を果たす人間だからだ。夢みたいな事ばかり言ってるか
らじゃない。時には現実的で厳しい選択を行なってきたからだ。

そんなもの、チャイを見てれば分かった。

「僕を連れてきたのは楽しませるため？ 危険があるのは分かって
たんだ。分かってて連れてきたなら、そうする理由があるはずだ」
『そうだな』

否定もされなかった。

そもそも行く前に仕事内容は説明されていた。立駒との導通試験。
無線で中継するといってもこのビルを使うなら、ビル自体の点検を
しなくてはならず、そのための人手がどうしたって足りないから有
馬が駆りだされたのである。

その上でダメだと言うなら、本来の目的をスポイルした事になる。

「それに手のかかる作業じゃないってのも嘘だ。そんな仕掛けがあるなら、この先何が起こるか分からないじゃん。こつちを巻き込みたくないだけだろ」

溜息を挟むような間。そして、

『どのみち、お前たちが上に昇ってこれないなら俺の言うとおりにするしかない』

突き放された。

明確に「来るな」と言っていた。

『正直言うとな、このビルのてっぺんにあるパラボナアンテナを使いたいっつーのは、俺のわがままだ。こんな大飯食らい、わざわざ使ってやらなくても衛星に繋ぐ方法はある。だが欲が出た。俺はな、他のたくさん場所に、貸しを作る方法を選んだんだ』

「……どういうこと？」

『こいつはもう、お前だけの計画じゃないってことだ』

わからない。

トールジイに、町に、知らない大人に、知らない理由で、この計画は利用された、という事？

『だからな、有馬、作戦変更なんだよ。お前らは無理に付き合っこない。拓海に頼んで送り帰してもらっ。基地で憲心さんの手伝いでもしろ。こつからは、俺の独断で』

「いやだっ!!」

ほとんど反射的に。

許せなくて、叫んでいた。

勝手に、いきなり、全部決めてしまうなんて。

トールジイには、これでも感謝しているのだ。

お祭りの計画なんて、有馬にとって所詮火遊びの延長だった。なのに律儀に付き合ってくれて、話の分かる人だと思った。そこに、他の思惑や利害なんて考えなかった。いい大人が「面白いから」と、ただそれだけで動いてくれたと思った。

そんなわけない。

お互いさまだ。

人の善意にタダ乗りしていた。

自分にできないことをやってもらった。

それで自分だけ利用されるのは嫌だ、なんてどの面下げて言えるのだろう。

「トールジイ。ぼくたちは、仲間だよ」

冒険は死んだら自己責任である。

最初からそう決めていた。

「キバリー、聞いてた？」

「おう」

「何とかできない？」

「んー、どうだかなーって感じなのだよ」

チャイがぼかんとしている。

この際キバリーの事を知られてどうこうとか気にしている場合じゃないかった。

「やれるなら、やって欲しい」

「おっけー」

壁に手をつける。このあいだ南京錠を引きちぎった時みたいに、キバリーは物の組成を組み替えたり複製したりできる。それで、なんとかこのビルにある危険な仕掛けを選択的に取り除いてもらおうと思ったのだ。

「なあアリマ」

「なんだよ」

「オレっちは難しいことわっかねーけど、ここにいた奴らってなんでそういう仕掛けとか作ったんかな？」

「え……侵入させないためって言ってたから、やっぱり自分たちを守りたかったんじゃないかな」

何の気なしにそう答えた。

真実、争いがあつたかどうかは分からない。文明が崩壊して略奪が横行していたからとか、そんな大げさな事じゃないと思う。むしろ

ろ、こんな危険なところは頼まれたって住みたくないし、安全な場所がすぐそこにあるのだから、彼らを保護しようとした人さえいたはずだ。

「ここがあいつらの家だったんだな……」

ぽつりとそう呟いて、

腕の模様が走った。

結局一日仕事になった。

こんなクソボロいビルでやる導通試験がトラブル無しに済むはずない。建物の中はいくつかのバリケードで区切られていたし、そのたびに迂回路を探す羽目になったうえ部屋と部屋を跨いで電線を捜して伸ばして繋げたりもして、何度も何度も建物の中を重装備のまま往復した。

経路の点検がすべて終わっても、上の話では肝心の衛星とのリンクが確立できていないらしい。

だからテストは明日に回して、各自で休みを取ることになった。各自で、というところがミソである。

トールジイと俊郎とは未だに合流出来ていない。二人はどうせ夜中まで作業を続けるだろうし、有馬はやれるところまでやってもうくたくたに疲れていた。合流ルートを開拓したり上までロッククライミングしたりする余力も、その必要も特に無かったのだ。野営装備はみんな持つてるし、連絡なら無線で済む。

キバリーは倒れた。

ビルの仕掛けを取り除いたあと、気絶したみたいに意識を失くした。

原因は分らない。キバリーの力については分らないことが多いすぎる。このビルに入ってからはずっと様子がおかしかったし、無茶な力の使い方をして神経を使いきってしまったのかも知れない。

キバリーを休ませて、作業はチャイと二人でした。それも終わり

だ。

会議室のような広い部屋の隅っこで、有馬は力尽きて横になった。横にキバリーが寝ている。

その向こうにチャイがいて、ランプの明かりを消していた。マツトレスに寝袋が三つ川の字になっている。

「有馬は起きてますか……？」

「寝たいよ、今すぐ」

「質問があるのですが、いいですか？」

「寝たいって言うてるのに……」

「キバリーさんは何者なんでしょう」

「やっぱり訊かれるか。」

「前、話したろ、流されてきたの拾ったって」

「そうではなく今日のことです。彼女は何の専門知識も無いのに最初からメンバーに加わっていました。お祖父様が決めたことなので口は挟まなかったですが、さっきの罠もその、彼女が何かしたあとに、すべてがうまく解決したような……」

「あー……そう見えるよね」

「そう見えるも何も実際そうだ。咄嗟に嘘をひねり出す。」

「キバリーは、こう見えて天才なんだよ」

「天才？」

「一度読んだ本の内容とか一字一句全部おぼえられる。会ったばかりのときは字も読めなくてさ、けっこう難儀したよ。でもそういう特技があつて、勘もめちやくちや鋭いから頼りになるんだよこれで」
「………とても嘘くさいです。それに、それがさっきのことと何の関係が……」

もやもやした気配。チャイはキバリーの刺青が突然動いて壁の中に入っていくところまで見たはずだけど、馬鹿馬鹿しいと思っているのか、あまり突っ込んだ事を訊けずにいるようだ。頭が堅すぎる。

「有馬は、その……抵抗はないのですか？」

「なんの？」

「その、……キバリーさんは、私にはよくわからないけど、お祖父様に頼りにされてて、女の子なのに」

「キバリーがオンナ？ そりゃないよ、馬鹿？」

「どう見ても女の子です。わたしも……有馬はなんともないんですか？」

何をムキになっているのだろう。

男女で雑魚寝が不潔とか、そういうことだろうか。

「気にならないなあ」

「それって、ひどくフェアじゃないです……」

「フェアって何に対してだよ。意味わからん」

チャイは今にも泣きそうな声だ。な、なんだなんだ。何か悪いこと言ったか？

「今日の有馬は、おかしいです」

「人のこと言えるのかよ……」

「お爺様に言われたとおり帰れば良かったのです。有馬がここまでする理由が分かりません」

ぶちぶちぶちぶちうるさい。喧嘩売ってるのか。

「お爺様のしていることが、ある種の町興しであることはわかります。けど本来なら有馬はそういった試みを毛嫌いしたはず。町のため、他人のためなんて、有馬がもっとも嫌う言葉ではなかったのですか？」

さすがにムカつ腹が立ってきた。

「言いだしつぺはばくだ。それに他人のためじゃない。自分のためだし」

「余計わかりません」

「……もう寝ようよ」

「キバリーさんのためですか？」

「はあ？」

なんでまたキバリーが出てくるんだよ。

向き直つてみると、月明かりが差し込むせいで、思い詰めたような弱々しい表情が見えた。

「彼女を故郷へ返すために連絡手段がいるのではないですか？ 有馬の奇行が目立ってきたのはキバリーさんを見つけてからだと聞いてます。すべては、そのためではないのですか？」

馬鹿らしくなる。

そつぽを向いて、外の景色に目をやった。

「知らないよ……そりゃキバリーが来たせいで色んなことが変わったかもしれないけど、そんなの、ただの口実なんだよ」

キバリーは何もしていない。がらくたを寄せ集めて宇宙の仲間と交信したり、UFOに乗って殺人レーザーを雨あられと降らせたりもしない。ケラケラ笑って勝手に遊んで、自由に振舞っているだけだ。

町と契約した。そう言っていた。

有馬はその手伝いをしている。

でも今はそんな関係ない。

「最初からそうしたかったんだよ、みんな」

空に星が浮かんでいた。

見上げるものは、いつまでも衰えない輝きを放っていて、錆びつこうとしない。

「有馬も、最初から、こうしたかったのですか？」

「そうだよ。楽しそうだからやるんだ。おかしいことなんて何もない」

強く、強く言い張った。

「……わたしも同じです」

まるで予期しなかった言葉に、有馬は目を丸くした。

「おやすみなさい」

それきり寝袋にもぐってしまった。

有馬は目が冴えて眠れなかった。

役立たずになりたくないから、ツールジイの手伝いをしていると

チャイは言った。

かつては大人しくて本が友達で、いつも部屋の中にこもってばかりで、何を考えているか分からない、置物のような女の子だった。それはだめだと思って、外に引っぱり出したのは、有馬だ。

一緒に遊んで、話して、笑ったり怒ったりするように、今では立派に一人で歩いている。

それが、有馬は少し悔しかった。

チャイが悪いことなんて、何もないのだ。

そうか。

フェアじゃないって、そういうことが。

自分が情けなかった。

第三話ノ4

何はともあれ。

テレビ局でやれるテストは無事終わった。

朝になったらキバリーは何事も無く動き回っていて、逆に有馬がげっそりしていたくらいである。

帰りの船で、遠ざかってゆくビルを見上げ、有馬は少し不安な気持ちになった。

チャイは操舵室にいる。さっきまでトールジイも大自然と一体になるといつて船尾で小便していたし、俊郎は揺れを物ともせずにはツプトツプの通信端末に向かって難しい顔をしている。キバリーは調子の外れまくった日本語英語でダーリンそばにいてくれとかなんとか舐先に座って歌っている。

「人、もういないのかな」

ぽつりと、当たり前前の事を口にしてみた。

水に浸かって、腐って、倒壊していく高層ビル群。

塩水のせいで作物は育たない。冬には凍えるような潮風。国の援助なんかを期待している町はもうほとんどなくて、どこも自給自足の体制を整えているか、整えようとしているか、無理が出て解体吸収されるか、荒れ果て忘れ去られるか。

「人なんてどこでも住める」

むんといつの間にか横にいて胸を張るトールジイ。

「そうかな」

「そうだ」

「そうかもね」

「そうに決まってる」

クスクスと有馬は笑う。

「あと、言ってなかったが、まだ仕事は終わってないぞ」

「……電気だよ」

「そうだ。あのクラスのパラボナで出す電波だからな。こつちから持ってきたバッテリーなんかじゃ動かん。立駒から引いてこなきゃならん」

「当てはあるの？ そんな余剰電力うちの町にないでしょ」

「あるさ。お前だ」

あまり驚かなかった。

なんとなく、予感があった。

覚悟もしていた。

「最後の難関は、お前の親父を説得することだ」

役所に協力してもらって、風力発電でまかなっている何百世帯かの何アンペアを合法的に分けてもらう。という計画は、到底許可できるものではなかったらしい。

許可してもらえなくなつて計画には必要だ。

何百世帯かに迷惑をかけてでも強行するしかない。

蓄電が容易な現代では、風車だつて立派な電力供給源のひとつでありその保守管理はヒステリックなまでに徹底されている。くれと言ってもらえるものじゃない。電気ドロボーは重罪に値するし、不正利用がバレたら泣いても頭を丸めても許してもらえない。

「わかつてるのか？」

鬼もくびり殺せそうなほど親父の顔は歪んでいた。

「犯罪に加担しろと言ってるんだぞ。そんなのが許されると思ってるのか？」

その場にいるのは有馬と親父と、トールジイとキバリーの四名であつた。

有馬の家の台所。食卓が会議に使われた。

親父がトールジイに向ける目は「よくもうちの子をたぶらかしてくれたな」という種類の明確すぎる敵意であり、トールジイはそれを生徒指導室に呼び出された不良少年の態で耳クソほじったりあく

びをしたりして受け流している。

今日に限らずこの二人はいつもこうだ。

親父はトールジイのことを生産に携わらない放蕩者と思っているし、トールジイは親父のことを堅物と評して毛嫌いしている。このときばかりはキバリーも目をまん丸にして大人しかった。

必然、交渉できるのは、有馬一人に限られた。

「……思つて、ないけどさ」

「なら馬鹿な真似はやめてもらうぞ。あんたも、親父との約束だかなんだか知らないが、ウチを巻き込むのはそろそろやめてもらえないか？ 許婚の約束だつて酔った勢いで決めたそうじゃないか。どうしてそこまでふざけて生きられるんだ」

衝撃の事実が今明らかに！

愛は育てるもんだからなあと、のらりくらのトールジイ。頼むから親父を逆上させるのは止めてほしい。

「あの、あの、別に停電に追い込むまでは」

「絶対に承認できん。お断りだ。お前も馬鹿なことやってないで宿題のひとつでもやれ。夏休みになってからずっと遊んでばかりだろう」

「そう……だけど」

頭ごなしだった。

同じ舞台に立ってくれない。

「だいたい、何のメリットがあるんだ。普段と違うことができて楽しいだろうが、楽しいだけだ。このジイはな、金と労力を使って贅沢がしてただけだ。しかも他人様の金をだ。お前までそんな考えに染まったらどうなる？ 先のことを考えて行動しないと報いを受けるのは自分なんだ。わかつてるのか？」

そうだ。

その通りだ。

みんな長生きするために生きているのだ。

日々の暮らしを豊かにするために働いているのだ。

町のために、他人のために、死んで祝福してもらえるように。

親父は、そういうことを言っている。

何も間違っちゃいない。正しい。正論はいつだって正しい。

ただ、どうして、非の打ち所のない正論ってやつは、人の心に響かないのだろう。

「お願い……します」

有馬は椅子から降りた。

食卓の横に正座して、そのまま頭を下げた。

この期に及んで土下座というやつだ。

人生で初めての。

「なんのつもりだ」

怒りを通り越して、その響きには侮蔑さえ込められていた。

「お前が頭を下げてたって何になるんだ？　こんくらいやってやったんだから、不正を見逃せって言いたいのか？　馬鹿なのか？　よく考える。インフラの配分が俺の一存で変えられるわけがないだろう。管理してるのは俺だから俺さえ抱き込めば何とかなるとか思ったんだろうがな、んなもん誰でも気付く。証拠は絶対に残る。責任を取るのは俺だ」

普段から、世帯ごとに蓄電はされているから、供給が途切れても三日はもつ計算だ。テストは一日あれば足りる。半日もかからないかもしれない。なくなつて困るものではないが、勝手に使われたら大いに困るのだろう。

「鉄平。使いたくても使えないときはあるだろう」

ちなみに親父の名前が鉄平である。

「何が言いたい……？」

「この風車で作られる電力がなくなつても、仕方ない、で済ませてもらえる事態はときどき起こるだろう？」

「だから何の話だ！」

有馬には心当たりがあった。

——台風。

じゃんけんでグーチョキパーを出されて、これは無敵です、と言われたときみたいな、間の抜けた沈黙があった。

「キツイ風が吹けば風車は止めざるをえんだろっ？」

「だからなんだ？ 止めたら使えない」

「だから、そんなくらいの緊急時なら電気止められたって仕方ない、と皆が思い込んでるところを利用するんだ。天候が悪くなるのは誰のせいでもない」

「意味が分からない」

トールジイの表情は、まさに悪魔か悪徳商人か。

「台風が来て、ここの風車だけ都合良く避けてくれたら、誤魔化しがきく」

「あるわけないだろそんなことが！」

もちろん、そんなことは有り得ない。

立駒に風の吹くとき必ず風車が回る。そういう場所に立っているのだから。

「鉄平。俺と賭けをしないか？」

とても不敵に、不遜に。

「今日の夜までに、安全基準値を越える風がここだけ避けて吹いてくれたら、その分の電気、こっちに回してくれ。吹かなかつたら俺はもうお前の家に関わらない。お前の親父とした約束も全部取り消して、有馬とは口も聞かない。千愛にもそうさせる」

これは有馬が絶句した。

親父はなおも抵抗する。

「……あんたが、約束を守る保障がどこにある」

「なあ。約束を守るなんざ当たり前のことだ。お前さんには俺が息子を手玉に取って利用してるみたいに見えるかもしれないが、これでも約束を違えたことが無いから信用されてるっつーことを分かってもらえんか？」

……このじいさんは。

「それにな、お前さんは息子にこうまでしないと指先ひとつ動かし

てくれない人間だっと思われとるんだ。そこまでして狭量でありたいか？ 誰にも迷惑のかからんことで、いちいち目を三角にしたいのか？」

「……………」

信用するに値しない話だ。絵空事だ。常識的に言つて有り得ない状況だ。そんなもので言質を取つて一体何を企んでいる。

親父の中で、そういった疑念が渦巻いているのが手に取るように分かる。

ここまで言われてしまうともう感情論になつてしまふ。親父が感情論の嫌いな事を知つていないとできない話運び。じじいめ、詰めにかかったか。

まるで助けを求めるように、

「……キバリーさん、君も、彼らの企みに参加してるんだろ？」

「ほえ？」

親父はキバリーに水を向けるという暴挙に出た。

「彼らは何をしたがつてるんだ？ 正直なところを教えてくれないか？」

キバリーは目をぱちくりとさせ、

「んーとね、ショージキ्यूとこいつら、お祭り馬鹿だけですよ？」

やらかしやがった。

キバリーらしい発言だった。

全てを水泡に喫しかねない爆弾級のお気楽さだった。

「まーでもこれが成功すりゃーオレっちも家に帰れる算段が立つつて言っただから、協力したいじゃん？ ついででもいいーよ」

——あれ？

今、キバリー、嘘ついた？

土下座継続中だった有馬は、身を起こして、キバリーを見た。

「ここまでしてくれて、お祭りまでしてくれるんだから、サイコーだよ。言うことないね。アリマとはもつと遊びたかったけど、それ

は仕方ないよねー」

その真意が有馬には分からない。

けれど、親父には、どうしてか伝わったようだ。

「……風が吹けばの話だ」

敗北宣言にも等しい苦々しさ。

第三話ノ5

庭の植木に囲まれた場所。

トールジイと有馬は、会話もなく突っ立っていた。

聞きたいことも、言いたいことも山ほどあるくせに、土に絵を描いたり、雑草を抜いたり、石を拾って投げたりしている。話すきっかけを見失っているようにも見える。大して汚れてもいないのにズボンの埃を払ってトールジイは思いついたようにポケットの中を漁った。タバコのケースだ。一本とって箱をとんと叩いて、吸おうか吸うまいか迷っている。ひと夏かけてちびちび吸っていく計画だったのである。今どきパイプ以外だと製造メーカー自体が少なく、次いつ手に入られるか分からないのだ。

その様子を、じつと有馬は見ていた。

「……吸うか？」

「吸うか！……匂いは好きだけどね」

「ほー。タバコの匂いなんか子供に嫌われるもんだけどな」

結局マツチで火をつけた。もったいつけて、うまそうに吸う。

「懐かしいんだよね。その匂い」

「そりゃーお前あれだ、ジローさんが吸ってたからな」

ジロー。有馬の祖父。

有馬が生まれたころ、もう祖父はいなかった。ときどき、おじじ連中の口から出てくる「ジロー」の響きは、まるで生者を語るような親愛が込められている。それが有馬には気になる。

「うちのお爺ちゃんってパイロットだったんだよね？」

「ああ、そうだな」

「かつこよかった？」

「すげーカッコ良かった。あの人は俺の目標だ」

真っ正直に言うので、思わずニヤける。

「うちのお爺ちゃんとトールジイって十歳くらいトシ離れてるんだ

つけ？」

「ああ」

「若いころパイロットやってるところ見て憧れたの？」

「いや、そういうのとは違うな」

吸わずに顔の前で煙をくゆらせ、

「ジローさんの周りには自然と人が集まったんだ。いつもみんなで何かしたがつて遊びの種を持ってくる人だったから、みんなジローさんのことが好きだった。あの人の周りにいれば退屈することはなかったんだ」

まるで、今のトールジイみたいだと思う。

「飛行機を持ってきたのもジローさんだった。みんなでそいつ直して使えるようにした。直し方教えくれって、悟さんに頼んだっけな。まあ何せ憲さんもジローさんも乗るほうが専門で、俺なんて機械触ったこともなかったし」

「今と同じことしてたんだね」

「ああそうだ。だから、俺たちの団結は固いぞ」

自分と同じ少年時代がトールジイあったことが嬉しくてこそばよくなる。

「だがひとつ、勘違いしているな。俺たちはジローさんの周りに集まったが、今は違う」

タバコを人差し指にして、

こっちに向けるのだ。

「今はお前が中心だ」

「――」

顔がみるみる赤くなるのが分かった。

そんなはず、ない。

最初にトールジイがこの計画に乗ってくれなかったら、子供の戯言で終わる話だった。無謀としか言いようのない思いつきに形をくれたのは、いつも周りの大人たちだった。自分なんかコバンザメみたいにくっ付いていただけだ。

「そ、そんなの、一人じゃ何もできなかったし……」

「人の持つエネルギーの総量は一定だと俺ア思っんだな」

「は？」

何を突然わけのわからない事を。

「個人差はあるが、大差ないっつーことだ。やる気と言いかえてもいい。あるやつ、ないやつで見た目は違うが中身はどれもどっこいでな、無いように見えるやつにもエネルギーは蓄積されてる」タバコをひとくち吸って吐き、「みんな燃やし方を知らないだけだ。見たる側の勝手な言い分だな」

「……………」

なんとなく分かってくる。

「トシとつてくると、何やるにも腰が重くなつてきやがる。俺もそうだ。何もかも面倒くさい。ケツひっぱたいてすぐ動かないやつが嫌だ。そういう世界で生きていかなきゃなんねーってことが死ぬほど嫌だ。だがな、自分のやりたいことを真剣にやりたいなら、そういう生き方を学んでいかなきゃならねえ。大人になるつつうのは結局、自分のワガママを突き通すためだかな」

この人は……絶対昔不良だったな。

「だからな、有馬、お前は背伸びしなくてもいい。俺がやる。いきなり頭とか、下げんなよ」

何のことかと思ったら――

ことさら遠回りしたお説教だったのかい。

トールジイがまさか説教とは。

「うわ。きもちわる」

「うるっせえ！ 誠意なんてもんは必要なときだけ履行されりやいいんだよ！」

「……だからって……あんな無茶なこと約束させて、怪しまれたらどうするんだよ」

「負け戦だって気付かなかったやつが悪いな」

しれっとよくも言うのである。いいか悪いかの問題ではなく、不

要な誤解をまねくのが怖いわけで。

「それにな、俺がやったつって誰が信じる？　台風だぞ」

「キバリーに、やってもらうの？」

「ほかに誰ができる」

「だって、キバリーって、もの作ったり増やしたり腐らせたりできるけど、台風起こすなんていくらなんでも無理なんじゃないかって」

「――ヘイ！　オレっちがどうかしたのかい！」

屋根のほうから何やら聞こえた。

見ると、玄関のひさしの上にキバリーがスタンバっていて、「とおっ！」と今ジャンプしたところだった。いつからいたよ。

着地。

「――ヒーローはピンチを見計らって現れる！」

「嫌な台詞だ！　別にピンチでもないし」

「まあまあ気張りなりなさんな。オレっちには聞こえるんよ……助けを求める弱者の声が、救いを求める哀れな叫び。そんなときにバシッと解決一家に一台キバリーさ！」

全財産投げ売って感謝しろよ。とめちやくちゃどや顔のキバリー、う、うざい。

「さっそくだがキバリー、助けてくれんか？」

夏の夕空を仰ぎ見ながらトルジイは呟くように言った。

「ニヒルじーさんの頼みとあっちゃ恩も売りたくなりますな」

「ここ以外だけ、強く風が吹くように台風を起こしてほしい」

キバリーは目をしばたかせる。

「たいふう？　そんな無茶な」

「お前さんならできるはずだろ」

「私どもとしましても、善処したいとは思いますがー」

「できるのか？」

「ぶっっちゃけ疲れるし」

ぶっっちゃけた。

逆に言うと、疲れるくらいで、できることなのだ。

「アリマさんどーよこの老人。文明発展と町の経済に寄与するためにワカモンは人足のごとく働くべしそれトーゼンよみたいな流れー？ その日暮らして精一杯のオレっちには遠いハナシでやんす」

「キバリー。ぼくからも頼むよ。できるなら」

首に回される腕をかくぐって有馬は正面に立った。

キバリーはいつもふざけて話を逸らそうとする。良くも悪くもマイペースなのだ。おかげでだいぶ苦労した。

ただ、それが子供っぽい照れ隠しだと気付いたのはいつからだろう。キバリーはふざけていないと落ち着かないのだ。物事の人になることを嫌っているフシがある。

「たくよ……かわいい弟分の頼みとあっちゃ断れないよな」

「できるの！？」

「あたぼーよ！ オレっちを誰だと思つてやがる！ この空は私のたなごころにあり！」

「おお」

拳を振り上げ叫んだ。

「天よ！ 大地よ！ いかりをみせろ！」

キバリーの身体から紋様が溢れ出した。

足から地面に、洪水のように。キバリーを中心にしてどんどん広がっていく。丘を走り、高原を跨ぎ、電子回路の基板にも似た巨大な模様が、町全体へを呑み込んでいった。

それは強烈な光景だった。

テレビ局のときは規模が違った。

異変は目に見える形で起こった。

海が噴火したように、蒸気を噴出させたのだ。

上空で雲が渦を巻いていく。瞬く間にそれは大きなかたまりとなって、内部で閃光を散らし始める。

吹き降ろしの風が辺りを呑み込んでいく。ぞくりとするほど冷たい空気。上空にぼっかりあいた申し訳程度の穴。

「台風の日……？」

成り行きを見守るしかなかった。

低く垂れ込めた雲に日光が遮られ、厚みができていくのが分かる。我慢できずに空が割れ、土砂降りの雨を吐き出してきた。

出鱈目な現象に、有馬はただただ目を奪われる。

「なあ有馬よ。キバリーは何だと思う？」

横殴りの雨。

タバコの火も消え、バケツの水をかぶったようにずぶ濡れになったトールジイは、そこから一步も動かず、壮絶な笑みを浮かべていた。

「宇宙人か？ 魔法使いか？ 科学技術でこんなことが起こせるか？ あえて、あいつを何者かと定義しても、その枠内に収まるものか？」

有馬は何も答えられない。

「あれはモノであってモノでない巨大な何かだ。大昔の人なら神と呼んだらうがな」

会ったその日、冗談みたいに自分は神様だと言っていたけれど、でも。

キバリーは人間だと思う。

最近強くそう感じるようになった。

自由にやりたいことだけやっていれば、そう感じることもなかった。

ただキバリーは人に気を遣うし、照れもするし恐がりも嘘をついたりもする。感情がある。何か目的を持ってそうしている気さえする。

何のために？

少なくとも、地球征服でないことは確かだ。

立駒に嵐が駆ける。

第四話ノ1

隕石危機が去ってから、人類はどうなったのだろうか。

食い扶持が減ったせいで生活が安定したのは、経緯の違いはあれどの国も、町も同じだったりする。

寄り集まって考えた。

国家という枠組みのだいぶ薄らいだ頃は、どこも辺境の長の集まりに過ぎず、主導者不在のまま流れに任せ乱暴に意見が飛び交った。流通の再生か？ 経済発展？ かつての栄華を取り戻すために歴史の針を巻き戻すのか？ 失われた文化、慣習、滅んだ体系を再現するのか？

隕石に負けた文明を？

危機に瀕して進歩したのは、身を守るための技術である。

常態化した災害は防衛意識を底上げしていた。

同じ歴史を繰り返さないために体制を整えておこう。いつ、どこへ降ってくるかも分からなかった災厄をあらかじめ察知できるようにつぎ込まれる資源と人員。世界中から集められた隕石落としてのエキスパート。遊ばせておくにはあまりに惜しい戦禍で発展したテクノロジ―。大きな大きな、途方も無い計画。

軌道上に建造された、超巨大集光装置。

通称「レンズ」。

どうして誰も止めなかったのか。

今でこそ、人類最大の愚行とまで称されるそれは、滅亡の危機に瀕してなお生き抜いた老人たちの、最後の負け惜しみだったのだ。

次の危機が迫るのが一年後か一億年後か、あつという間に見抜いたレンズは、物の見事に仕事を終えた。まさかこんなに早く身の安全が保障されるとは思わず、優秀すぎるレンズの仕事に恐れおの

いた首脳陣は、近く差し迫った自分の墓まで揃いも揃ってその事実を持って行く決意をしたのである。

そして死後裁きにあった。

バレルのは、時間の問題だった。

発覚した事それ自体は大した問題じゃない。問題なのはこのころ、資源が尽き始めた事である。

アホだ。

何が悪いかのと言ったら、もう疑いようがないくらい槍玉に挙げられる巨大な浪費の象徴「レンズ」。責任逃れと起死回生と自己防衛に奔走した次代の天上人がたはここで人類史に遺る最大の言い訳を発明したのである。

『あれは宇宙の発電所です』

曰く、自分たちは前々から資源の枯渇を予見していたこと。

その危機を回避するために、夜でも地球に日の光を、太陽の核融合エネルギーを効率的に供給するための装置を、巨大な反射鏡を、建造する必要があったこと。

のみならず地球型の惑星を見つけ、そこへ移民するために精度の高い観測装置と宇宙基地が必要不可欠であったこと。

諸君はそのための貢献をした。これから道は険しいが手を取り合って生きていこう。そう、あの災厄を一丸となって乗り越えたように――

そう言った彼は暗殺された。

程なくして本当に人の住める惑星が見つかった、という報告があったらしい。当然もちろん身も蓋もの無く誰も信じちゃいなかったけれど。

もう後に引けないお歴々はなけなしの威光を払って嘘に大嘘を塗り固め、鉄を規制し、燃油を規制し、情報と言論を規制し、人類の復興なんかそっこのけで宇宙開発に注力し、熱中し続けて、何十年という単位で宇宙船建造計画を打ち立てて、迷走を続けたまま――
今に至る。

政府は狼少年だ。可愛いそうなやつなのだ。

今まで意地とか見栄を張って嘘ばかりついていたらいざつてと
きに信じてもらえない。

有馬は信じる。遠い宇宙の彼方に人間がそのまま住める惑星はき
つと存在するだろうし、宇宙人は実在するし、集合無意識もダーク
マターも宇宙の意志もいつか正体がはつきりする。するったらする
のである。

だってその方が面白いから。

嘘なのに、面白くもないのに、宇宙基地や移民船が造られたりす
るもんか。

そう思うのだ。

「これ持論。世界はロマンを求めている」

基地に集まった子供たちに有馬は演説をぶっていた。

格納庫にいたのはまず現メンバーの全員。ジジイ勢と俊郎とセリ
ナと有馬とチャイにキバリー。手伝ってもらった基地職員の方々。

近所の子供たち。それに電気工事関係者、自ら後援に名乗りをあげ
た（るように仕向けた）町会役員の方々。重要施設管理人。

いよいよ計画が人目に触れ始めたのである。

この人たちヒマなんだなあ、と身も蓋も無い感想。

「すいませーんおくれましたー」

印刷屋さんの息子と嫁が荷台を引いてやってきた。

「それじゃーこれ伝票なんでーありがざっしたー」

置かれていったダンボールを有馬とチャイがほどこにかかる。雷
電の操縦席にツールジイは梯子をかけ、座席が外され、その奥に積
荷スペースが開いた。レシプロ戦闘機なんてブリキ製風船みたいな
ものなので、胴体はほぼ空っぽだ。人一人くらい余裕で積める。印
刷物五十キロくらい朝飯前である。

せつせと積み込み作業が進められるなか、人だかりから抜け出し

てくる影。

「あ、有馬っ！」

珠樹だ。有馬は作業の手を止めた。

「ごめん！　今まで謝れなくてごめん！」

「え、なんのこと？」

「だからさ、夏休み最初の日に約束すっぱかして」

「……忘れてた」

今さらだ。

「だからさっ、おれも仲間に入れてくれよっ！　こんな面白そうなことやってるなんて知らなかったんだよ！　親友だろ？」

「えー、どうすっかなー」

「おおい心の友よおー！」

十年來の友丁にひつつくな気色悪いと容赦ない蹴りをくれまくる。まったく、もつと早く来れば良かったのに。

人だかりの中、キバリーが強引に誰かを引っ張り出してきた。「や、やめ、ちょ」と嫌がるのは深窓の似非令嬢ヤーク。有馬に見つけられるなり、キバリーを払いのけふんと斜に構えて、

「見世物があるっていうから、わざわざ来てやったわ」

「頼んでないし」

「うるっさいわね。珠樹がどうしてもって言うからついてきたの！　じゃなきゃこんなとこ誰が」

「こいつらねーこいつらねー！　オレっちが誘ったんだぜー！　ときどき基地に来てたから！」

さすがに有馬は少し固まる。

「……友達？」

「そー！」「まあ」「友達じゃないわよ！」

驚いた。キバリーが知らぬ間に、知り合いを作っていたとは。

「それで、見世物ってなんなのよ」

「雷電が直ったからそのお披露目。ちょっと飛ばして、他の町に宣伝しに行く。今年の流星祭りでうちはこんな出し物するよって、ピ

ラで」

「へえ……地味なことするのね」

「はあ？ 地味じゃないって！ ちょっと考えてみるよ空からバラまくんだよ！」

「何か意味あるの？」

「ああーこれだから。有馬はぺしっとおでこを叩いた。ヤーコの「なにこいつ」という視線。

「見上げる空！ そこに飛行機！ なんかバラまいてる祭りの告知？ 楽しそうだ行くしかない！ この夏はこれに決まりだね！」

大げさな身振り手振りでもって表現してやった。もちろん引かれていた。

「……で、誰が操縦するの？ まさかあんたじゃないわよね？」

有馬も自分で操縦できたらどんなにいいかと思う。

「――準備できたぞ有馬。先に乗ってろ」

お声がかかった。

キバリーはにしと笑い、珠樹はまるで金銀財宝を見るときの目つき。

「じゃ、ビラを配る仕事がありますから」

ちやっと二本指を切り軽やかに離れていく。

操縦席に背中合わせの座席と広げられた後ろの風防。

雷電は後方視界がほとんど取れない。ガラスにへばりついてやっ
と尾翼が見えるくらいになる。開放された格納庫のシャッターから
ぼろぼろ人が溢れて、駐機場の端で並んでいた。

弁当は持った。水筒も。お金はいらない。地図はある。ハンカチ
もティッシュも。トイレ済。テントも無いし寝袋も無い。落下傘な
んかももちろん無いから、エンジントラブルがあつたらそれまで。

準備は万端なのだった。

「心残りはないか？」

変なことを聞く。

「あつても遅いがな」

操縦席で彼はニタニタ笑っていることだろう。

はいはい。驚かされましたよ。

「トルジイはれつきとした事業免許持ちの操縦士だったのだ。

「いいから出せ！ はやくはやく！」

がたんごとん座席を揺らした。直前になってどばーんと証明書を突きつけられたときの恨みは忘れない。

「わーったわーった。揺らすなたわけ！」

エンジンはまだ回っている。腹に力を込めないと声も届かない騒音の中、雷電は誘導路から滑走路に出ようとしていた。

後ろ向きに座っているから、風景は前に流れる。

――親父は来てるかな。

何の気なしに探してみる。別に来てもらわなくたっていいけど。

いたって変わらないし、何か言うたびやめる無理だと嫌そうな顔ばかりするし、やったらやったでむすっと黙ってしばらく口を聞かなくなるし、あんなやつ、あんな、

いた。

観客の中で、無然と腕を組んでいた。

いまだにうちの間人間がここにいる事を許せない、そんな不機嫌丸出しの顔だ。対照的に、横では里子がにこやかに微笑んでいる。

悔しいなら来なけりゃいいのに。

「手でも振ってやったらどうだ」

迷う。

すこし考えてから、手は振らず敬礼してやった。

「かつこつけどな、お前は」

「トルジイに言われたくないんだけど」

「格好をつけるのはいい。何せかつこいいからな。世の中みんな格好つけばいいんだ」

「それはそれでヤダなあ」

滑走路に正中線が揃えられた。いよいよ離陸だ。

「行くぞ。ハーネスを確認」

引く。OK。締めすぎで動けないくらい。後方銃手視点だと座席に収まるというより、身体中が感じがらめにされている感じ。ピラ撒き用の特別席なので乗り心地は期待できないとの事。

それでもぐつと親指を立てた。

急激な加速とともに上体が前へ押しやられる。

速度の増加が身体へ伝わってくる。息を止め、胸に力を入れた。

尾翼、離床。地面に平行を保ったまま、雷電はさらなる加速。唸るような轟音。後ろから前へ吹き飛ぶ景色。容赦なく操縦席に入り込んでくる排気煙。

なだらかな斜面を登るように、

雷電は離陸した。

数日後、他のパイロットが到着した。

真っ昼間、基地を轟音に包み、大型テイルト機からよろぼい降りてきたのは、これまた漬物のような爺様ばかりだった。

その中でもいっとう若い初老の男がハキハキした日本語で挨拶しに来る。

「トール！ 久しぶりだな！」

「ヘルマン！ どうだ宇宙基地の様子は？」

「孫に任せたって何も変わらない。人より機材が優秀すぎるんだ。ところでフォッケウルフくれるって言うから飛んで来たけど、本当なのか？」

「エンジン持ってきたらうな」

「博物館に貸してもらったよ。機体は全部接收されてしまったからね」

お互い肩を叩いて笑い合う。トールジイがちゃっちゃんと手招きするので、おずおずと出て行った。

「トールのお孫さんかい？」

「孫の旦那だ。この祭りの発案者でもある」
めんどくさいので否定しない。

「……長旅お疲れさまです」

「若いのに気骨ある坊やじゃないか。私はヘルマン・ラルというものだ。レッドラインの宇宙開発基地で働いているが、今は休暇でね。是非このお祭りに参加させてもらうよ」

親しみやすい笑顔でがっちり握手された。澁刺としたじーさまである。

それより気になって、訊ねた。

「フォツケウルフもってちゃうんですか？」

「ダー。トールの申し出はともありがたいものだった。私財を投げて燃料代をつぎ込む価値のあるものだ。前からとても欲しかったのだよ」

もう待ちきれんとはかりに現物を探し始めるヘルマン。もしかして、それだけで化石のようなクルー達を引き連れて垂直離着陸機をチャーターしてまではるばる赤道から渡ってきたというのだろうか。間違いなくトールジイと同じ人種だった。

同日、午後になると今度はどでかい輸送機がやってきた。アメリカの国籍マークをでかでかと付けた機体だ。

着陸してすぐ武装したマツチヨな軍人さん方が次々と吐き出されていき、尻のカーゴベイが開くと銀色の戦闘機がぞろぞろ三機も降りてくる。どれも世界大戦時代のファイター。ヘルキャット、コルセア、マスタング。

やがて代表者らしきグラサン男がずんずん歩み寄ってきた。

「来てやったぞトールう！」

「相変わらず派手好きだなゲイリー」

「我が国の力を誇示するためのエアショーがあると聞いて、文字通り飛んできたぞ！ 今度こそこてんぱんに叩きのめしてやる！」

その姿はまさに筋肉ダルマ。世が世なら怪物とジャングルで死闘

を繰り広げたり、未来からの追っ手だったりしただろう。見るからに血の気の多いおっさんである。

「おじさんもパイロットなの？」

「なんだこの少年は、さつきから私のことをプレジデントを眺めるような目つきで見つめてきやがる。トールの息子か？」

「有馬だ。孫の旦那だよ」

あんまり知らない人にダンナダンナ触れ回らないでほしい。

目線の高さまでしゃがみ込まれて、グラサンを取った彼は、白い歯をキラッと光らせた。

「そうか。私はゲイリー・マックイーン。空軍の大佐だが、将来は大統領になる男だ。キミがアメリカ国籍を手に入れたときは、ぜひとも選挙権を有効活用してくれたまえ」

傲岸と不遜が服を着て歩いてるような人だなー、とむしろ感心する。

「トール！ ジョージとジャックを復元したらしいが、我が隊の敵ではない！ 貴様には私の輝かしい未来を彩るための、立役者になつてもらおうか！」

「けっこう。ハンガーはこっちだ。ところでメシは食ったか？」

「カツドンが食べたい！ これが楽しみで仕方なかったんだ！」

扱い方がこなれていた。

古い知り合いなのだろうが、トールジイの交流関係の広さを思い知らされた出来事だった。

目に見えて忙しくなってくる。

立駒基地を拠点に、大人たちが段取りするようになってからは、逆に有馬の仕事は少なくなった。手伝いを申し出たりしたけれど、運営委員の配役はすでにかっちり決まっていて、基地の使用できる設備や連絡事項の通達などは元からいる職員に集中してしまい、有馬の出る幕が無かったのだ。

ここまで事態が動き出すと、何もしなくても勝手に進んでしまうのだろう。

やりたかった計画はすべて組み込まれてしまい、あとは全部大人の仕事で、有馬はそのへんにいる子供たちと遊んでいれば良かった。時の流れにぼつかりと穴が空いて、一人だけ取り残されたみたいになる。

でも、悪い気はしない。

基地では、格納庫が有馬の居場所だ。

夜になってもそこには人がいた。

戦闘機が三機増えても、テニスがあと三試合は同時にできそうな広い格納庫。この時間まで整備作業はしていないけれど、戦闘機の近くに集まって何人かが談笑している。アメリカチーム、ドイツチーム、日本チームの三グループ。

若い整備士らしい何人かが、他グループの機体を差して何か話していた。若者がいるのはアメリカチームだけだが、寄り集まっている場所はフォックケウルフの下だ。ヨボヨボのじーさんに、身振り手振りで何かを伝えようとしてる。

見ると、日本チームの方にも三人ほど集まっていた。対する憲ジイは厄介者を払うようにそっけない。

「憲ジイ、なにおこってんの？」

「あッ？ …… なんじゃ有馬かい」

老人特有の梅干みみたいな渋面。

「なんでもないわ……遅いぞ。けえれけえれ」

「母さん待つてるんだ。食堂で働かされてるから、終わるまでヒマでさ」

引き際を見失って立ちんぼする若者たち。その正面に「とお！」と軽快な掛け声でキバリーが落っこちてきた。紫電改の操縦席で遊んでいたようだ。

「はろはろ。どうもすいませんね。偏屈なじいさんで。オレっちが言っときますんで」

ここ数日で著しいコミュニケーション能力の向上を見せるキバリーを、話せる相手と見たのか、若者三人は果敢にも再戦を試みてきた。日本語いっさいナシ。キバリーがうんうんそれでーと思いつきり日本語で対応している。

憲ジイはどっこいしょとビールケースに腰を下ろした。

「日本に来たら日本語話さんかい……これだから毛唐のワカモンは」ワカモンは関係ないだろと言ったらゲンコツが降ってきそう。

「嫌いなのか？」

「そういうんじゃない」

「じゃあなんだよ」

「……どうにもやるせなくてな」

「？」

「逃亡兵だったんだよ、儂は」

淡い視線を中空に投げる。

「相手もこっちもバカみてえにやったのやられたの、ほんと嫌気がさしてなあ、最後の戦で落っこたされたフリして、逃げ帰った。ジローもそうだ」

重々しい語り口。

大戦末期は、泥沼だったという。

度重なる戦線放棄。士気の低下。大量発生した逃亡兵。隕石危機の始まりと重なった資源の奪い合い。本当は戦争なんかしてる場合じゃなかった、世界的愚行。歴史の授業そのまま。

勝ち負けなんて無かった。憲ジイも祖父も、その一人だったのだ。「村も丸ごと無くなってな、やれっこともなくて不貞腐れてとつた。そんなときジローが色んなこと見つけてきた。このへんは前に話したな」

うんうん頷く。

祖父は、飛行機で落ちて死んだらしい。

悔恨いっぱいの表情だった。憲ジイは祖父の死んだ原因が、自分にあると思いついてるのかもしれない。そのとき機体を整備して

いたのは彼だったらしいから。

そんなの、憲ジイが悪いはずない。

冒険者の死はいつだって自己責任だ。

でも、

もしかしたらこの計画を、二つ返事で協力してくれたのは、その責任を取ろうと――

お客さんと話していたキバリーが向き直った。

「こいつらパイロット候補生なんだってさ。憲ジイのこと話したら、戦争のときの話聞かせてくれって。ビールくれるってよ」

有馬は咳き込む。

「キバリー。その話はちよつと」

「ん？ いいじゃん減るもんじゃないし」

ていうか普通に話通じてるし。

人の心配をよそに回されてきたビールを受け取り、憲ジイは迷う事無く一気飲みした。

瓶を空にして、再び開いた目には、闘志の炎が宿っていた。

「ふん。いいだろう。なるほどな。ジローのやつめ粹なもんを残し
おる。死ぬならこいつを晴らしてから死ねつつうことか」

すつくと立ち上がり、

「紫電に乗るのはこの儂だ」

背筋が、伸びていた。

「老兵は死なんぞ。儂も戦おうじゃないか」

「年寄りの冷や水……」

「おーすげー、話してしてー」

キバリーの通訳で、ご自分の武勇譚をさも誇らしげに語っていく。その光景は何とも奇妙で、薪をくべた焚き火のように、不思議と安心感を抱かせた。

この祭りは成功する。

強烈にそう思う。

色んなものが、色んな方向に動き出している。

有馬も、自分ひとりではもう把握できないくらい、このお祭りには、たくさんの人たちが集まっていた。

それぞれの想いを込めて。

それぞれの生き方にそって。

みんなを、ひとつの場所に放り込み、火をかけて、溶かし、混ぜ合わせていく。

想いは混ざり、大きくなる。

私はそれを、たいへん好ましく思う。

第四話ノ2

航空祭といって思い浮かべるものはなんだろう。

飛行機の展示。露店。基地の公開。展示飛行。アクロバット。勇壮な機体を駆って行われる、たくさんのパフォーマンズ。だいたいそんなところだ。

それを行うには本来、長い訓練を必要とする。

まして参加機体はバラバラ。国籍もバラバラ。人種も思惑もバラバラ。誰がどう動くかも分からない、たくさんのバラバラ。

唯ひとつ同じものがあるとすれば、この祭りを楽しもうとしているところだ。

熟達したパイロットというものはすごいもので、訓練にかけられたわずか二日間のうちに、ほとんど一糸乱れぬ動きで足並みを揃えてしまった。どいつもこいつもジジイばかりなのに、若手が遅れを取るほどだ。

夕方になって、別々に出発した六機が、綺麗な編隊を揃えて戻ってくる。その光景は鮮やかに、有馬の目に灼きついていった。

流星祭りは地元の祭りだ。

演目には航空ショー以外のものも組み込まれる。

これを全部合わせると、実にごった煮寄せ鍋状態で、プログラムはとても順繰りにこなしていく事はできなかった。五穀豊穡や子孫繁栄の奉納舞まで入っているからスケジュールは伸びに伸びまくり、夕方を過ぎて夜になって真夜中にまで行われる。祭りのために練習を重ねてきた各団体は十指に余るほどであり、だっ広い基地エプロンをフルに活用して、櫓や舞台やイベントスペースや露店や救護所が設営された。

有馬のチームは、流星祭りの「航空部門」という区分けになる。地上と空、交互に演目が行われる予定。

そしてメイン。チラシにでかでか銘打ってまで喧伝した主演目。

憲ジイが目を血走らせ、グラスンが野望に燃え、ひよる長のヘルマンが目を遠くにやる見世物、『空戦ショー』。

反響はなかなかのものがあつた。役所に問い合わせが殺到し、ただでさえ貧弱だった電話回線がひとまりもなくパンクした。噂は噂を呼び肥大化し、少なすぎる情報量が魚群を大魚にも思わせ、一目見て確かめようと町の民宿には次々予約が舞い込んだとか。

折りしも帰省ラッシュであつて、エアロトレインの本数は増やされている。

そして行楽で成り立っているところが小さくない立駒には、充分な受け入れ態勢があつた。

流星祭りの前日から人の出入り自体はあつたが、当日にもなると蛇のような人の連なりが道路を埋め尽くすまでになった。ウン十年前まで本当に滅亡しかかつてたのか疑うほどの、人、人、人のうごめき。

「これが伝説のビッグウェーブ……！」

この日、自宅から基地に行くまで、有馬は人で酔うという稀な体験をした。

代表挨拶なる退屈極まりないものがあり、ツールジイが引つ張り出されたようだ。

「……えー、流星祭りというものは、あまり大々的にやれば不謹慎であるとお偉様方に言われます。それは、この祭りが鎮魂の宴でもあるからです。にもかかわらず、こうしてかつてない規模で祭りを催せたことに、後援会ならび、参加してくださった各団体方々へ謝辞を述べさせていただきます——」

キバリーとはぐれた。

チャイとも一緒に行く約束をしてたのに、ツールジイが先に連れ

で行ってしまったらしい。右往左往して基地に向かうころには、もう敷地の外にまでその挨拶が聞こえてきてしまった。今日まで準備してきた有馬はもう完全にお客さんの立場で、祭りを自由に楽しんで良い身分なのである。

『伝統的な祭りを一新してしまおうと決め、踏み切ったことに、大それた理由はありません。右を向けと言われたら、左を向きたかった。窮屈な決まりことから解放される楽しみとでも言いましょうか。我々は、広くそうしていくべき時代に差ししかかっていると思います。なぜなら――』

ここでマイクの倒れるような音。ごとごと、こら何する俺の、うつせーくどいんだよ――と揉め事の気配。途中で混じった声に、有馬は青ざめる。ざわめく人ごみがいつそう耳障りなハウリングで静まり返ると、その静寂に滑り込むように、マイクで息を吸う音が聞こえ、

『お前ら――』

――ッ！――！

魂が、抜かれかかった。

キバリーの声だった。

『よく来たあ！ 歓迎するぜえ！ 今日という日にこの祭りに来れたことを一生忘れられなくしてやる！ 飲んで食って見て遊べ！ オレたちはこんなにも楽しめるんだってことを噛みしめやがれー！』
渦のようなうねり。ざわめき。戸惑いの中で蓄積されていく、あと一歩で形になりそうな桁違いの何か。

『そんじゃー流星祭りがいい――』

――ッ！――！

怒号が上がった。

それは紛れもない歓声だった。

雷が降ってきたかと思う。しかし、それは拍手の雨だった。

身がすくんで鼓膜が震えた。空気に色がついて見えた。それは、目に見えるほど明確にその場を支配する何かだった。

——早く、みんなと合流しないと。

有馬は基地ゲートをくぐる。人波をかき分けて、祭りの真っ只中へ飛び込む。

オープニングセレモニーが盛大に始まる。アメリカの戦闘機が低空飛行で基地上空を飛びまわり、上昇しながらスモークを撒いた。互いに別角度から進入してきて、一度に挙動を合わせる高度なパフォーマンス。煙で作った、テントの屋根。

有馬は奥へ奥へと進む。上空ではごく狭い旋回半径でサークルを作った三機がぎゅんぎゅん空戦のように回っていた。そのうち一機が離脱。会場を横切るように寸胴な巨体をさらし、スピーカーからその戦闘機の紹介が入る。

『F6Fヘルキャットです！』

アナウンス。俊郎の声。

この計画を立てたときから、細かな段取りまで指定して、自分がやりたいやりたい自分以外に適役はいないとうるさかった。徹夜で原稿を書き、練習までしていた。BGMは運動会そのまま。俊郎がどれだけこの祭りを楽しみにして、良いものにしようと構想を練っていたかが伝わってくるよう。

「おう！ 有馬くんじゃねえか！」

露店沿いを歩いていたら呼び止められた。

珠樹の親父さんだった。頭にタオルを巻いて屋台でフランクフルトと骨付きカルビと豚串を転がしていた。死ぬくらいの熱気。

「うわー繁盛してます？」

「入れ食いだっつもの！ 昼までやれるか今から心配だよ。それにしても、晴れて良かったなあ。この祭り考えたの有馬くんなんだって？」

一部で噂は広まっっていて、特に協賛してくれた商店街の方々には、すでに周知のものとなっていた。お祭りの日が近付くたびその事を突っつかれて有馬はむずがゆい。

「ほんの軽い気持ちで。あの、珠樹どこいるか知ってます？」

「ヤロー今ごろヤーコちゃんと遊び回ってるよ。格納庫見てきたらどうだい？ 有馬くんなら顔パスだろ」

「じゃあ行ってみます」

「あー待て待て、こいつもってけ」

肉食え肉とばかりに押し付けられる串六本。「功労者にお供えだ」と言っただけに笑った。

人の熱気と、カンカン照りの日差しと、会場になった駐機場の照り返しで、卵が焼けるくらいに暑い。

ふらふらになって裏手に回ると、空気の密度も薄まったようで、少し気が和らいだ。

格納庫には向かわず、管制塔に入った。

キバリーがお邪魔しているはずだから（文字通り）早急に保護しなければならぬ。

騒がしく人の行き交う通路。運び込まれた様々な資材。部屋だけは余っているから今や参加団体の控え室があちこちにあって、足の踏み場にも気を払う有様。観客の来る駐機場と違って内部までは細かな管理が行き届かなかった。完全にスケジュールが急すぎたせい。何もかも思いつきだったのが今さらになって悔やまれた。

——まあいいけどな。

最上階の管制室につくと、俊郎が絶好調で絶賛実況アナウンス中だった。

横にヘッドセットをつけたセリナがアシスタントとして座っている。ストップウォッチを凝視しながら英語で何かを指示していた。入り込めそうになかったので、有馬はなぜか近くにいた八百屋のおっさんに話しかけた。

「八百屋のおっさん、キバリー見なかった？」

「うお！　びつくりしたあ……いつ来てたんだよ、初島さんこの「いま。トールジイもないけど」

「ああ、キバリーって女の子なら、亨さんに首根っこ掴まれて出たよ。格納庫じゃないかな？　すぐ出番のはずだし」

「八百屋のおっさんは何してんの？」

「あはは。情報将校だったんだよ昔。通訳に便利だからって亨さんに引つ張り出されたんだ。あの人の頼みだと断れないからねえ。あと八百屋のおっさんってやめてくれよ」

立駒は軍人くずれが集った町だ。八百屋のおっさんに限らず今も多くの基地関係者が古巣で動き回っているのかも知れない。

「あ！　有馬！　ちよつとちよつと！」

セリナに気付かれた。必死な手招き。

「おはよう。すごい忙しそうだね」

「そうなのよー！　もう誰かに代わって欲しいくらい。今は離れられないけど、あとで一緒にお祭り見て回ろう？　待っててよ」

「あとつて、どれくらい？」

「うー……午前中一杯はここに齧りついてなきゃいけないの。それから。時間空けてて！　お願い！　他の約束入れないで！」

「うんいいよ。じゃハンガーに行ってるから」

そう言っ出て行こうとしたとき、八百屋のおっさんがニヤニヤしていたのが気になった。変な人だ。里子にあの店はやめておけと注意しとこう。

格納庫に到着すると、メットをつけたトールジイが今まさに出撃しようとするところだった。

「トールジイおーい！」

「有馬！　遅いぞ何してた！」

むっとなる。閉め出したのはそっちじゃないか。

「今日の初飛びに、お前の見送りがなかったらえらいことだったぞ」
すぐに有馬は機嫌を良くした。

「もっ出る。出口まで押すから手伝え」

「うん。トールジイ、キバリーは？」

「ああ？ あのバカタレなら逃げたよ！」

トールジイの掛け声ひとつで周りの大人が集まってきた。有馬もまじって主翼後縁につき、合図で一斉に押し出す。外に出て、痛いくらいの日照りに晒されると、トールジイは腰の高さにある雷電の主翼にそのまま跳び乗り、しっしと人を散らした。

「じゃあ行ってくるぞ！ 俺の背中を見ている！」

何はしゃいでんだか――

先に出ていた憲ジイと手信号で合図して、エンジンを回してすぐ誘導路に向かう。滑走路に入って飛び立つまでに、何か得体の知れないものが有馬の中で膨張していた。

ついに実現したのだ。

自分が火をつけて、みんなで盛り立てたお祭りが。

見上げれば空。真っ白な太陽。人と機械の織り成す騒音。身体中の神経が次々と制御を離れて、好き勝手に踊りだしそうな気がする。やっと、この祭りが自分のものになった気がした。

踵を返し、雑踏が渦を巻く駐機場に駆け入っていく。

流星祭りの始まりだった。

全機の紹介が終わり、六期編隊が基地をフライパスしたら、休憩を挟んでいよいよ目玉の空戦ショーが始まる。

歴史の再現、社会勉強の名目だけれど、誤魔化しようもなく、いい年したおっさんたちが趣味に走りまわった競技であり、誰が一番強いかが決めたいがためにありとあらゆる口実を使い奸計を張り巡らして実現までこぎつけた、大変大人げないイベントであった。

競技は変則トーナメント方式。敗者復活制度採用。

三組に分かれ、一組がシード。残り二組で負けたもの同士が戦い、その勝者がシード勝者と対戦。

一度負けたら終わりのシード権所有者が不利になるルール。そし

て罰ゲームあり。

厳正なる抽選の結果、一組目が紫電改とコルセア、二組目がフォッケとマスタング、三組目が雷電とヘルキャットという組み合わせになった。

「実はコレ、出来レースなんだよね」

有馬は得意そうに言った。

土産屋の前で、珠樹とヤーコを見つけて合流していた。厚い天幕の下に山と詰まれたワゴンセールのプラモデル。ヤーコの親父さん秘蔵のコレクションで、隕石危機を乗り越えて、この時代まで生き残った歴戦の不良在庫である。このたび妻と娘の厳命でもって大量放出の儀となった。

珠樹は大げさに驚く。

「えええー！ これだけ盛り上げといてショックなんだけど……」

「違う違う。組み合わせが八百長だったこと。そりゃ安全にやったり派手に演出したいなら試合内容までいじったろうけど、そこはみんな意地あるからさ」

「？ 言ってることわかんない」と横からヤーコ。有馬は鼻を鳴らし我が事のように。

「前の日にこいつとやりたいてみんなで決めてたんだよ。仲間内で潰し合わないようにしたかったんだろうけど、もう白黒はつきりつけたいからテメー俺とやれって感じで」

「へええええ……」

「いい年して……」

「シード権はクジ引きだけどね？」

そうこうしているあいだに一戦目の機体が飛び立っていく。

紫電改とコルセア。操縦主は憲ジイとアメリカ人の若者。大戦後期に鎬を削り合ってきた仲であり、機体性能にさほど差はない。どちらも戦闘力旺盛。機銃もないぶん重量でいえば紫電改が有利に見えるが、憲ジイにまだ空戦のできる体力があるかどうか。

「腰バキっていかなきゃいいけど……」

「いくでしょ」

「ほんとバカばっか」

空を見上げる。二手に分かれた機体がナイフエッジ機動で切り返しを行い、最大速で正対する。がなり立てる実況すらもかき消すほどのエンジン音。

すれ違って、始まった。

有馬はポップコーンを散らした。

こそこそ辺りを見回して、ブリーフィングルームから顔をのぞかせるチャイがいる。

そのドアの影に、キバリーが隠れていた。

「——ひい！ あっ！ あ、あ、あ、これは」

「わかってるって。アリマには内緒だろ？」

にこにこにこに。

チャイは心底震えた。

よりにもよって、この人に見つかってしまうなんて——

「黙ってるから。これ、もらってくんない？」

気を落ち着かせる間もなく、一枚の栞が差し出された。

淡い青紫色の栞。和紙で作ってあるようで表面がざらついている。キバリーの刺青と同じ紋様が、落ちる木の葉のようになって描かれている。

「……きれいな、栞ですね」

染色が鮮やかで、吸い込まれそうだった。

「だろー？ 自信作なんだ」

「自分で作ったんですか？ すごいです」

「やはー！ こういうのケツコー得意なんだよねえ！」

照れている。変だ。浮かび上がってくる疑問を押し込められない。でも、祭りの最中に手作りの贈り物なんて……」

キバリーは何も答えなかった。

代わりに返ってきたのは、やんちゃ坊主とは思えないくらいの柔らかな笑みだった。

交錯してすぐズーム上昇に転じたコルセアを、紫電改は追隨しなかった。それどころか、出力を絞って降下。緩旋回に入っている。

「いまどうなってるの？ どっちが有利？」興奮した調子で珠樹が聞いてくる。

「……あのコルセア、大戦のあと強化されたやつだ。ブレード長かつたし」

「強い？ 強いのか？」

「最高時速700km以上出る。紫電改の方は、調子良くて650kmくらい。馬力も違いすぎ。くそつ。全然フェアじゃないじゃんか。せつかくこつちは万全なのに」

「……負ける？」

「わかんないよ。でも憲ジイが考えなしなんてこと……」

急上昇から反転し、コルセアは降下に移った。そのころ紫電は悠々と低高度を旋回している。

有馬は手を打つ。

「そうかわかった！ 低空に逃げたのは射線を取らせないためだ！」

「……どういうこと？」

「つまりさ、相手は真上から振ってくるわけじゃん。だけど低空にいると地面が低いから、一撃離脱しにくいんだ。あんまり速く降下すると引き起こせなくて地面に突っ込むから。爆撃機なんかそうやって戦闘機から逃げ回ってたらしいよ」

「つまり、逃げてるだけ？」

逃げてるだけじゃ埒が明かない。

コルセアが紫電の旋回面を読んで後ろに回り込んできた。速度差はおよそ100km以上。一時的に同高度になっても、有利なポジションから攻撃し、外したら上昇の、徹底したヒットアンドアウェ

イ。紫電改は二度目、三度目の攻撃を危なげに回避していく。

「ちよつと、卑怯なんじゃないのコレ？」

ヤーコが代弁してくれた。

「機体性能に頼ったやり方だけど、卑怯じゃないよ。相手より遅い馬でレースに出ちゃいけない決まりなんて無いんだから。巴戦になったら分らないけど、不利な条件で戦ってくれるわけないし」

「じゃあどうするのよ」

「憲ジイを信じようよ」

異変は四度目に起こった。

上昇と降下を繰り返すコルセアの下で、紫電改はぐるぐる回っていたのが、一転して旋回をほどくと駐機場に接近してきた。彼我の距離がいつそう離れる。

上昇を中断し、コルセアは紫電改を追いかける。真後ろからじりじりと、必中距離まで詰め寄ろうとしていた。

そして、会場の真上で、紫電改が上昇に転じた。

相手も追従し、二機は大きなループに入る。ものすごい後流がエプロンを襲う。

——これが憲ジイの仕掛けだ。

途中で軌道が絡まり合って、いつの間にか魔法のように前後が入れ替わっていた。

「紫電改で、捻り込みかよ！」

「なになに今のなに！」

宙返りの頂点で減じられる速力差。それを利用した曲芸軌道。ゼ口戦のお家芸だ。気付いたときにはもう遅く、鼻先をかすめるほどにぴたりと後ろに取り付かれている。

試合終了の報が鳴り響き、喝采が上がった。

「おおお！ すげー！ あの爺さんやるう！」

「ま、僕は最初から分かってたけどねえ」

「なんでアンタが誇らしげなのよ」

「迎えに行こうぜ！」

喝采の中を三人で移動しようとしたところ、唐突に有馬は思い出した。

「そうだキバリー探してたんだった！ キバリー知らない？ 途中ではくれたんだよ」

前の二人が顔を見合わせた。

「それなんだけど……」

珠樹が気難しそうに、ポケットから一枚の紙切れを取り出す。
朶だ。

「さつき会った。そしたらこれくれた」

「アタシも」

ヤーコも色違いの朶を見せた。淡い色。空に透き通ったように繊細で、まるで虹の切れ端みたいだった。キバリーと同じ紋様が樹木をかたどったように描かれている。

キバリーが贈り物？

なんで？

「ねえ、あの子って、もしかして」

言い始める前に、その紋様がうごめいた。

第四話ノ3

有馬は小さな橋の下にいた。

周りには竹林。山から下りてきた細い川が、岩肌を流れ海に落っこちていく。

最初の日、珠樹に約束をすっぱかされたとき、有馬が踏みとどまったあの橋の下だ。

近くにキバリーを見つけた神社のある――

混乱した。基地にいたはずなのに、町の端っこと端っこくらいの距離を、一瞬でここまで移動していた。わけが分からない。

「な……なんで……」

間違いなくキバリーの仕業だ。

前に、部屋で秘密基地に迷い込んだときとまったく同じ浮遊感があった。あの桤が扉になっていたのだ。

でも、どうしてこんな場所に？

祭りの最中だったのに――

「もーサイツター!!」

すぐそばに、ヤーコがしゃがみ込んでいた。

「うわあびつくりした! いるなら言えよ!」

「あいつらなんなの腹立つわあ! 田舎くさい! 信じらんない! なんでテレビのひとつもないのよ! バカばっか! みんな死ね!」

小石を川に投げつけて、荒れまくっていた。

「みんな死ねばいいのよ! そしたらパパが……追い出されずに済んだのに。どうしてアタシたちばかり責められるのよ! あいつらのために一生懸命働いてたのに! ……なんで? なんでパパはあんなにお人好しの……?」

顔立ちが、幼い。

目にいっぱい涙をためて、水面を悔しそうに睨んでいた。

「なんだよ、何言つて……」

思い出す。確か、ヤーコは町に馴染めずいじめられていた時期があった。農作業も側溝掃除も、ときには学校までサボって、頼まれる事、決められた事あらゆるものに刃向かって、付いたあだ名がいよいよの『ヤーコ』。

風当たりの強さは彼女自ら招いたものだ。

砂利を擦る音がして、ヤーコは小動物みたいに反応した。柵を跨いで橋の下に誰かが降りてくる。逃げ場はなく一步も動けない。

やがて鉢合わせした人物は、釣竿を持った珠樹だった。

ヤーコと同じで、今よりずっと身長が低くなっている。

なんだよこれ。

二人とも、こっちに気づいてないのか？

お互い、その場に釘付けになった。

最初に声をかけたのは珠樹だ。

「そこ……おれの場所なんだけど」

「アンタの土地じゃないしょ。早い者勝ちよ」

睨み合い。二人の視線が交わるあいだに有馬は立っている。それでも有馬なんかないみたい二人は小競り合いを続けた。

「ここで何してるんだよ？」

「何？ 何もしてなきゃ悪い？ 用が無いなら出て行ってわけ？」

「アタシがどこで何してようがアタシの勝手でしょ！」

「もしかして泣いてた？」

「！ あっち行きなさいよ！」

投石。

その石が、有馬の身体をすり抜けていき——
びびった珠樹は、一目散に逃げ出していく。

「これだからヤなのよ！ デリカシーなし！ ホントサイテー！」
しゃがみ込んでしばらくまたぐちぐち言つて、怒ったり泣いたり塞ぎ込んだりを繰り返していた。

だから、すぐそばで垂れている釣り糸にも気付かなかった。

「——なんているのよ！」

橋の上から珠樹は竿を振っていた。

「どこで何してようと、おれの勝手だろ」

それから意地の張り合いが続く。

気弱な珠樹が、こんな対抗心を表に出すのも珍しい事で、ヤーコの反撃に対し終始無言。釣り場に小石を投げ落されても、ばかあほまぬけと罵られても太公望を気取っている。しまいにはヤーコも黙って、川岸を睨めつけるだけになってしまった。

いつまでも、いつまでも。

風に木のざわめく音と、川の流れる音と、波音しか聞こえない、
凧いだ時間。

「都から、来たのかよ」

「……………そうよ」

「どんなところ？」

「便利なところよ。こーんな何も無いところと違って、買えばなんでも手に入って、頼めば食べ物だってすぐ出てくるわ。子供はね、みんなベンキョウして遊んでればいいの。テレビも見れるし、ゴラクがたくさんあって飽きないんだからっ」

珠樹は苦笑いをした。

「いいなあ……………うちなんか夏は忙しいし、農園手伝わなきゃなんないし、管理表とか憶えたりすんのタイヘンでさ、持ち回りキツいんだよな」

「ご愁傷さま。生まれの違いってヤツね。この世界には一生楽しんで暮らしてける人と、一生苦しまないと暮らしてけない二種類の人間がいるのよ。あんたは後者ってわけ」

「やなやつだなーお前」

くつくと笑い、ヤーコはむっとする。

「なに笑ってんのよ！ アタシが好きでこんなところにいると思ってるの！ おあいにくさますぐ出てくんだから！ パパが会社立て直してバカな連中みんなクビにして新都に戻るんだから！ 長居なんて

ゼツタイしないんだから！」

「都ってそんな楽しいとこなのか？」

その一言で、打たれたようにヤーコは黙った。

「じゃあ、いつか行ってみたな。どんなとこだろ。話には聞くんだけどさー、写真とか見たことないし。ビルじゃなくて積層構造のピラミッドみたいなんだよな？　それが何個かあって、海に沈んでも大丈夫なように頑丈で密閉されてて、リニアトレインとか何本も走ってて、おお、想像しただけでわくわくしてきたぞ！」

今よりずっと幼い顔をした珠樹は、心底明るく、ヤーコの機嫌なんかおかまいなしに語る。

「都に帰るなら、いつか行くから、案内してよ」

「いやよ」

川辺に目を落し、膝小僧に顎をのつけて、流れの中で静止する小魚を追って、

「あんな狭いところ、楽しいはずないじゃない」

珠樹は戸惑ったようだ。

「みんなごまかしてるの。あんなとこ、何年も続くはずない。バカだと思ってお力ネ使わせて、おだてて働かせておけば大丈夫って思ってる。嘘ばかり。わかってるもの。ホントは追い出されたんじゃないくて、パパがみんなを見限ったのよ」

ヤーコはそれきり膝の上に伏せた。

波音も風も川の流れも、彼女の嗚咽を隠してはくれなかった。

「あの……おれ、そんなつもりじゃ」

「——戻ってもアタシの居場所なんかないのよ。お願いだから、ほつとして……」

珠樹はうるたえ、何もできず、やがて釣り道具を仕舞いすくすく引き返していった。

が、

何を思ったのか、ダッシュで戻ってきて、

「あのっ、ここおれの場所だけどっ、半分くらいやってもいいから」

ヤーコは、ガードレールを見上げる。

「また来るけど、時間重なったらごめん！」
走り去っていく。

時間が急速に流れた。めまぐるしく太陽が動き、色を変え昇って沈む。ヤーコは次の日も来たし、その次の日もここへ来た。珠樹も同じ時間に来ていた。

橋の下と上は、川辺の下と上になって、そのうち隣り合うようになった。

ヤーコは、珠樹に釣りを教わるようになって、釣れなくて怒って帰ったり、竿のせいにしたり、自分のパパの方がいいものを持つてるとか自慢したり、思う存分やなやつぶりを発揮して、珠樹をなじりまくっていた。こうまで言われてめげない珠樹は、もしかすると罵られるのが好きな種類の人かもしれない。

「どうして、毎日来るのよ」

「釣れないから……」

「じゃあ釣れたらもう来ないのね」

憎まれ口に、からかうような響きが混じり、ヤーコは少しだけ笑う。

わかりやすいもので珠樹は、顔を赤くしてうつむいたりしている。

何度日が巡ったか、もう数えるのも嫌になってきたころ。

憔悴した様子で、ヤーコはいつもの場所にいた。

珠樹が来ない。夕方になっても。

日が沈んでからも待ち続けていた。

辺りが真っ暗になり、ふくろうが鳴いていた。枝葉の風に揺れる音が、目に見えない何者かの足音に聞こえてくるような時間。そのくらいになって、やっと珠樹は現れた。

「……なんているんだよ」

「そっちこそ、なんで来てるのよ」

無言の時。

珠樹なんか、お構いなしに釣り糸を垂らしていたし、ヤーコも珍しくそれ以上の追及はしなかった。月明かりが差し込んできて、ヤーコがそれに気付いたのはたまたまだ。

「顔……腫れてる」

「……とーちゃんにやられた。ここんとこサボりまくってたから」
「どうして？」

「……ここに来なきゃいけないから」
肩を落とす。ヤーコは疲れきった声。

「アタシのために、やってあげてるって思ってるならもう来ないでお願いだから」

このとき、ヤーコは珠樹を舐めていたのだろう。

次に起こった事に、有馬は思わず目を覆いなくなった。そして手が無いことに気付いて、目をつむることもできず悶死しそうだった。つまり、珠樹から、やりやがったのだ。

「自分で作れよ……居場所なんて。手伝うから」

「やあよ……」

「一回できた。だからできるって」

そのあとヤーコを家まで送って、また濁流のように時間が流れた。
「アタシ、もうここに来ないから」

いつもの川辺。いつもの二人。違っているのはヤーコが、中学の制服を着ていること。

それまでどこぞのお嬢様学校みたいな仕立ての良い制服だっただけに、ギャップが大きい。珠樹は最初何を言われたのか理解できずにぼけっとしていた。

「え……？ なん、なに？」

「だから、もう来ないって言ったの」

「なんで！」

「だって叱られるもの。珠樹もお父様に怒られるでしょ？ 前だって、パパにものすごく心配されたんだから」

「でもそれはさ！」

「だ・か・ら。やることやってからにするの」
いたずらっぽく人差し指を立てた。

「アタシも学校サボったりするの止めるから、珠樹もちゃんと仕事するの。ここでダラダラ過ごすのはもう止め。それで、今度は約束して、ちゃんと会おうの」

それは実に年上ぶった笑みで、珠樹はひとたまりもなくやられてしまったのだろう。

急に時間が巻き戻る。空間が渦に引き込まれていく。身体を口で思い切り引き上げられたみたいな衝撃。そのあと、墨のような暗闇に有馬は呑み込まれていった。

その二人が目の前にいた。

栞を差し出し、怪訝そうにして、有馬を見ていた。

立駒基地の祭り会場。周囲の喧騒はけたたましく、汗と音と淀んだ空気がべったり体に張り付いてくる。

「ねえ、顔色悪いわよ？」

ヤーコが顔を覗き込んできた。

うわつと反射的に仰け反った。

「……なによ」

「なんでも、ないけど、それ……」

「うん、あの子帰っちゃうのかなって思って」

「帰る？ どこに」

「アタシが知るわけないでしょ。何も聞いてないの？」

それより今起こったことだ。

あれは白昼夢というより、まるで過去の記憶そのものだ。珠樹と、ヤーコの。

「ちよつと……聞いていいかな」

「なによ急に」

「二人つて、その、珠樹の方から惚れたの？」

「な……なによ急に！」

珠樹を見ると、特別取り乱すこともなくぼりぼり頬をかいていた。ヤーコがふんとそっぽを向いて強がる。

「そうよ。それが何？ 関係ないでしょ」

「橋の下で逢ってたの？」

「んな……」

「あまつさえ珠樹の方からキスし」

ヤーコは有馬ではなく、珠樹に掴みかかった。

「喋ったのね！ 喋ったんでしょ！ サイツ————」——「テーツ！」

ばっちーん、と往復ビンタならぬ両側からのお多福ビンタ。逃げ

場所の無い衝撃。

「アンタなんか有馬と仲良くしてればいいのよ！」

怒って、行ってしまった。

珠樹は何故か腕を組んだまま、男前の顔をしていた。

「……話したか？」

「しない。いーから追いかけるよ」

顔が戦士の戦化粧みたくなってしまった珠樹は、不可解そうにしながらもヤーコを追いかけていく。

やっぱり、今見たものは、実際にあった出来事なのだ。

だとしたら、どうしてキバリーはあんなものを見せたのだろう——

真面目に考えようとして、ずっと保留してきたことが泡のように浮かび上がって消えた。地球侵略でもSOSでもないキバリーの取りとめのない行動。今まで意識しなかった、ふざけて誤魔化されてきた些細な変化の数々。

キバリーは、何かしようとしている。

「探さなきゃ」

もともとそれが目的だ。

「ごうごうと寄せては返す人の波を再び睨んだ。迷いない一歩。第

一線級隕石迎撃機も真つ青なレーダー性能を持ったつもりで、有馬は人の中を泳いでいった。

第四話ノ4

「こんなところで何をヘタつとる」

格納庫の中は外ほど人が少ない。

展示用の大格納庫と単機収納用の小格納庫で、騒音は天と地ほど違う。有馬はVIP待遇なのをいいことに機材の影でヘバっていた。

「キバリー捜してたら……酔った」

「またか。酔いやすい体質だな」

「雷電に乗ったときは酔わなかったのに」

「ありや俺の腕が良かったからだ阿呆。素人に乗せられてたら振動でえらいことだったぞ。雷電だからな」

有馬は寝ぼけたような目で、半分身を起こした。

「次、トールジイの番だよ」

前の試合でフォツケは負けた。午前の部のラストはシード組のトールジイだ。

「ヘルキャットが相手だ。大戦中は空中退避しても避けてたつて話だな」

「正直なところ、勝ち目どうなの？」

「単機空戦じゃハナシならん」

ぐでんと有馬はたつぷり煮込んだ白菜みたいになる。トールジイは前歯を見せ、笑い、

「ほかのやつが乗ったらな」

「……このかつこつけ」

どうやったら、こんな爺さんみたいになれるのだろう。

「よく聞け。大戦末期は工作精度が落ちてた。内地じゃ燃料もロクなものがない。大本営の命令で斜め機銃なんか付けなきゃならん。そういうハンデを全部とっぱらって軽荷重量で飛ばすんだ。機体をガソリンで磨くまでしたんだぞ。これで、負けに行くやつがいたら

クズだ」

「トールジイって、戦争のときは子供だったんだよね？」

「それがどうかしたのか？」

「なんで、そんなに自信あるの？」

押し殺すような笑い。

「紫電改は二つあった。憲さんの分と二郎さんの分だ。二郎さんが帰ってこなくなるまで俺は、この二人によく遊んでもらった。予備隊で空軍が立ち上がったから正式なパイロットにはなったが、その前からも飛べてたんだよ」

「え……………」

それってつまり、

「トールジイも、軍にいたってこと？」

事業免許は見せられたけれど、よく考えたらこんな不安定な時代に航空機で商売なんか成り立たない。事業免許は戦闘機パイロットならついでみたいに取れる資格だ。

「この雷電はな、俺がごく個人的に手に入れたもんなんだよ。宙ぶらりんになってた時代が長くて、就役して一年も使われなかったのに、いきなりジェットエンジンに転換だ。教導用にやもちつと使い勝手のいいやつ余ってるってんで、エンジン外して廃棄処分されそうだったのを、俺が引き取ったんだ。二郎さんみたくは飛ばせなかったが、初めて自分の乗機ができたみたいでやたら嬉しかったな」

昔を懐かしむように目が細められる。

有馬はまた一人だけ置いていかれたような気分だった。トールジイがどんなふうに生きて、誰に憧れて、何を楽しみにしていたのか知る由も無い。人の悪さは一級品だが、親しみやすいくせに、踏み込めない面もある。

それがわかれば、もっと仲良くなれるのだろうか。

「トールジイは、キバリーからなんか貰ってない？」

一瞬ぎよつと目を剥かれた。

「お前……いや違うか」

「なんだよ」

「俺が言うのもなんだがな、あいつに頼るのはもうやめにしろ」
突き放すように冷たく言われた。

「俊郎のいないあいだに基地の燃料タンクを満タンにした。簡単な素材も作ってもらった。俺が矢面に立つてるからいいが、俺のいないところでこれ以上何かしたら、あれだ、バレて解剖とかさせられるぞ」

ふざけているように聞こえる。トールジイはこんな言い方しかできない。

それはきつと冗談ではなく、至極真面目な忠告なのだろう。

キバリーの力を使えば、要するに、金になるのだ。

言い方を変えれば、代償無しで生産力が無限に跳ね上がるから、悪い大人がやってきて利用される。そんな漠然として現実感のない空想が、いとも容易く現実になってしまふのだ。

今だつてそれに近いことをやっている。

言い訳は用意してあった。今回限りの特別なこと。他人を納得させられるだけの理由も全部トールジイが用意してくれた。

それでも、小さな針の刺さったような不安が、疼くようにずっと残っていた。

いつか欲に目が眩んで、キバリーのことを道具みたいに扱うことがあるかもしれない。

そうなるのが、有馬は怖いのだ。

「時間だ。行ってくる」

メットを取って、トールジイは容赦なく行ってしまう。鷹揚な後姿。

「お前がこの祭りをやりたかったから、色々やれてきたとは思わん。こんなのは暇潰しだ。暇潰しにどれだけ力を使えるかってのが人生の分かれ目だがな」

「何……いつてんの？」

「賭けをしないか？」

振り返りもせず言い放つ。

「俺が優勝したら、キバリーは俺に預ける。俺が自由に使う」
「な……………」

開いた口が塞がらなかった。

「だがもし俺が一度でも負けたら、お前の願い事をなんでもひとつ叶えてやろう」

不敵に、魔人みたいなことを言うのだ。

「ヤツを見つけてこい。見つけて、このことを話せ。あとはそれからだ」

暇潰し。人生のヒマつぶし――

キバリーも、同じことを言っていた。

雷電の活躍は相当なものだった。

因縁の敵であるヘルキャットをいよいよに振り回して、終始ペースを握って、相手の疲れた一瞬の隙に背後へ回り込み、見事決着を付けた。見た目も派手な戦い方で観客ウケはすさまじく、その反動でか午前の部が終わると、弛緩したような空気が会場を漂うようになった。

有馬は至るところでキバリーの行方を捜して回った。みんな空のパフォーマンスに夢中で、誰もそんな子は見えていないと言う。

「あーりまっ！」

有馬は、虚ろな目で振り返る。

「うわっ！ 何その顔！ 具合悪いの！？」

「なんだ、セリ姉か……………」

「なんだとは何よー！ せっかく抜けてきたのに！」

「キバリーかと思ったから」

ふぐみために膨れる。

「約束したでしょ！ 午後は一緒に回ろうって」

「うん、でも、もう相当回ったんだよ……………疲れた」

「なによなによー！ 私なんて昨日からリハーサルとかでヒマなかつたのに！ 付き合ってくれたっていいじゃない！ ばか有馬！ ええい強制連行ついてきなさい！」

「はしやぎすぎ……」

ぐいぐい引つ張られるので、有馬は仕方なく付き合うことにした。昼時真つ盛り。露店が行列を作るほど繁盛している。

「有馬といると財布いらない！」

行く先々で歓待されて、食い物を押し付けられる。たこ焼き。焼きそば。クレープ。豚汁。ジャンバラヤ。ドネルケバブ。カキ氷。セリナは、この祭りに出ている露店を全部制覇してやろうという勢いで、食べ歩きツアーを続けた。

「そうそう。私こないだすごい量の鍋拾ったのね」

「ナベ？ なんでもた」

「わかんない。たくさん捨ててあったから、一応私が引きとったんだけど、いらないから金物屋の富さんとこにあげたのね。でも、昨日話聞いたら倉庫から全部無くなってたんだって」

「ナベ泥棒……盗むならもっとマシなもんなかったのかよ」

「そうそう。変よね」

じーっと見られていた。青海苔でも顔に付いてるのだろうか。

駐機場を端まで歩くと、滑走路脇の野っ原に、アメリカの戦闘機が日干しにされているのが見えた。手に手にペンキのコップを持った子供たちに群がられている。脇に『ちびっ子限定！ 落書き大会』と、のぼりが立っている。

「あれ、私もやりたいなあ」

「セリ姉、でかい」

「お祭りなんだから細かいこと気にしない！ ぶれいこーぶれいこー」

チビっ子たちに混じってセリナは思う存分筆を振るった。横で受付をしていたらしいパイロットの人が涙目でペンキを注いでいた。

「あー遊んだ！ ちょっと休憩しよ」

大の字に寝転がってしまうので、いい加減有馬は呆れる。

「セリ姉、はしたないですよ」

「いいじゃない。有馬も転がろう?」

号砲が打ち上げられる。

どこかの露店がラジカセでチャチな音楽を垂れ流している。

人の流れは絶えることがない。駐機場いっぱいを使って、大人も子供もあっちこっちに回って遊び場を探し歩いている。

セリナの隣に腰を下ろした。

「お祭りねー」

「苦労したよね。ここまでするのに」

「そーそー! みんなで並んで草むしりしたり地面平らにしたりご飯作ったり、私けっこう働きものじゃない? 家政婦とか向いてたりして」

「いいお嫁さんになれるよ」

強い風が吹き抜けていった。

太陽が真上にある。影は墨のように黒々としていた。休むなら、日陰のあるところがいいな、と有馬が思い始めたころ、セリナがぼつりと言った。

「私、無理してるように見える?」

目が合う。見下ろすかたちで。

そこには、紛れもない、不安の色があった。

「知ってる? お爺様がね、初島の家には恩があるから、自分の娘を嫁に出そうとしてたの。それって私のお母さんのことだったんだけど、鉄平さん、急に別の人と結婚しちゃったんだって。お爺様ってああ見えてすごい義理堅いんだから、怒っちゃって」

知らない。

じゃなくて、どうして、急にそんなこと。

「だから、子供がだめなら孫につて、どうしても恩を返したかったみたいなの。私のお爺様と、初島の家のおいだに何があったのは知らないけど、それほど大きなものだったのね。それで、生まれる前

から期待されてたのが、千愛ちゃんと、私なのね」

絶句した。

セリナは、有馬の動揺も気にせず続ける。

「遊んでるように見えて、こういうことにはすごく厳格なの。それに反発したのがお父さんの世代で、鉄平さんなんてすごく反発したんだって。だから二人仲悪いのね。有馬は嫁ぎ先を勝手に決めちゃうなんて、古い考え方だと思う？」

かろうじて、頷けた。大人の決まり事を煩わしく思わない子供なんていない。

「私はね、先に生まれたから、そういう意味で期待されてたの。そういうものなんだって受け入れてたし、私も嬉しかったし。まだ五歳くらいだったのにお嫁さんに憧れてたのよ。すごいでしょ？ 有馬が物心ついたのって、いつごろ？」

「同じくらい、かな」

「じゃあ、やつぱり、憶えてないか」

「ごそごと、尻のあたりを探っていたかと思うと、取り出したのは糞だった。」

あっと思ったときには、もう遅かった。

泣いている子供がいる。

石ころだらけの広い川辺で、一人で、ひどいべそをかいで、何かを一生懸命捜している。

足にたくさん擦り傷があった。

今日できたものばかりじゃない。探しながら何度も転んで、傷を作って、その上からまた傷を作って、痛みに耐えながらずっとここで捜し物をしていたのだろう。枯れてしまいそうなほどの涙が、跡になるまで流れていた。

空が紫色に染まり、影は暗がりへ溶けていく。

子供の目にはもう何も映っていない。

泣き疲れて、歩き疲れて、岩の上にへたり込んでいる。瞳に映る対岸は意識を素通りしているに違いなく、擦り切れてもなお千切れることのない執着が、子供を岩場に縫い止めていた。

「ここでないしてるの？」

後ろに少女が立っていた。

幼いという点では何も変わらない、幼稚園だったら年長組くらいの女の子。

なのに、とても大人びた目で、へたり込んだ子を見下ろしている。「お父さまとお母さまがさがしてたよ。いっしょにかえろう？」

この女の子は、セリナだ。

透き通るみたいに綺麗な髪を、腰までまっすぐ伸ばしていた。今ではちよつと想像つかないくらい女の子らしい女の子のセリナ。

岩場の子供が顔を上げた。

「……いないよ」

わかってる。

こいつが有馬だ。

どうしようもないハナタレだった。

人に言われないと何もできない愚図で、そこくせ一度やり始めると周りが見えなくなるくらい熱中して、いつの間にか一人になって、拳句迷子になるという親泣かせなガキだった。駐在所の世話になったのは一度二度じゃ済まされないし、自分の苗字と電話番号はいち早く覚えさせられた。

今だつてきつと、自分だけおいてけぼりにされたとも思っているのだろう。

セリナは夕暮れ時に朝顔が花弁を閉じるように、悲しげに目を細めた。

「お姉ちゃんは、もういないの」

「どうして？」

「知らないところに行ったから」

「かえってくる？」

「わからないの。だから、みんなでさがしてるの」

幼い有馬の顔は、くしゃくしゃに歪んでいく。

「アリマは、もう泣いちゃだめだよ」

「でも、おねえちゃんいないよ」

「うん。だから見つかるまで、わたしがアリマのお姉ちゃんになるから」

頭を撫でて、あやして、いつまでも泣き止まない有馬と手をつないで帰った。

半年後の雪の降る日に、葬式が執り行われた。

それから、有馬はたびたび一人でいなくなる事が増えていった。保育所でも、小学校でも、課外授業があるたび、ふとした隙にいなくなる。何度注意されて叱られて拳骨を食らって正座させられても、夢遊病者のようなクセは無くなる事がなかったらしい。

理由を訊くと、決まって「わからない」と答える。

有馬は、姉の存在を忘れていた。

周りの大人は事情を知っていたし、無理に思い出させることは、有馬にとっても良くないだろうと皆で示し合わせていた。対策としては、引率者が特に目を光らせておく事どまりになる。

しかし、有馬は注意をすり抜け、霞のように消えてしまうことが続く。

頭を悩ます大人たちと違って、セリナは違う考えを持っていた。

「有馬はどうしてすぐいなくなるの？」

「わからない……」

「いいえ、わからないくないわ。有馬は、宝物を探しているの」

「宝もの？」

「そう、それを見つけれたらみんなに自慢できて、たくさん誉めてもらえるもの。有馬はそれが欲しくて探してるのに、全然見つからないから、どうして自分が探してるのかも忘れちゃうのよ。わかる？」

「なんとなく」

「どうして見つからないか、わかる？」

「……ばかだから？」

「違う！ 有馬が弱いからよ。宝物を見つけるためには、いくつもの困難を乗り越えていかなきゃいけないの。有馬はその方法を知らないのよ」

「どうすればいい？」

幸い、セリナは本屋の娘だった。

本に書いてあることをメモして、不慣れな釣り具を扱ったり、アオイソメの頭をちぎって釣り針に通すという偉業も成し遂げた。冒険小説をたくさん読んで、読みやすいものを有馬に聞かせて、ときには買い与えたりした。

スカートをやめ、ジーンズを穿き、梳き下ろした長い髪もばっさり切ってしまった。

そしてある日、まだ有馬に知らせてもいなかった、取り決めの破棄を申し出たのだ。

「何故だ？」

まるで解せんといった感じにトールジイはむつつり腕を組む。

「お前が有馬に良くしているのは、有馬のことを慕っていたからだろう？」

「そうです。これからもそれは変わりません」

「だったら何故だ？」

「先を歩いて引つ張るのと、横に並んで歩くのは違います。有馬にとって私は姉です。あの子がこの先道を踏み外さないように見守るなら、私は姉であり続けたいと思います」

彼女の固い決意に、トールジイは折れた。

「道か。……それを決めるのは有馬だろうに」

存在しない何者かをいつまでも追い続ける有馬を、もっとも心配していたのはセリナだった。

そうやってセリナは教え続けた。怪我をしない歩き方を、凍えない夜の過ごし方を、食べられる野草の在り処を、素晴らしい冒険の

日々を。

根気よく、刷り込むように。

はじめからそうであったように。

第四話ノ5

高い日差し。黒々とした影。土と草の匂い。

「キバリーさんに会ったとき、予感みたいなのがあったんだ」

懐かしむ目で、セリナは朧を眺める。

「私はもう有馬のお姉さんじゃなくて、周りにいる大人の一人になっちゃったんじゃないかって。それが、寂しかったの。最初は姉代わりだったけど、今は違うから」

半身を起こす。言葉も無い有馬の視線をたぐり寄せて離さない。

「私はどうしたらいいかな。有馬のお姉さんじゃなくなったら」

憂いを帯びた瞳に、熱を含んだ頬に、身動きを封じられた有馬は、まばたきひとつできない。吐息のかかる距離にセリナの顔があつて、仔犬が鼻でじゃれつくように額が触れ合っていた。肩も胸も密着していて、その距離は刻々と、一方的に縮まっていく。

じれったいくらいの間は、セリナが与えてくれた猶予だったのかもしれない。

「なんで今さらなんだよ……」

情けないほど、震えた声。

「最初から代わりなんかじゃなくて、普通にしていれば良かったんだよ。姉代わりなんかにならなかつたら、普通に好きでいられたのに」
取り返しなんかつかない。

胸がつぶれそうになる。セリナを引き剥がして、有馬は立ち上がった。

「ぼくのだ……これは、ぼくだけのものだ！ セリ姉にもらったものじゃない！」

悔しくて、鼻がつんとなつて、どうしようもなく涙がにじんでく
るのが、自分で分かった。

もうセリナとは一緒にいられなかった。

離れようとして踵を返すと、後ろから思い切り捕まえられる。

「待つて！　お願いだから聞いて！」

「はなせよ！」

「はじめは私もこうした方がいいと思ったからやったの！　それが有馬のためだと思ったの！　でも途中から、私は本当に、有馬に頼られるのが楽しかったから……っ！」

痛いくらいに抱きすくめられて動けない。震えた息遣いと、湿り気を帯びていく声に、直接伝わってくる胸の鼓動に、有馬は熱をとられていくようで、力が抜ける。

「思い出したのね。昔のこと」
頷いた。

腕が緩んだ。

「じゃあ、行つて確かめないとね」

突き出されて、踏み出す一步に、抗うことはできなかった。積み重ねた三年の意地が有馬の意志と遊離して、足を進めさせていく。

走りながら振り返った。

セリナの、救われたような表情。

どこにもいない。

あいつがいない。

あちこち聞き回つて、駆けずり回つても見つからない。

それでも今度は感触があった。射的屋が骨董もののゲーム機を奪われたとか、チョコソースを容器ごとたいらげられたとか、丸ごと一匹タコを食われたとか、他人に迷惑をかけまくっている目撃情報には事欠かない。あいつの足跡。

キバリーの探索は日が傾くまで続いた。流星祭りの航空部門は、もう佳境に入っている。

捜しているあいだ、さらに三戦催しがあつて、コルセアをフォツケウルフが墮とし、紫電改はマスタングにやられた。雷電とフォツケウルフの戦いは接戦を極め、互いに翼の端から尾を引くほど熾烈

な絡み合いの末、雷電に旗が上がった。

残すところ、あと一戦となる。

会場は異常なほどの盛り上がりを見せている。厚く垂れ込める雲のような騒音が、有馬の声をかき消してしまふ。キバリーの名を何度叫んでも、綿を噛んでいるみたいに自分の耳にさえ届かない。

確かめなきやいけないのに、目の前にいるはずなのに。掴んだと思つて手を広げたら、そこから消えているような感触。その繰り返し。

言い様のない喪失感。徒労感。

有馬は、思い出そうとしていた。

空白を埋める代替物としての旅。その底にあつた原初の感情。

——違う。空白なんかじゃない！

最初からそれはあつた。セリナに教えられたから、信じ込まされたからではなくて、旅立ちを夢見る事は、言葉さえ無いときからあつた。

何が自分をそうさせたのか。どうしてそう思うようになったのか。自分の中に潜っていく。

冒険を望む自分。新しいものを探す自分。すべてのものが鮮明で神秘にあふれ、まだ見ぬものを至高と信じ、心から探し求めている。そして、ふと後ろを振り返る。自分の来た道に目を向けてみる。するとそこには何も無い。洞窟のような暗闇があつた。自分の起点がわからない。わからない。わからない。わからない。

不安があつた。

不安は手を伸ばしてきた。

捕まえられて、振り回されて、引き離そうとして、それでも、執念深くこびりついてくるそれを、有馬はただ一心に振り切ろうとした。誰も見てないところに探し物はある。自分を救う光はある。そう信じて、追われながら、探してきた。

どこにでもあつて、同時にどこにもない。だから自分が進む先にこそあると信じて。

わずかな光も見逃さず、耳を澄まして、
やっと、見つけた。

キバリーは、親父といた。

親父は祭りに来るなんて一言も言っただけ。

親父だって仕事の鬼じゃない。風車管理なんてのはヒマなときは死ぬほどヒマだし、自分も息子も浅からず関わっているお祭りに、誰が出ちゃいけないなんて言えるのだろ。

有馬が来ないと勝手に思い込んでただけだ。

朝に見た親父の背中では、意地でも行っただけやるもんかと語っているようだったから。

ここに来れば、息子や道楽ジジイどものやっている事を、認める事になってしまう。親父ならそう考えているはずだったから。

それは、見てはいけないものだった。

親父が泣いて、誰かにすがり付いている姿なんて——見てはいけなかったのだ。

「おーいもしもーし？」

暗闇から急に引き戻されたみたいに、意識が鮮明になった。

鍋底で煮詰めたみたいなきど、たくさんの人が攪拌していた。

日が落ちてきて涼しくなっても、冷気を外へ追いやるように人の密度は変わらない。

現実とそうでないものの境目が曖昧になる。今見ていたのは本当に自分の目で見ていたものか。親父が祭りに来るなんて事があるか有馬は判らなかった。

過去の記憶を見せられた。

セリナの決意。

珠樹とヤーコの出会い。

こんなことができるのは、キバリーしかいないと思った。ごく自然に、そう思われた。

だったら、少なくともキバリーは、それを知っていた事になるじゃないか――

「おいアリマ、ヘイ無視すんなよー、コラ」

目の前に、べちべち無遠慮に人の頬を叩くキバリーがいた。目の焦点がそっちに合う。

なんでこいつはいつも、こんなときにも、ふざけていられるのだ。

「――キバリー見つけた！」

「おお。ずっと捜してた？」

頭を振る。

すべてお見通しなのか、キバリーはヘラヘラ笑っているだけだった。

喉がひりひり焼き付くようでまともに息継ぎさえできなかった。人間の姿をしているはずのキバリーが、何か別の生き物に見えた。恐ろしい想像が有馬の胸を這い回っている。

震える口で、訊ねる。

「これは、現実、なの？」

どこからどこまでがそうでないのか、有馬にはもう判らないのだ。

「現実だよ。ぜんぶ」

ハッキリ答えた。

「全部、アリマの周りで起こったこと。アリマがそうしたいと願ったから叶えられたこと。おめでとう。これでやっと地球侵略の一步を踏み出せるぜ」

くるくる楽しそうに回って、また向き直り、

「人がたくさん集まった。みんな喜んで。この町も喜んで。だから、もう行けるよ」

差し出される手。柔らかな微笑み。

「町の外に、出られるよ」

どうして忘れていたのか。

キバリーと旅に出たくて、そのために「町を盛り上げる」ことが必要で、これだと思って仲間を集めて、次々と課題をこなしていつて、そして——ここまで来たんじゃないか。

やっと、町を出られるのだ。

そのためにここまで来たのだ。

「さあ、行こう。準備はできてる」

手を引かれて歩み出す。浮遊するような足取りで、有馬は基地を出る。落日の色に染まった田畑を、憑かれたように駆けていた。

家の倉庫には、旅の装備を積載したカブがひっそり佇んでいた。

新たにサイドキャリアが取り付けられていて、前部キャリアのポリタンクには飲料水がいっぱい入っていた。後部は毛布を巻いてタンデムシートになっている。ガソリンは満タン。ハンドルの左側に腕時計が巻かれている。頑丈そうなトラベルケースに着替えやキャンプ用品や瓶詰め携帯食糧まで用意されている。ナイフも釣竿も地図も。至れり尽くせり。

キバリーが、すべて準備してくれたようだ。

「これだけあれば困らねーよな。小遣いも、祭りで全然使わなかったろ？ いざってときにゃオレっちに頼ってもいいけどさ、こういうのって自分でやるのが醍醐味だかな」

二人分の装備。

宝物みたいにいつも持ち歩いてたバイクのキーの感触が、ポケットの中でちゃり、と動く。

心が停止している。

なのに身体は動く。シートに跨る。キーを差し込む。ペダルを蹴って吸気する。快音が響き渡った。

「おっしゃー！ 行くぜえ！」

キバリーが後ろに跳び乗ってきた。
行けない理由が見当たらなかった。

遠ざかっていく家を、後ろで騒ぎ立てる声を、他人事のように眺める自分がある。

商店街は、流星祭りに客も店主も持つていかれて、閑散としていた。誰も通らない道にある不気味なくらいの静けさを、カブで二つに引き裂いていく。商店街を抜け、新興住宅地を抜け、緩やかなカーブを描いて山の手へ入っていく高架橋を左にやって、田園地帯に抜け出した。誰かを呼んでも出てこないガソリン屋を通り過ぎると、河口近くの野太い川を一挙に渡す、あの鉄橋が見えてくる。

入口付近で、有馬は止めた。

自分の手足が、再生されたフィルムを見ているみたいに、離れたところにある。

「――あ、」

どうして、ここにいいのか分からない。まるで現実感が無い。朝、目が覚めたら断崖絶壁に立たされていたように生きた心地がしなかった。

ここを越えれば、違う世界が待っている。

キバリーは宣誓するように言った。

「さあ立ちはだかる障害は、これまで幾多の旅人を飲み込んできた、難攻不落の川だ！」

胸が締め付けられる。

「ここを越えれば、温かいスープもパンも寝床も雨露を凌ぐ場所も、自分で見つけなくちゃいけない！ 君にその覚悟はあるのか！ 苦難を乗り越える気迫があるのか！」

ありません、と少年イマは答えた。

こんな橋ひとつは、苦難のうちにも入らないから、と。

イマは旅立ちの日に、何を考えていたのだろう。

希望に溢れた未来の航路か？ 残してく家族や友達のこととは考えなかったのか？

サスペンションが軋んだ気がする。そこにあるのは二人分の重量なのに、衝動のまま飛び出すにはとても重いものが押し掛かっている気がしたのだ。

今と、前は、もう決定的に違うのだ。

「ほら、早くしないと、出れなくなるぜ」

急かされて、手が震えた。スロットルを開いて、前進。何て事ないはずだ。

有馬はこの道三年のベテランだ。

ベテランであるからには、旅の孤独さも知っていた。

「なんでだよ……」

キバリーの目的。握りこぶしで道楽に身を捧げるといったあれは、嘘だったのか？

「どうして、あんなもの見せたんだよ……キバリーがやったんだろ。どうしてだよ！ あれが、あんなのが、なかったら！」

「一人で旅に出られたのか？」

しゃっくりみたいに言葉が詰まった。

それは、言い訳だから。

本気で、忘れていたのだから。

「なんで今なんだよ……」

「今じゃなかったらいつが良かった？ 明日？ 明後日？ 一カ月後？ 一年後か？ 行けるなら早いほうがいいじゃん。夏休み、あと少ししか無いけど？」

「違う！ そういうことじゃない！」

夕風の空を打ち壊すように二機の戦闘機が飛んでいた。低空で絡み合ったかと思うと急上昇して、容赦無く恐ろしい速度で、互いの喉笛に咬み付こうと回り込み、空を切る。

これは、自分で作ってきた事だ。

自分がやりたかった事だ。

けれど、いつも隣にはキバリーがいた。

越えられそうにない壁に行き当たったとき、ひょいと、それをどけてくれたのはキバリーだった。部品を作ってくれたのも、ガソリンを増やしてくれたのも、航空祭をやってみたいと思ったときも、戦闘機を見つけたときも。テレビ局でも。

自分だけ、ふざけて遊んでいるような立ち位置で、いつもヘラヘラしてたのは、その発見を、能天気な誰かのものにさせたかったからではないか？

「アリマさー、まーたムズかしく考えてんじゃない？」

肩に置かれた手にキバリーは顎をのつけた。

「ゴチャゴチャ考えてないで正直に言ってみな。リラックスだよリラックス。人生の大抵のことはシンプルにカタが付くんだけ？」

それは、悪魔の囁きにも等しい甘い香りで、有馬の耳に流れ込んできた。

行つて確かめてこいと言われた。有馬は自分の憧れていたものが、何かを誤魔化すためのものだなんて思いたくなかった。冒険の旅は、今でも、瑞々しく輝いて、心の泉に眠っている。

でも、今日、このときだけは――

「……あっちの方が、おもしろそうじゃなか」

空っぽの顔で、震えて、夕空の異様を指差す。

「なんで、今じゃなきゃいけないんだよ。今は、あっちだろ？ あつちで楽しまなきゃ、バカだろ？ せつかく、みんなで、盛り上げたのに……」

口に出してしまつたら、決壊したみたいに涙が溢れた。

もつと前ならきつと、夏休みの最初の日、家を出たばかりの自分が傍にいれば、蔑むように見下されたかもしれない。

「アリマの旅は、楽しいことを探す旅だろ？」

頷く。

「だつたら何も変わんねーよ。楽しいこと探してきたじゃん」
それだけは真実だ。

「自分で言ってたじゃん。この世界には知らないものがまだまだたくさんあるって。これから色んな楽しいものを見つけるのがアリの冒険なんだろう？」

頷く。鼻水まで出てくる。

キバリーは、ぽんと、人の頭を撫でた。

「だったら気張るなよ。気楽に行こうや」

べしよべしよになった顔で、有馬は頷いた。

それが敗北宣言だった。

第四話ノ6

雷電、マスタングともに巴戦に向く機体じゃない。旋回速度維持しながら敵機の後ろに付くには、途方も無いGを受け止めなければならぬ。

小細工は尽きた。

とんでもない泥仕合だった。

すれ違った瞬間互いにオーバーブーストを入れて、エンジンが焼け付くくらい全力でブン回してきたのだ。老境の身に優しくない我慢比べになる事は、最初から目に見えていた。操縦桿を握る手が石になったみたい固い。みしみし背中が音を立て、今にも砕けそうになる。

もう何度目になるか分からない水平旋回のすえ、意識朦朧としたまま照準器の片隅に相手を捕えている事を、トルジイはやっと気付いた。

——ゲイリーのやつ、限界か。

いつもより五倍は重い指をトリガーにかける。ギリギリに追い詰められながらも、相手は旋回を解こうとしない。あと三秒もすればその背中には照準器の十字に入る。トリガーを引き絞るだけで、ガンカメラの捕えた映像が管制塔に送信される。情け容赦なく撃墜判定が下る。

これに勝つたら、あいつは自由だ。

「……何を心配してるんだかな」

ふっ、と力を抜いた。

基地に戻ってきたとき、もう試合は終わっていた。

露店を結ぶ提灯に明かりが灯されている。空戦目当てで来た客が、次々と引き返していく。流れに逆らい、キバリーは会場の中心まで

有馬を連れて行く。

「やっぱ祭りの本番は夜からだよな！」

「そう、なの？」

「あたぼーよ！ お祭りつたら夕方から夜がイチバン楽しーんだぜ！」

流れ映る雑多な光景。水ヨーヨーを割ってしまつて泣いている子供がいた。風船玉をうまく膨らませず忌々しそうにする少年がいる。屋台に一升瓶を置いて型抜きに明け暮れる赤ら顔のおっさんがいる。お面を被った兄ちゃん方が肩をぶつけたぶつけないで睨み合いの喧嘩をしている。

「やっぱこのチープ感がいいよなー。オモチャとか一日で飽きるベキ」

「わかつてて買うのかよ……」

「おーし次あれやろうぜい！」

くじ引きをして、金魚すくいをやった。キバリーは型抜きの天才だった。たくさんさんの裏技を駆使してまんまと長大ガムをせしめると今世紀最大の風船を膨らませるんだと言つて拳一個分くらいあるガムを口の中に放り込んだ。

有馬が失敗した型をぱりぱり食べている横で、キバリーはそのまま空に飛んでいけそうなくらいの風船を膨らませ、拍手喝采を浴びていた。

「うつへー……やんじゃなかった。髪べったべたっす」

「割れるときのこと考えようよ」

露店を回つて歩いていると、珠樹とヤーコに出くわした。

「見つかったのか。良かったな」

「そっちこそ」

ヤーコが珠樹の後ろに隠れる。チャイと同じでキバリーを警戒しているのだらう。珠樹の方が背が小さいからことさら弱々しく見えた。

珠樹はくすりと笑つて、

「おれたちそろそろ帰るから。お前らまだいる？」

「終わりまでいるかも」

キバリーが、ぶーすか抗議した。

「んだよ帰んのかよー。あれか？ このあと二人でムフフか？ げひひ」

「変な想像しないでよ！ そういうアンタたちは……どうなのよ。二人で回ってたんでしょ？」

キバリーと有馬は、顔を見合わせ、

「「ないない」」

「アンタたち……顔そつくり。双子みたい」

二人と別れたあと、「おもしろいもんある」と真ん中の櫓まで連れて行かれた。

パンフレットを引つ張り出す。予定では『立駒奉納舞』とある。

町の人口増加に伴い近年になって歴史資料から再現された、あちこち起源の混じっている由緒正しくない舞である。確か、元は霹靂神を奉る舞、つまり雨乞いの舞が転じて豊穰祈願になったとか。広い場所なら神社でも海岸でもどこでもいい適当さ。

「これのどこが面白いんだよ」

「あれ？ おもしろくない？」

神事というものがそもそも有馬は苦手だ。退屈だし、益体もない因習だと思う。

「オレっちは好きだけだな。なんか涙ぐましいじゃん。民草の信仰とかってさ」

「あんたは王様か」

「あたしゃー神様だよ」

にひつと歯を見せて笑う。

奉納舞が始まった。櫓を中心に円を作った舞い手が、太鼓と笛の音に合わせ笠を回し、天に雲がかかる様と雨、雷鳴を舞で表現していく。

「あれ……チャイじゃない？」

「チャイचीーいるな」

化粧をして、紅を塗ったチャイが舞い手に混じっていた。

「こっそり練習してたんだよな。町会にもちよくちよく顔出してた」

「なんで……来たばっかなのに」

「さあてねえ。亨のヤローに言われたか、誰かさんに見せてびつくりさせたかったのカナ」

ざっとらしい……。

舞のさなかに、チャイもこちらを見つけたようで、嫣然と微笑まれ有馬はどきとした。

何もかも知ってるみたいな顔で、キバリーはにまにましている。

舞が終わってから、キバリーは有馬を連れ立って歩いた。

演目はもうほとんど消化されている。人の数は点々として、夜の空気が下りてくる。露店は身内の宴会場みたいになっていて、格納庫に寄ってみるとみんな地べたで車座になって酒瓶片手にバカ騒ぎしていた。

「いやー負けた負けた！」

憲ジイも、トールジイも、なぜか機嫌が良かった。

「おいトール！ 本当にあのとき手加減しなかったんだな！」

「しとらんしとらん。ありや間違はなく真剣勝負だった」

「ふん、なら取り決めどおりジャックはもうぞ。本当にいいんだな」

「おうもってけ！ どのみちもう使えんからな」

「本当にいいんだな！ もらっていくからな！」

「何をイラついてるんだお前は」

トールジイは、負けたら雷電をやるという裏取引をしてアメリカチームを招いたらしい。こんな道楽にはるばる海の向こうから来てくれたゲイリーとかいう人も、よほどの酔狂者だ。

そのあと、花火が始まるまでのあいだ、なんとなくキバリーと滑

走路を歩いた。

「まだかなーまだかなー、花火。これがねーと祭りじゃねーよな？」
歩きながら有馬は思う。

けっきょく、キバリーの目的はなんだったのだろう。ずっとわだかまっていた疑問だった。

どうして過去のことを知っているのか。この町との契約とやらを果たしたら、どうするのか。

記憶にないとか、知らないとか、そもそも無いとか——嘘なのだから。

真っ先に訊くべきだったのだ。

「キバリーは何者なの？」

しばらく何も言ってこなかった。

「マリマ、町ってどうやったら町って呼ばれると思う？」

「は？　なんだよ……いきなり……人の数だろ。小さいと村だけど、大きければ道がいっぱいできるから、町って漢字なんだ」

「そう。人が集まれば集まるほど、想いの形が複雑になって、そいつを管理するのが難しくなる。町ってのは色んな人間を許容するために作られたシステムなんだよ」

キバリーのくせに難しいこと言う。

「つまり、町は人の想いが形になって出来てることだな」

人差し指を振り回して、得意げに語るのだった。

「すると町には意思ができる。ヒジョーに複雑だから、平たくすると、おおざつまになるけど、それが『町を盛り上げる』コトになるわけ」

「……経済発展とか、国の繁栄って意味？」

「まあ言い方は色々あるけどね。色々ごちゃごちゃしてるのが、町なんだ」

理解はできた。

受け入れることも。

「じゃあ、やっぱりキバリーは、人から生まれた何かなの？」

宇宙人じゃない。

地底人でもない。

最初から人っぽかったのは、そのせいなのか。

静かに、下りてくるものがある。それは一抹の淋しさなのだろうか。

「最初から、そのために近付いたのかよ」

「そう。それ以外にやないね」

「アルバムを隠したのは？」

「写真のすみっこの方に、ぬいぐるみが映ってたんだよ。前の身体。バレると思ったから、たべた」

「なんで僕なんだよ。町から出たと思ってたのに。もつと別のやついたろ」

「アリマじゃなきゃダメだった。アリマと一緒にいたかったんだ」
「なんで！」

滑走路の感触が変わる。

草と、土と、水の匂い。

気がつけばそこは、いつかの川原。

川辺ではキバリーと、小さな女の子が遊んでいた。

「おーっし今は十回こえた！ でもまだ世界新は遠いぜ」

「すごいとんだ！　すごいとんだ！」

「コツがあんだよね。こう、川の流れがゆるいところをね」
水切りをやっていた。

小さな女の子の方を、有馬は見たことがあった。

「セリちーもやってみ？　向こう岸まで跳ぶと気持ちいいぜ？」

「えーできないよ。みてるのがいい」

「これだから女の子ってやつは……」

「ひばりお姉ちゃん、男の子だっけ？」

石の上に寝っ転がって、「ひばり」はふてくされた顔をした。

「アリマがもつとでかけりやなー、一緒に遊べんだけどなー。虫取りしたり、秘密基地見せたり、川で泳いだり釣りしたり、街のほう

見に行ったりさ」

「いつもそればっかいつてる」

「セリナというのがつまんねーわけじゃないのさ。あたしの元気を余すところなく受け継いでくれるなんつーの？ 弟分みたいな欲しくてよー」

セリナは頬をふくらませ、川に石を投げ始めた。

ひばりは、女だてらに悪ガキみたいなやつで、近所の子供に、主に男の子に好かれていた。ちびっ子連中を引き連れてよく野遊びを教えていた。そのくせ女の子らしい趣味も持っていて、部屋はぬいぐるみで一杯で、機械みたいな人形を自分で縫ったりもしていた。よく本を読み、物知りで、将来は学者になるんだと言って胸を張っていた。

親が教えていない事をたくさん知っていた。

大人たちは、なぜかその事を、気味悪がっていた。

場面が変わる。もっと後のこと。幼い有馬が登場する。

診療所で寝かされている子供が有馬だ。

待合室では、親父が感情をむき出しにして、ひばりのことを叱責している。何を考えている。泳がせるなんて。まだ小さいんだぞ。お前に任せたのが間違いだった――

今後弟を連れ回すこと一切を禁じられ、彼女はとても悲しんだ。自分が悪いと分かっていたから、よけいやるせなかったのだらう。明くる日。

川の中、水の上に立っている彼女がいる。

流れの穏やかな場所で、木の枝が傘を差し、ゆらゆら揺れる水面を見て。

水に映る、自分が言う。

あたなは特別な飛び方ができる――

だから特別な飛び方をしよう――

「そんなことができるの？」

それが言うことは、いつも突拍子もないことばかりで、ひばりにはよく理解できなかった。

親や他の大人に聞いてみると決まって「変な子だ」と叱られる。何が正しくて、何が悪いかは、誰も教えてくれなかった。

そうして、ひばりは姿を消した。

「——と、いうワケなのさ」

霧が晴れたように、有馬は滑走路に戻っていた。

打ち下ろされる光を浴びて、妖しげにも泰然と、キバリーはそこで微笑んでいる。

花火が始まっていた。

「——お姉ちゃん、なの？」

「そうとも言えるし、そうでないとも言える。この姿は私の一面に過ぎないから。ただ、この夏にアリマと一緒にいたかったのは、真正銘ひばりの願いだよ」

「なんで？ 何があつたの？」

「町の願いを叶えるために、ひばりは願いそのものになったんだよ。真相を聞かされても有馬は納得できない。願いが叶ったらどうなるんだ。」

「アリマは、ひばりの願いを叶えてくれた。たくさん遊んだ。だからもう満足かな」

足元に風が吹く。

キバリーとのあいだに、深い谷が横たわっているようだ。

「な、なんで？ どうするの？」

予感はやっぱり現実になった。

「帰る」

ちよつと買い物行ってくる、と言つみたいにな、何事でもないように。

「どこに！」

「消える、つったほうがいい？」

めちやくちゃに胸がかき乱された。

キバリーがやってしまうことは、いつも絵空事ばかりで、それが夢か現実か判らなくなることがあるし、今だってすべて最初からキバリーの見せた夢だと言われたら、有馬は信じてしまうかもしれない。だからそんな冗談は聞きたくなかった。

「い、いいじゃん。ずっといなよ」

「どうやって？」

「ウチに戻るんだよ。親父に言つて、ちゃんと説得すれば」

「もうお別れは言ってきたんだよね」

キバリーにすがり付く親父の姿。

あれは、幻覚じゃなかったのか。

「鉄平はさ、ずっとひばりの死に責任感じてたんだよね。そういうの、もういいじゃん。謝ったら許してくれたよ。もうやること全部やったんだよ」

「——いろよっ——！」

そんなのは、許せなかった。

「まだやってないことあるだろ！？ 遊び足りないだろ！ 終わったらいなくなるなんて違うだろ！ 勝手すぎるだろ！」

「ずっとはムリだよ。お別れしなくちゃいけない」

「いやだいやだいやだ！」

手を振り回す。駄々っ子みたいに。いきなり、こんなのがお別れなんて——

「アリマ」

キバリーの手が、頭に伸びた。

「なら、こつち来る？」

「——」

冷たい暗闇に、ひたと手をつけられた気がして、思わず有馬は仰け反った。

「そういうことだよ。宝探しは自分でしな。アリマは人に何か言われねーと何もできないヤワなやつじゃねーだろ？」

「そんな……僕は……」

花火の衝撃が胸を叩いた。それが自分の鼓動かどうかもある馬は区別できなかった。

きらびやかな光に照らされながら、キバリーが、話は終わりとばかりに、幻想のように遠ざかっていく。

「ま、待てよ……」

有馬は、追いかけた。

追いながら色んな想いが溢れてきた。

キバリーがいたから、色んなことに気付けた。それまで知らないことばかりだった。

セリナがいつも遊んでくれたこと。

祖父のこと。親父のこと。

トールジイのこと、憲ジイのこと。

ヤーコも珠樹も、チャイのことも。

みんな、みんな知らなかった。

それでもキバリーは離れていく。やわらかな笑みをたたえて、近所に遊びに行くみたいで軽い足取りで、追っても、追っても、逃げ水みたいに。

「一人じゃなにもできなかったんだ！」

忘れていたこと。求めていたこと。

有馬は夢想する。

キバリーと並んで釣りをして、どうでもいいことを話して、夕方になって家に帰る。

夕飯のときは、結局一匹も釣れなかったことをお互い馬鹿にして、里子がそれを笑って、親父が二人を馬鹿にする。そんな当たり前の光景を。

胸が潰れそうなほど願い、手を伸ばして、探していた、本当のも

の――

滑走路にあったのは、膝をついた有馬と、花火の光だけだった。

格納庫に戻ってみると宴会はまだ続いていた。

ひどい顔で戻ってきたものだから、トールジイにとっても心配された。

「ほら、とりあえずな？ あっち行こうな？」

野っ原に駐機してあった雷電の傍にまで連れて行かれ、何度もしやくりを上げながら、濡れた声で有馬は起こったことを話した。

「なんだ、あいつ、行っちゃったのか」

落ち着いた様子に戸惑う。まるでいなくなるのが始めから分かっていたようだ。

「こっちの都合なんかおかまいなしだ。気にするだけ損だ。そもそも、最初からいなかったんだよ、あんなやつは」

「そ、んな……」

「考えてもみる。無尽蔵のエネルギーだぞ。自然界の法則が引っくり返る。利用されたら世界中がおかしくなる。あんな滅茶苦茶なやつ害悪にしかならん」

キバリーのことを、そんなふうに、見てただなんて。

「だあ！ わーった！ わーったから泣くなっつの！」

それから先はよく憶えていない。

泣き疲れてまどろんでいた。チャイが来た気がする。撤収作業を見ていた気がする。ごちゃごちゃ騒がしいことがあって、誰かに背負われ、どこかに運ばれ、気がついたら――

気がついたら、空にいた。

雷電のコクピットだった。

「おお、有馬起きたか」

ミラー越しにトールジイが言った。赤く腫れた目をこする。町の明かりが下に見える。昼の遊覧飛行用に付け直した座席は前向きで、

何の負担も感じずに揺られていたから気付かなかった。

「なんで……」

「言つたろうが。負けたらなんでも願いを聞くと。お前さんが元氣ないから、ひとつ元氣を取り戻してやろうという心意氣が分からんか」

「頼んでないよ……」

「そう言うな。とっておきのもんを見せてやろう」

それから、随分長く飛んでいた氣がする。

立駒上空を、雷電は旋回上昇していた。

間もなくそれが始まった。

青い光が、空から落ちてきたのだ。

見上げれば、そこに大きな月があった。空にぽっかり穴が空いて、光が漏れ出しているような。闇と光の境目がはっきりと判り、町を青々と照らしている。

思い出す。今日は、レンズの日――

一年に一度ある、余剰電力補充の日。

日中にやると火事になる危険もあり、日本では夜にしか行われな
い。給電インフラの整った町にもたらされる人為の恩恵。立駒は、
レンズの軌道と地形条件に恵まれ、流星祭りとその日が重なった、
ただひとつの町なのだ。

日を補うにはあまりにも弱々しい光。天を目指したバベルのよう
な途方もない浪費の集積。

それなのに、空を見て、花を見て、月を見て綺麗だと思うように、
単純なくらいそれは心に透き通る美しさを持っている。

「ひとつ、おかしな話をしよう」

トールジイは言った。

「俺が小僧だった時代は戦争も終わったばかりの第一次物資欠乏期
だ。立駒は広いだけが取り得のド田舎もいところで、工業力なんか
無いに等しかった」

「……………」

「なのにだ。ジローさんは空で郵便配達なんて暢気なことやってたんだ。どうやって修理してたと思う？ 燃料は？ 交換部品は？どこから調達した」

まさか。

でも、そんなことって――

思えば、トールジイは、初めてキバリーの力を見せたときも、まったく驚かなかった。それどころか、キバリーの扱い方を熟知しているようで……。

空に、雲がかかってきて、光が遮られる。

不自然な雲。砂糖で作ったわた飴みたいな。

「――あ、ああ、あれ！」

「ふん。そういうこった。あいつは勝手気ままにやるからいちいちにしてられん。あーあ、衛星で撮られてたらどうするつもりだ……」

雲で、町に影絵ができている。

――またくるぜ！ byキバリー

鼻の奥がツンとなって、唇がわなわな震えた。

それは、どちらかと言えば、怒りに近い感情だったようだ。

実にふざけてる。イラスト付きである。鏡餅みたいな顔にボルトみたいな目をつけて、妙にファンシーな字体で、人の気持ちなんかお構いなしで。

「いなくはならんよ、あいつは。またひょっこり出てくるさ」

有馬は食い入るように影絵を見下ろしていた。

それからもずっと空を飛んでいた。

雲が消えるまで、光が弱まるまで、燃料がなくなるまで。

見えなくなるまで、手を振り続けるように。

最終章

装備を確認する。

荷物は多くなくていい。

水筒はいる。飲み水は確保できないこともあるから。

テントと寝袋はいる。地図。鍋。鉛筆。アルミのコップ。携帯コンロと釣竿。火種とナイフ。食糧はちよつとで済む。お金はあまりかからないから。

準備は万端だろうか？

有馬は迷った。

何かを忘れている気がするのだ。

朝もほど良く過ぎた、温かい日の落ちる時間。ガードレールを手にすりにして、小さな道を渡す橋。竹林に囲まれた細い道が向こうにあり、右手には鳥居があつて、古い神社の参道がある。立駒の子供にとつてここまでが遊んでいい場所で、ここから行つてはいけない場所だ。

知らなかったがこの神社は、個人の氏神を祭っているところで、実は私有地らしい。

珠樹は連れて来るわけないし、飯も食ったしトイレも済ませた。リムもフレームバランスも調整して、なんとか走れるようにした無印MTBの強度が気にならないわけでもないけれど、決定的にそうかと言えれば心にとんと落ちてくれない。

きつと些細な事だ。忘れるくらいだから。

そう思つて、有馬はすぐ出発する事にした。

「——待って！」

鋭いブレーキの音とその声に引き止められた。

チャイが肩で息をして、ママチャリに乗って来ていた。

「どうして、黙って、行くのですかっ！」

「誰にも言っていないはずけど」

「有馬のお母様に聞きました。前日に準備していたから、今日あたりに出るんじゃないかと……」

「よくこっちの道だって判ったね」

「こちらの道が、有馬の家から、一番近いですから」

「どちらも西のどん詰まりだから、判断としては間違っていないだろうけど。」

「それよりどうして行くんですか！？ 夏休みあと十日もないんですよ！？」

意味が分からないみたいに有馬は首をかしげ、

「まだ十日くらいあるじゃん？ そんな休みめったにないし」

「有馬は宿題やってないはずですよ！」

「う……………」

「ちなみに珠樹さんもやってません」

見せてもらっても無駄。痛いところを突かれた。けれど、冒険の旅という大儀の前に、宿題など些末事である。有馬は悟りをひらいた（開き直った）。

「ぼくが宿題やなくても、日は昇り、日は沈むんだ」

「……かっこいいこと言ってるつもりですか？」

譲れないものがあるとき、人は無敵になれるのだ（主に世間体とか）。

「じゃ、そういうことから」

「そういうことだからじゃないです！ どこに行くんですか！」

「まず隣町だよ。今どんなふうになってるか見てみたいし、チャイの家にも挨拶に行きたい」

「な——やめ、やめてください！」

「なんで？」

「だって、隣町といつても何十キロあると思ってるんですか……それに危険ですし……あの、それが、今回の目的なんですか？」

尻すぼみ。有馬はにまりと笑う。

「ついでだから。旅つてのはこう、自然の荒波に翻弄されながら花鳥風月を楽しむものだよね。雨降ってるのに出歩くのとかけっこう好きだし。逆境がいいんだよ逆境が」

「……それが楽しいのですか？」

「楽しいよ！」

胸を張って言うてる。

「何も考えないですつと走つてると、気持ちが澄んでくるんだよ。水になったみたいって言えばいいのかな。自分は何者でもないけど、何者にもなれるんだ、っていうすーっとした感じ」

チャイは困惑しているようだった。

「……有馬は、てつきり、もう旅には出ないのだと思ってました」

「なんでさ？」

「キバリーさんがいなくなったから……です」

キバリーがいなくなるのが、どうして旅をやめる理由になるのだ。ふっと笑う。心の底から格好をつける。

「物つてなくならないよな」

「え？」

「ほら、金属とか、有機体も全部、酸化したり腐ったりしてぼろぼろになるけど、結局分解されただけで、その質量が宇宙から消え失せるわけじゃないよね」

バイクの部品を作り、鍋に化け、台風を起こした力。

キバリーのあの力は、汲み上げた石油のように、この町の深い部分から抽出して変化させたものではないか。

最近になって有馬はそう思うのだ。

「それが、どうかしたんですか？」

「人の気持ちも同じだよ」

すべては、もとは違う誰かのものだった。あるいはこの町が吸収

して、記録していたものだった。それが人へ行き渡り、組成を変え、見かけ上では増えたり減ったりしていても、質量をもった物質のよ
うに巡り巡っていただけなのではないか。

ひばりの想いが、セリナに継がれたように。

発生し、枝分かれして、様々なものに影響を与えたように。

「前より行きたくなつたんだよね。この世界にはまだまだ知らない
ことが山ほどあるんだ。今まで見逃してたことも、今なら見つけら
れる気がするんだ」

キバリーのおかげでそれに気付けた。

「だから止めても聞かないよ」

呆れ顔ではない、チャイの事実を従容と受け入れるような表情。

「どうしても、行くのですか」

「どうしても行きたいんだよ」

「付いていつては、だめですか……？」

どきりとした。

切なそうに目を細めている。

「役に立てると思います。訓練を受けました。知識もあります。地
形把握や危険察知はお爺様に頼られるほどです。わたしも、わたし
も……有馬と同じものが見たいです」

不安がにじむ。叩けば折れてしまいそうなほどの。

それは切実な願いだったのだろう。

「ありがとう……でもまた今度に」

「……………はい」

「時間はあるだろ？ これから一生」

「あ——はい！」

それは素直な感情だった。

「チャイは、キバリーになんかもらったの？」

「い、いいえ、なにも」

「嘘だ。柔かなんかもらったろ？」

「貰ってません！ 貰ってないですっ！」

「……………」

町にも心があるとしたら。

気に入った思い出をアルバムみたいに集めて、本に綴じるのが趣味なのかもしれない。

帰ったら、根掘り葉掘り訊いてやろうと思う。

そのまま、何気なく手を振った。

「じゃ、いつてきます」

「はい。いつてらっしゃい」

——そうか、忘れ物はこれだったんだ。

ずっと胸に透き通る、湧き水みたいな言葉だった。

誰かに、いつてらっしゃい、と言われて、旅に出て行きたかったのだ。

旅の門出はいつだって、希望に溢れてなければならないから。

旅の帰りを、待っていてくれる人が欲しかったから。

迷わずベダルを漕ぎ出した。

振り返ってまた手を振ると、チャイもぶんぶん振り返ってくる。

前を向く。

帰ってきてからのことに思いを馳せる。

セリナに旅の話をしよう。そして今までのことを謝ろう。

珠樹にはせいぜい自慢して、またヤーコの嫌味を買ってやろう。

チャイには全部話してやろう。この夏に起こった事、始めからすべてを。

今年の夏も一人旅だ。

最終章（後書き）

一週まわって同じ場所に戻ってくる。

そういう感じを出したくて書きました。

外の世界に旅立ちたい願望を、現実の居場所から逃げ出したいから、なんて後ろ向きな理由で持つて欲しくない。そんな話です。

と言われも、現実逃避つてしたくなります。

それで積極的になれるなら立派な原動力ですけど、多くの場合なんの計画もない妄想や絵空事になってしまい、周りにも認められません。

でもまあ、理解されたいですね。

あんまり考えるとドツボだから、気軽にいこうぜ。人生そんなむつかしくないよ。

というテキトーなテーマなのです。

最後までお付き合い頂き、ありがとうございました。

次作は近いうちに。今度は本屋の話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9628p/>

キバラナ

2011年7月7日03時51分発行